

---

# パックス・アキバーナ ～萌えは世界を救う～

夢前黎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パックス・アキバーナ ～萌えは世界を救う～

### 【Nコード】

N2311U

### 【作者名】

夢前黎

### 【あらすじ】

オタクであることが社会で認められるための必須条件となった世界。

全世界に三十億人のファンを持つアイドル・胡桃は、人を強制的に萌えさせる超能力を駆使して、「世界で一番平和な世界征服」を実現しようとしていた。

一方、主人公は世界トップレベルの高校に入学するほどの頭脳を持ちながら、クタオ（非オタク）であることを理由に今までいじめられてきた。

二人は出会い、物語は動き出す。

敵対勢力との抗争。隠された真実。

敬愛と信頼。

大切な人への想い。

その絆は、世界を織りなす。

第7回MF文庫Jライトノベル新人賞の第二期予備審査で一次通過  
(二次落ち)したライトノベル処女作です。

実はサイトにも同じものを掲載していて、そちらには評価シートも  
載せています。

<http://reiyumesaki.jimdo.com/>  
長編ラノベノ

見やすいデザインだと思う方を選んでいただければと思います。  
す。

## プロローグ

そこは戦場だった。日本兵はほぼ全滅。民間人が銃で敵兵を撃ち払おうとするも、力の差は歴然としている。次々と大人が倒れ、力な子供でさえ遺された銃を手にせざるを得ない状況だ。

そんな緊迫した空間に、何の前触れもなく透き通った歌声が響き渡った。声質はまだ幼い。人々は何かに取り憑かれたかのように動きを止め、恍然として表情を緩める。

やがて歌い手は、一人の青年を従えて姿を現した。

年の頃は十歳前後。黒のショートドレスを身に纏い、長い黒髪を惜しげもなく風にゆだねる姿は神秘的ですらあった。その天使のような美しさを前にして、全ての人間が戦意を喪失し、武器を放棄してその場に立ち尽くす。そして呟いた。

「萌え」、と。

世<sup>せ</sup>歴<sup>れき</sup>一九九九年。

第三次世界大戦の真ただ中で、その少女は歌っていた。

「見てパパ、軍が帰っていくわ」

少女は軽やかに振り返って、後ろにいた眼鏡の青年に微笑みかけた。

「かぐやの歌を聴いて『萌え』ないやつはいないよ。この調子で世界を救おうな」

青年はまだ十歳の娘を持つには若すぎる。パパというのは愛称で、むしろ兄か歳の離れた友人であると捉えた方がしっくりくるような風貌だ。

かぐやと呼ばれた少女は、頷く代わりに青年の腕に抱きついた。白い首筋と滑らかな黒髪が優美なコントラストを描く。

「私が世界を救うのよね。私が戦わないでって歌えば、みんな言う

ことを聞いてくれる。これってすごいことよね。でも、パパ。たくさんの方が苦しんでいるのにこんなことを考えるなんて、私は自惚れ屋かしら」

不安げに見上げる真っ黒な瞳を見つめながら、青年は優しく言った。

「自惚れなんかじゃない。俺なんか本気で、かぐやは天が遣わした天使なんじゃないかって思ってるよ」

「パパったら。発想がファンタジーね」

呆れたように肩をすくめ、少女は青年から離れる。子供が母親の亡骸にすがって泣いているのが目に留まった。見渡しても見渡しても瓦礫の山。戦争が始まる前は幸せだったであろうこの街も、こうなってしまうては元通りには戻らない。

「私が戦争を終わらせる」

自分に言い聞かせるような少女の声に、予期せぬ反応があった。

「だめだ！」

そう叫んだのは、先ほど死んだ母の傍らでむせび泣いていた少年だった。歳は少女と同じくらいに見える。その手には銃が構えられていた。

「戦争さえあれば、ぼくも兵隊になれるんだ！ あいつらみんなぶつ殺してやる！ あいつらのお母さんも殺してやる！ みんな殺してやる！ こんな世界、ぼくがみんな殺してやる！ だから戦争は終わっちゃいけないんだ！ 戦争を終わらそうとするお前なんか

」

「え？」

少女には少年の言葉が理解できない。戦争が終わったら、誰もが私を称えて喜んでくれるのではないの？ 何故この少年は私に銃を向けて？

「かぐや！」

青年が駆け寄るのも間に合わなかった。

「ここで殺してやる！」

これは一つのエピソード。  
そして、新たな物語が始まる。

## プロローグ（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

執筆者のサイト『Re:I』

<http://reiyumesaki.jimdo.com/>

## 第一章 もやし（前書き）

主人公は男の娘です。



## 第一章 もやし

僕の家にはテレビがなかった。

目の見えない母を氣遣って、父がそう決めたのだ。

わがままを言えばお母さんを傷つけてしまう。そう思って、僕はずっと我慢してきた。アニメの話題についていけなくて学校で仲間外れにされたことも、声優を知らなくて馬鹿にされたことも、家族には言わなかった。

世界は今、萌えを中心に動いている。

第三次世界大戦終結後の萌え文化の広がり、戦後四十四周年を迎える今日こんにちになってもとどまるところを知らない。戦前は萌えの愛好家を「オタク」と呼んで差別していたそうだが、今はオタクであることが当然の世の中。わざわざ名称を必要ともしないほどのマジヨリティーだ。あえて挙げるとすれば、萌えの発信地である日本が自らを誇る際に、しばしばオタクという言葉が使われる。大和魂はオタク魂へ、大和撫子はオタク撫子へと進化を遂げたのだ。

反対に、萌えをたしなまない僕のような人間は「クタオ」と呼ばれる。ただ単にオタクを逆さまに読んだだけではない。萌えの対義語である萎えから「クタつと萎れる」というイメージが生まれ、「感性がクタつと萎れている人」という悲惨な意味でクタオと呼ばれるようになったのだ。小四の時、初めてクタオと言われた日は今でもよく覚えている。だって泣いたもん……。

萌えは平和の象徴だ。戦時中、彗星のごとく現れた謎の歌姫が萌え萌えなアニソンで人々の心を和ませ、それが世界規模の厭戦気分を作りだし、結果的に戦争が終結したという都市伝説がある。そもそも「謎の歌姫」って辺りから怪しいし、いくらなんでもこれはあり得ないと僕は思うけど、世界中に目撃者がいるのは変えようのな

い事実。だから萌えが世界中から支持を集めているのは当然だと思う。

僕だって、家に映像媒体があつたらきつと立派なオタクになっていただろう。せめてパソコンくらいあつたらよかったのだが、新聞すら買わないでお金を節約する家計状況で、おねだりなんてできるはずがなかった。働く時間を惜しんでラブラブする両親を見ていると、本当に幸せそうで、僕が二人の生活を乱すのは許されないような気がした。

チャイムの音が昼休みの到来を告げた。

生徒たちは教科書をしまい、あるいは机上に放置して、各自気の合うクラスメートと昼食を共にするべく散らばっていく。

みんないいなあ、もう友達できたんだね。今日もアニメの話で盛り上がるのかな。クタオの僕には友達がいらないから一人でお弁当だ。寂しくない寂しくない。今日のお弁当は僕が腕によりをかけて作つたもやしチャーハンだよ！……さみしい。

高校入学からわずか四日。僕は早くも浮いていた。

ここ、都立虹間高校（通称虹高）は、世界屈指の進学校として有名だ。

僕はクタオクタオと虐げられているうちに、どんどん内気な性格になっていった。アニメも見ない、友達とも遊ばない僕は、見事なガリ勉になった。そんなイタくてクタオな僕に、中学の先生は優しく「虹高、受験してみたら？」と言ってくれたのだ。虹高に行くとすると、実家から離れて都会で一人暮らしをすることになる。両親は反対したけど、僕は先生の期待に応えるため、虹高を受験した。そして今に至る。

虹高なら、もしかしたらみんなもガリ勉かも知れない。そんな期待もあったけど、現実はそう甘くなかった。やっぱりみんなはちゃんとしたオタクで、僕だけが感性の萎れたクタオだった。

さすがにまだいじめられたりはしなけど……あれ、女の子がこっち見てる。

「あの子、乃木坂さんだっけ？ 今日も一人でごはん食べてる」

「輪に入れてない感じだよね。きつとクタオなんだよ、そういうオラ出てるし」

「しーっ、かわいそうでしょ。声かけてあげた方がいいのかな？」

「はあ？ 男子に？」

「男の子だったの！？」

チャーハンこぼした。

「テラワロスww 腹筋返せww」

「男子の制服着てコスプレしてるんじゃないの！？」

「いや、男子の制服着てたら普通男子でしょ」

「声も可愛かったし！」

「でもあたし、男子トイレに入つてところ見たもん」

「うわー、鬱だ」

「メシウマww」

黄色い声を上げる女子二人。僕は恥ずかしくて、聞えないふりをしてお弁当を食べ続ける。こんな体はもういやだ。いつになったら成長期が訪れるのだろうか。クタオで成長不良なんて、コンプレックスを持つなと言う方がおかしい。

惨めな気持ちでブロッコリーを口に放り込んだ時、一際大きな笑い声が上がった。クラス会長の栗本さんがジョークを言ったようだ。その周りで男女十名弱の生徒が笑いこけている。

栗本木梨枝きりえ 全ての漢字に「木」が入った特徴的な名前を持つクラス会長は、早くもクラスのアイドル的存在になっていた。彼女はまさにオタク撫子の鏡のような人で、式典の日以外私服着用が認められていることを最大限に活用し、流行最先端のメイド服を着て登校してくる。制服を着ていた入学式の日でさえ輝いて見えたのだから、メイド服を装備した栗本さんは僕には眩しすぎるほどだ。しかもとてもフレンドリーで、クタオの僕にも分け隔てなく接してく

れる。僕とは違う世界に……僕が憧れる世界に住んでいる人なのだ。

青臭いブロッコリーを飲み込んだ時、担任の先生が教室に入ってきた。

「実力テストの順位が小広間に貼ってあるぞ。確認しておくように」

実力テストとは、入学早々行われた残酷な学力試験のことだ。中学で優等生だった僕たちに、虹高での自分の位置を把握させるという目的らしい。地元では万年トップだった子が突然最下位になったりするんだから、恐ろしい話である。

生徒がぞろぞろと廊下に出ていく。結果が気にならないでもないけど、どうせ今行っても人混みでストレスがたまるだけだろう。そう思っ、僕はもやしチャーハンを食べ続けることにした。うん、我ながらおいしく出来てる。

「行かないの？」

ふいに声をかけられて顔を上げると、栗本さんが机の前に立って僕の顔を覗き込んでいた。大きなリボンで飾られたサイドテールがゆらゆらと揺れる。

「えつと、僕はあとで……」

栗本さんは気配り上手な人らしく、僕が孤立しているとちよくちよく話しかけにきてくれる。それがクラス会長としての義務的行為だと分かっているにも、僕は嬉しかった。今僕に話しかけてくれるのは彼女だけだし、彼女の明るい笑顔には人を元気にする力がある。だけど、僕の存在が迷惑をかけているようで、心苦しくもあった。

「人混みが苦手なの？」

「まあ」

「そっか……」

栗本さんは残念そうに肩を落とすと、去っていかずに手をもじもじさせた。ためらうようにこちらを見ている。何だろうと思っ、突然右手をつかまれた！ えつ、何！？

「じつ、自分からみんなの中に入っていかないとダメだよ！ きき、キリエも行くから、乃木坂くんも一緒に行こう？」

右手越しに栗本さんの手が震えているのが分かる。出会ったばかりで素性も知らないクタオの手をつかむのは、相当勇気のいることのはず。それでも彼女は僕をクラスに溶け込ませようとしているのだ。僕は少し感動した。

「分かった、行くよ」

「わあ、よかった！」

そう言う栗本さんは、本当に嬉しそうである。きっと彼女は、少しでも早く僕が高校生活に馴染むことを、心から望んでくれているのだろう。僕も嬉しくなっただけで笑顔が返すと、栗本さんはおひさまのような笑顔をくれた。

まだ僕がクタオと呼ばれる前、確か小学一年か二年の頃だと思うけど、学級委員長になった年があった。その時の僕は、いじめられっ子の手を取って一緒に歩くような、紛れもない優等生だった。それが今では逆の立場。何とも言えない無力感を覚える。

廊下を抜けて小広間に出ると、そこはすごい人だかりだった。一枚の順位表をみんなが見ようとするので当然だが、自分も今からその中に入っていくのかと思うと憂鬱だ。

「うわあ、思ったより混んでるよ。やっぱりあとにする？」

僕のことを気遣ってか、足を止める栗本さん。そんなに僕って気弱に見えるのかな。これ以上心配をかけるわけにはいけない。

「せっかく来たんだし、今見てくるよ。栗本さん、ありがとう」

感謝をこめて微笑むと、栗本さんは「ううん」と言っただけにかなだ。教室ではいつも潑刺としているけど、素は案外照れ屋さんなのかも知れない。それとも、やっぱり僕がクタオなのが原因？ きつとそうだ。迷惑かけてごめんね。

僕は人山の後ろに立つ。テレビを見ずに育った僕の視力は軽く二・〇を超えるが、人の頭で順位表自体が見えない。頑張っつつま先立

ちを試みていると、誰かが「あつ」と声をあげて、後ろを指差した。それにつられて他の人も後ろを見る。僕の足の痺れと比例するように、ざわめきが大きくなっていった。

何だろう。

振り返ると、そこには六歳くらいの女の子が立っていた。フリフリのドレスにウェーブのかかった長い髪。まるで絵本から飛び出してきたお姫様みたいだ。非現実的くらい愛くるしい姿をしている。

「ふみゆ？」

一瞬の静寂。

小さな口から漏れたその声が引き金となって、群衆は歓声を上げ始めた。

「萌えーっ」

「本当に虹高にいたんだ！」

「くるたんマジ萌えるうつつ」

目を輝かせてうつとりするみんなの様子は、明らかに尋常ではない。超人気子役か何かだろうか。ここでドラマの撮影するなんて聞いてないけど……。

女の子がてけてけ歩いてくるのを見ると、生徒たちは順位表から離れて拡散していった。僕は意味も分からず押し流される。女の子が順位表に近づくのを見て初めて、彼女に道を空けたんだと気づいた。

女の子は順位表を確認すると、その可憐な横顔に笑みを広げる。くるりと振り向いて一言。

「ボクいちばーんっ！」

生徒は一斉に拍手を送った。つまりこの子は虹高の生徒なの？ 幼女なの？

女の子が愛想を振りまいている一方で、僕は混乱していた。

「みんなありがとー！　ところで、二位の乃木坂<sup>ぎん</sup>吟ってだあれ？　いたら手あげて」

あ、それ僕……。

手を挙げるべきかどうか迷っていると、クラスメートの池田くと目が合った。

「こいつですよー」

「うわっ」

ニヤニヤ顔で幼女に突き出されてしまった。

女の子は興味深げに僕を見上げる。新しいおもちゃを見つけた時のような顔だ。

「せーきの大天才であるこのボクと僅差で二位につけるなんて、アタマいいんだね！ ごほうびに、にゅーん！」

両腕を上突き出して満面の笑みをプレゼントしてくれた。状況が把握できない。可愛いんだけど、今の僕には苦笑いが限度だ。

その反応に、何故か幼女はかなり驚いた表情を浮かべた。

「もしかして、乃木坂は感じないの？」

何を？

きょんとしていると、女の子は僕にしゃがむように合図した。

そして、僕の耳に手を当てると、今までより幾分か低い声でこう囁いた。

「放課後、体育館裏に来て。誰にも見つからないようにね」

それだけ言うと、僕に質問させる間も与えずその場を離れる。

「ボクはB組に帰りまーす！ みんなもベンキョーがんばってねー！」

この声はきつと営業ボイスなんだろうな。後ろ姿を見ながらそんなことを思った。

謎の美少女が立ち去った後、僕は名前も知らない生徒たちからもすごい非難を浴びた。

「萌えに対する冒瀆だ！」

「何で呼ばれたときすぐに返事しなかったんだよ！」

「あんな至近距離から『にゅーん』してもらっておいて苦笑いなん

て！ ふざけてんの？」

「嫉妬した！ 氏ね！」

みんなすごい剣幕だ。死ねとまで言われてしまった。怖気づいていると、ずっと僕のことを待っていたらしい栗本さんが、よく通る声で助け船を出してくれた。

「よってたかって責めたら乃木坂くんがかわいそうだよ。話を聞いてあげようよ。ね？」

彼女の優しさに免じてか、みんなは黙って僕の言葉を待つ。

えっと、何か言わなきゃ。言わなきゃ殺される。

「あ、あの子誰なんですか？」

「はあー！？」

全員が叫ぶので、思わず肩をすくめてしまった。こういうおどおどした態度が馬鹿にされる原因なんだって分かっているのに……。

栗本さんの隣にいた人なんか、真っ青になって えっ、気絶した！？ 僕そんなひどいこと言っていないよね！？

池田くんが呆れたように言う。

「いや、だって毎日CMに出てるじゃん！」

「僕んちテレビなかったから……」

「世歴二〇四三年のこの時代に、テレビがないだつ！」

今度はショックを受けている。よく表情が変わる人だ。

「そうか、いろいろ大変なんだな……。まあ、家帰ったら『くるたん』でネット検索してみろよ」

「……実はパソコンもないんだ」

「ええええええ！？」

池田くんは悲痛な面持ちで僕を見た。何かもうすっかり憐れまれている気がする。

「じゃあ教室のパソコンで見せてやるよ！ いくらクタオでも、くるたん知らないなんてかわいすぎるぜ」

そついうが早いか、池田くんは教室に戻っていった。慌てて追いかける僕。



みんなが夢中になる『くるたん』とはいかなる人物なのか。  
これはクタオから卒業するチャンスなのかも知れないと、少し胸を弾ませた。

パソコンが立ち上がるまでのわずかな間に、池田くんから聞いたこと。

「俺のフルネームは池田綿三めんとつ！ 略してイケメンと呼んでくれ」  
えっと、遠慮しておくね。

「くるたんは通称で、本名は東条胡桃くるみ。ああ見えても俺らと同年。何でも、昔かかった病気で成長が止まったとか……」

かわいそうに。辛いだろうなあ。

「くるたんは国民的、いや、世界的アイドルなんだぜ！ 三十億人のファンがいる」

さ、さんじゅうおく……。

「ちなみに俺はオフィシャルファンクラブ会員七四八番だ！」  
三桁ってさりげなくすごい。

「くるたんはいろいろやってるけど、一番目に挙げるとしたら歌手だな。声優俳優モデル作曲作詞、一通り経験あるはずだ。ネットでの活動が大半で、世界中に萌えを配信しているってわけ」

そんな偉人を知らなかった自分の無知に呆れ果てる。故郷は本州西端の岩川県、バスも通らない田舎で、テレビも新聞もない世間離れた生活を送っていたため、僕は流行や大衆娯楽に疎い。それは覚悟していたつもりだけど、こんなに常識がないとは思っていなかった。

「芸能活動も忙しいだろうに進学して大丈夫かって噂もあるけど、まあくるたんは天才だから、両立していく自信があるんだろ。というわけでパソコン立ち上がったぞ」

池田くんは僕に席を譲った。座りながら画面を見ると、『くるたんのおもちゃばこ』というサイトが表示されている。

「これが公式サイトだ。なあ、萌え萌えだろー？」

桃色を基調としたファンシーなデザインだ。東条胡桃を模した萌えキャラのイラストが貼ってある。普通の芸能人だったら「イタイ」と一蹴されてしまいそうだが、彼女に限っては元がアニメ的容姿なので違和感がない。アクセスカウンターを見ると、今日だけですでに六億のアクセスがあった。

「これが……萌えか……」

これは確かにハマリそうだななんて思っていると、後ろから栗本さんに声をかけられた。

「はい、もうおしまいだよー」

「へっ？」

「昼休み終了十分前にはパソコンの電源を切り、元通りカバーをかけておくこと。って書いてあるでしょ？」

壁にかかっている『パソコンの使い方』には確かにそう書いてある。そんなところまで熟読しているとは、さすがクラス会長。僕と池田くんはその手順に従ってパソコンをしまい始めた。

「乃木坂くんは、東条胡桃のファンになった？」

栗本さんは唐突にそんなことを訊いてきた。

「え……うつん、ただだけど」

ためらいながらも正直に答えると、彼女は静かに「そう」とだけ呟いた。生温かい笑顔からは感情が読み取れない。てっきり「ファンになってないなんてありえない！」とか言われるんじゃないかと思っていたので、この反応は意外だった。

「いいんだよ、乃木坂くんは乃木坂くんのままで」

なにその意味深なセリフ。

戸惑う僕を置いて、彼女は自分の席に戻っていった。

放課後、僕は言われた通りに一人で体育館裏に向かった。体育館裏と聞くと、中学校で「クタイ国賊」と罵られてリンチされたことを思い出す。嫌な響きだ。いくら僕が運動音痴でも、幼女に負けたりは

しないはずだけど。

約束の場所に彼女はいた。フリルやレースで飾られた少女の存在は、薄汚れた体育館裏には驚くほど場違いだった。そこだけぼんやりとした光に包まれているような錯覚に襲われる。東条さんは、僕の方を見て小さな手を振った。

「ボクが乃木坂を呼んだのは、テストをするためのの」

「テスト？」

「そ。テストはトクイでしょ？ 今からボクがすることを、目を離さずにずっと見ててね！」

そう言うと、彼女は「みゃー」とか「ぴよぴよー」とか、可愛いんだけど意味の分からない奇声を発しながらポーズを取り始めた。正直、どんな反応をしたらいいのか分からない。

三分くらい経っただろうか、東条さんは疲れた顔に喜色を浮かべた。器用な顔だな。少し息が上がっている。

「乃木坂は、なんともない？」

「えっと……どうなると『なんともある』状態なの？」

「ボクのが可愛すぎてほった落ちそうになったら。よーするに、ボクに萌えたら！」

「なんともないよ」

僕はその時の彼女の顔を一生忘れないだろう。

くりくりした大きな瞳をさらに大きく見開いて潤ませたかと思うと、次の瞬間には泣き出しそうな笑みを称えて、今までとは違う口調でこう言ったのだ。

「ボクはずっと、お前のような人間がほしかった」

第一に、東条胡桃は「デューヴァ」という人造人間である。

第二に、東条胡桃は世界征服を目指している。

第三に、歌姫救世伝説は事実である。

まず僕は、上記の三つを前提として話を聞くことを強要された。

「そうじゃないと全然話なんかできないからな。あ、あと、この話

は他言するなよ、いちおー秘密事項なんだから」

「分かったけど……東条さん口調変わってない？」

「これが素だ」

素の東条さんは、見た目に反してふてぶてしい喋り方をする。

「乃木坂にしか素で話せないんだからな！　ありがたくハイチョーしろ！」

少し舌足らずなところが可愛らしい。

世歴一九九七年、戦前から萌え産業の頂点に立っていた大手企業カラープロダクションの色川社長には、二十歳になる息子がいた。

息子　色川拓也は二ートだった。

彼は孤児院を運営する叔母夫婦のもとで非生産的な生活を送っていた。

そんなある日、彼は近くの雑木林に謎の発光体が落ちるのを目撃した。叔母に話してもアニメの見すぎと言われる始末だったが、気になった彼は一人で確かめにいく。そこには、この世のものとは思えないほど美しい黒髪の少女が倒れていた。まだ十にもならない子供だった。

少女はアニメの展開のように記憶を失くしていた。色川拓也は彼女を「かぐや」と名づけ、孤児院で面倒を見てやった。無気力だった彼の生活に、色彩が戻ってきた。

「何だその顔は」

東条さんは僕の怪訝そうな顔を見て話を中断した。

「ウソだとも言いたいのか？」

「……言いたいけど、やめとく」

「ウソだったらもつとうまい話を作るぞ」

「それもそうだね」

かぐやの声、特に歌は不思議な効能を持っていた。

歌を聴いた者は皆萌えたのだ。

萌えを軽蔑する者も、怒り狂った者も、たちどころに萌えてしま  
う。

色川拓也は、物理的要素以外の何かが働いていると仮定し、その  
力をMP (Moe Power) と名づけた。

そして第三次世界大戦勃発。

色川拓也はかぐやに、戦地で歌を歌って世界を平和にする計画を  
提案した。始めは渋っていたかぐやだったが、自分だけが世界を救  
えるというロマンに惹かれたのだらう、ついに計画を実行に移した。

色川はかぐやを愛していた。それは父性愛でも少女愛でもなく、  
純粹なる「萌え」の魂だった。強すぎる萌えは崇拜心を生む。彼は  
己の中で、かぐやを神に近いものへと昇華させていた。世界を救  
えば、彼女は救世主として崇められる。新世界の神にもなれる。皆  
が共通してかぐやという一人の美少女を崇める世界。アニメ的  
楽園を、彼は夢見ていた。

しかし悲劇は訪れる。終戦間際、かぐやと色川拓也は錯乱した民  
間人に銃撃された。色川が目覚めると、そこは病院だった。かぐや  
も一命を取り留めたが、目覚めることを忘れたように眠り続けた。

かぐやの寝顔を見つめながら、色川は誓った。

MPを使って世界を統治しよう。

かぐやが果たせなかった夢を、この命が尽きるまでに必ず実現さ  
せよう、と。

それはかぐやの夢などではなく自分の願望でしかないのだと気づ  
くのは、まだ先のことである。

「萌えというのは、ひじょーに便利な位置にある」

「どうのこと？」

「人類の戦いの歴史にはシューキョーの影が見え隠れしているだろ  
？ 信念の相違、これこそが人類の脅威。でもこればかりは抑えつ

けて統一することもできない。じゃあどうするか。そこで萌えの出番だ。戒律の厳しい一神教でも、萌えはシューキョーじゃないから気兼ねなく夢中になれる。萌えは、シューキョーの異なる人間が神を越えてつながれる、新しい概念なんだ。浅く広く世界中を包み込む新素材、人類の進化によって生み出された最終自己防衛装置、それが萌えなのだ！」

幼稚園児の声で壮大な話してる……。

亡くなった父からカラープロダクションと莫大な財産を受け継いだ色川は、企業の再興を図るかたわら、優秀な研究者を雇い、かぐやのクローンを作ろうとしていた。

だが、色川が結婚して子供をもつけるほどの月日が経っても、かぐやのクローンは生まれなかった。研究者が出した結論はこうだ。

かぐやは地球の生命体ではない。

だから地球の重力下ではクローン胚は成長しない。

研究者たちはやけになって言ったのかもしれないが、色川は大真面目にこれを受け止めた。すなわち、空から落ちてきた発光体はやはりUFOだったのだと。

「ええ！？ かぐやさんは宇宙人だったってこと？」

「あくまで仮定だがな。まあ、うちゅーじんくらいいいないとMPの説明がつかないし、いいじゃん、うちゅーじんってことで」

真実はどうであれ、物理法則では説明のつかない力を持っていることは信じよう。かぐやさんは実際に、萌えで戦争に対抗したのだから。

かぐやが眠りについてから十年経った。

かぐやのクローンを諦めた色川は、新たな計画を立てた。かぐやの細胞からMPを発生させる特定の遺伝子を抽出し、それを組み込んだ美女のクローンをかぐやに代わる歌姫として誕生させるとい

ものである。彼はこの人造人間をディーヴァと呼んだ。

もちろんクローン人間生成は大罪である。これを揉み消すだけの資金と人脈があったからこそ、この計画は成り立ったのだ。カラープロダクションの裏社会での影響力は、すでに揺るぎないものとなっていた。

その間にも、カラープロダクションは、戦争で破壊された世界中の文化の隙間に萌えを浸透させていった。

「これ、犯罪だよな」

「そう、犯罪だ」

「……」

「告げ口したら、カラプロの刺客がお前を消すだろう」

「……聞かなければよかった……」

「ボクはずっと誰かに言いふらしたかったんだ。あーすつきりする

ー」

後戻りはもうできない。

誕生したディーヴァたちには、カラープロダクションの名にあやかっ  
て、色名が入った名前が送られた。だが、計画発足から十数年が経過しても、MPを持つディーヴァは現れなかった。失敗作のディーヴァたちは、何も知らないまま三歳で一般人へと回歸した。これは、人道的視点を捨て切れなかった色川の配慮でもあった。

そんな中、二十三年の眠りを終え、かぐやが覚醒した。実年齢は三十を越えるはずの彼女の身体は、十代後半の若さを保っていた。色川は狂喜乱舞して、これでディーヴァなどという紛い物を使わなくて済むと安心した。ところが、かぐやは身体は大人でも心は十歳のままだった。

どうしてまた歌わなければならないの？ あんなに痛い思いをするのに。

その言葉に、色川は嘆き悲しんだ。神々しいあの歌姫はもういな

い。今ここにいるのは、ただの臆病な少女だ。

色川は、後遺症が残るかぐやを幽閉し、再びディーヴァの製造にいそしんだ。

今度はもつといい子に育てよう。

それでもかぐやを自由にしなかったのは、まだ彼の中に理想の萌えとしてのかぐやが残っていたからかも知れない。

数年後、かぐやは色川の一人息子純人<sup>すみと</sup>と駆け落ちし、姿をくらました。

「え、そこさらつと通り過ぎたけど、駆け落ちしちゃったの？」

そんなあつさり駆け落ちされて、色川さん、いたたまれない感じ。

「うん。それでかぐやを使った世界征服は完全に不可能になって、ディーヴァを作るしかなかったんだ。パパ……あ、色川しゃちよーのことな。パパはすっごく落ち込んだらしい。でも、その次の年ボクという希望の星が生まれたんだ！」

東条胡桃は、研究員東条胡都<sup>こと</sup>のクローンから作られた最終世代のディーヴァだった。この世代が駄目なら、この方法はいたずらに人造人間を作ることと変わらないとして、一時中断さえ考えられていた。

彼女も他のディーヴァと同様に三歳の時点ではMPが見られなかったが、東条博士が親として世話をしていたため、六歳になってからMPが発現したことが分かった。

他のディーヴァも六歳になればMPを得たのか、それとも胡桃だけが特別だったのかは分からない。ただ一つ色川に言えたのは、胡桃を世界的アイドルに育て上げ、萌えで世界を統制するという目標ができたということ。それは一種の世界征服。誰一人犠牲にしない理想的手段。

計画発足から、二十年近くが経過していた。



胡桃は東条博士に似て聡明で、色川の大志をすぐに理解した。類まれなタレント性が、かぐやより弱かったMPを見事にカバーし、彼女はあつという間に大スターの座にのし上がったのだった。めでたしめでたし。

「最後の方はただの自画自賛だったような……」

「何を言っている、事実を述べただけだ。で、今から本題に入るが」

「今までののは前置き!？」

これ以上どんなファンタジーが待ち受けているというのだろうか。うろたえる僕に、東条さんはビシッと指を突き付けた。

「ボクはお前がほしい」

その声がやたらと真剣だったので、思わずアクションも忘れて彼女を見つめる。東条さんは僕の視線に気づくと、真っ赤になつて手を振り回した。

「な、何見てるんだバカ! 変な意味で言ったんじゃないぞバカ! 期待するなよバーカ!」

一人でばたばた慌てふためいている東条さんは、腕が回るぜんまい仕掛けの人形のように、見ていて面白い。やがて動き疲れたのか、ぽてっと腕を落として頂垂れた。垂れかかった髪の毛の奥から、外見年齢にそぐわない物憂げな表情が覗けてどきつとする。

「ボクの周りの人間は、MPを使うとすぐにのぼせて、まともに話だつて出来ない。でも乃木坂にはMPが効かないだろ? ボクはずつと願つてた。誰かとふつーにしゃべつてみたいって」

誰かと普通に喋ることが、世界に三十億のファンを持つスーパーアイドルの願い。

そっか。僕と同じなんだ。

ただ輪に入れてほしくて、きっかけを探してる。

遠い世界で威張っていると思っていた彼女が、すぐ近くに感じられた。

「つまり、友達になれってことだね！」

「ともだち？」

東条さんは、初めてその単語を聞いたかのように繰り返した。

「そっか。ボク、ともだちがほしかったのか」

そう呟いて、大きな瞳で見上げてくる。

「乃木坂、ボクのともだちに……」

おずおずと差し出される小さな右手。僕も手を伸ばして

「やっぱりだめええええ！」

思い切りはじかれた。

「アイドルはみんなのものだ！ 一人の人間をひいきするなんて許されない！……でも、下僕ならだいじょーぶだ」

それはつまり、僕に下僕になれと？ 大真面目に言っているのが怖い。

「この学校、バイト禁止だよ？」

「下僕はバイトではない。なぜならムキキューだからだ」

無給の下僕って……それは奴隷って言うんだよ。

「もう逃げられないぞー。秘密事項をベラベラ喋ってやったからな！」

「あの前置きは拘束手段！？」

勝ち誇ったようにけらけら笑って、東条さんは僕に抱きついてきた。身体が幼児だから、異性に対する意識とかもないんだろうか。

僕は戸惑ったが、彼女を突き放したりはしなかった。

だって東条さん、本当に幸せって顔してるんだ。

「MPは効かない、アタマはいい、最高の下僕じゃないか！ 乃木坂、ボクのげぼくーっ！」

どうして僕にこの笑顔を無下にすることができようか。

世間の鼻つまみのクタオに会えて喜んでる。

僕なんかでいいのなら。

違う。僕じゃないと駄目だから。

下僕にでも何でもなつてやる！

「乃木坂ーっ、ばいばーい！」

それから数分後、東条さんは精悍なガードマンに連れられて帰っていった。ガードマンの前ではぱっとアイドルモードに切り替わるあたり、プロの心意気を感じる。

そう言えば、ガードマンでもMPにかかればデレデレになってしまうのか。それを考えると、東条さんはよく今までそんな環境で耐えてきたと思う。自分を囲む人々が皆デレデレしている光景なんて、想像するのも恐ろしい。

校門へ向かいながら、「下僕」の仕事について考えてみた。

跪いて主人の足をなめる。

鞭で打たれる。

過労死する。

……。

下僕の何たるかを学ぶため、帰りがけに本屋で『スーパード下僕道』（七四〇円）を買った。これで少しでもいい下僕になって、東条さんを支えてあげるんだ。

## 第一章 もやし（後書き）

読んでくださってありがとうございました！

執筆者のサイト『Re:I』

<http://rei-yumesaki-jimdo.com/>

## 第二章　びんく

虹高から歩いて十五分という便利な1Kアパート。その二〇二号室のドアの前に、着物を着た女性が立っていた。表札をじっと見つめる様子はまるで静止画のよう。背筋をぴんと伸ばして、微動だにしない。

問題は、そこが僕の部屋であるということだ。

何故彼女はあれほどまでに僕の名前を凝視するのだろうか。見知らぬ来訪者に戸惑い、階段の下で足を止めてしまう。

その時僕は、このアパートの家賃が破格の安さになっていた理由を思い出した。ここでは、外出している間に勝手にシャワーを使われたり、冷蔵庫に覚えのない食品が保管されていたり、まるで誰かに寄生されているような現象がたびたび起こるのだという。大家さんはタチの悪い悪戯だと一蹴していたが、そのうち幽霊の仕業だと噂されるようになり、借り手がなくなってしまうらしいのだ。

あんなに明瞭に見えている彼女が幽霊だとは思えないが、たとえば幽霊であろうと無視するわけにはいかない。僕は幽霊と違って、ドアを通らなければ部屋に入れないのだから。

「あの」

内心どきどきしながら声をかけると、女性は能面のような顔をこちらに向けた。

「貴方はこの住人なの」

ひどく抑揚のない喋り方だったので、疑問形で訊かれたことを理解するのに二秒を要した。空気に溶け込んでしまいそうな声質なのに、階段下の僕まで不思議とはつきり声が届く。

「そうです。僕に何かご用でしょうか？」

「ええ」

急いで階段を上がり、改めて彼女と顔を合わせた。

歳は十代後半。おかっぱがよく似合う、日本人形のような綺麗な人だ。身長は僕よりずっと高く、一六七センチくらいだろうか。こんなに近くにいるのに、ひどく存在感が欠けている。失礼ながら、幽霊の方がまだ存在感があるかも知れない。

「私は高野透<sup>たかのとおる</sup>。以前この部屋に住んでいた者よ。実は忘れ物をしてしまつて」

「ああ、もしかして着物ですか？」

「話が早くて助かるわ」

このアパートにやってきた初めの日、荷物の整理をしていた僕は、押し入れの隅から着物と……女性の下着を数着見つけた。何と言つても下着なので、人生経験の浅い僕には大家さんに「僕の部屋にブラジャーが」なんて言う度量はなく、見て見ぬふりをしていたのだ。持ち主が見つかつてよかった。

「上がつて忘れ物を確認してください。引っ越してきたばかりで、まだダンボールだらけなんですけど」

「邪魔します」

高野さんを引き連れ、居間兼寝室へと向かう。布団は綺麗に畳んでしまつてあるので、人を入れることに抵抗はない。

「その押し入れの隅に置いてあります。き、着物が」

「あつたわ私のパンツ」

僕の配慮は全くの無駄だった。

「ありがとう。てつきり廃棄されてしまつているかと思つていたのに」

無表情に見えるが、彼女なりに喜んでいるのだろう。

「この柄、気に入っていたの。いちご柄」

と言つて指差すのは可愛らしいパンツ　　つてうわ、見ちゃだめだ！

「迷惑をかけてしまつたわね」

「い、いえ」

そつ思つのならせめて下着を着物の下に隠してほしいです……。

用事が済んだ高野さんは、衣類を大事そうに抱き直し玄関の方へ歩いていく。帰るのだと思って後についていくと、彼女はドアの手前でふと立ち止まった。

「一つお願いがあるの。もしどこかで手書きの地図を拾ったら、切り刻んで捨ててほしい。詳しくは言えないけれど、人の手に渡ってはいけないものの。それと……」

……あれ？

待てども待てども続きが来ない。たつぷり五秒が経過し、僕の方から何か言つべきなのかと焦り始めた頃、ようやく彼女が口を開いた。

「これを貴方に言つていいのかどうか、今すぐには判断できない。一日待ってちょうだい。もし必要なら、また貴方の前に現れましよう」

それだけ言つと、高野さんはドアノブに手をかける。長居をして追求されたくないのだろ。言外に、質問しても無駄だと告げている。

「都会暮らしは危ないわ。吟くんは特に、気をつけて」

「あつ……」

別れの言葉を言う暇もなく、高野さんはするりと外に出ていってしまった。あまりに静かに動くものだから、ドアの開閉音さえ聞こえない。

残ったのは、彼女がいた時とそう変わらない静寂だった。

僕は困惑していた。しかし不思議と嫌な印象はなかった。彼女は表情に乏しい人だったが、一貫してどこか僕を気遣っていたように感じる。

ひよっとしたら、僕たちは以前会ったことがあるのかも知れない。例えば、僕が覚えていないくらい小さい頃に。高野さんの態度は、初対面の人に対するそれではないような気がするのだ。

とは言え、いつまでも彼女のことを考えていても仕方がない。そろそろ僕の日常を再開させなければ。

一人になった部屋で着替えをすまし、七時まで予習。それから晩ごはん（今日は鯖の味噌煮、ほうれん草のおひたし、きんぴらごぼう、フルーツヨーグルト）を作り、おいしくいただいた。家族で暮らしていた時は父と交代でご飯を作っていたけど、毎日一人で作るのも意外と苦ではない。むしろ料理の腕が上がっていくのが分かって楽しいくらいだ。

十時まで実力テストの見直しをしてお風呂に入り、十二時まで『スーパードラッグ』を読む。

『下僕たる者、常にご主人様の状態を把握していなければなりません。身体の調子はもちろん、些細な気分の変化も察知し、ご主人様の健やかな生活をお守りしましょう』

ふむふむ。

『下僕式健康チェック！』

主人様のいとしい御足を軽く支え、円を描くようにお舐め申し上げます。足を舐めることでご主人様に満足感をご提供できるばかりか、味でご主人様の健康状態も分かるのです』

足を舐めるって健康チェックのためだったのか。勉強になるなあ。

十二時になったらすぱと読書をやめて寝た。翌朝は六時に起きて朝ごはんとお弁当を用意し、七時半に家を出た。

我ながらよく出来た生活スタイルだ。

教室に入ると、栗本さんの伸びやかな声が迎えてくれた。

「おはよう、乃木坂くん」

僕が教室に来るのも大分早いけど、一番に来ているのはいつも栗本さんだ。さすがクラス会長。

席に着き、机に勉強道具を広げる。暇さえあれば勉強してしまう自分は、すっかりガリ勉が板についてしまっているようだ。栗本さんはちゃんとライトノベルを読んでいて偉いなあ。



彼女が読んでいる『なんだただのクロマニヨン人か』は最萌えSF大賞受賞作らしいし、僕も読んでみたいのだが……やっぱり無理だ。昨日『スーパードラマ』を買ったから、娯楽費はもう出せない。しかし後悔の気持ちは一切なかった。立派な下僕になることは、僕の最優先課題だからだ。

カリカリ。ペラリ。カリカリ。しばらく二人きりの空間ができる。手を止めたら栗本さんと何か話さなくてはいけない気がして、僕は一心不乱に問題を解き続けた。栗本さんはいい人だけど、本当は僕のことをウザいクタオだと思っているんじゃないかと思うと、少し怖いのだ。

八時になると生徒も増えてくる。人のひそひそ声が自分の悪口に聞こえてしまうようなネガティブな僕なのに、今日は何故かこの人口増加にほっとした。きつと、栗本さんに嫌われたくない、真実を知りたくないという気持ちが、昨日優しくされたせいで大きくなってしまったのだろう。自分が自分で情けない。

「乃木坂あ」

幼い声に振り向くと、東条さんが教室の入り口からひょっこり首を出して手招きをしていた。こそそした様子からすると、他の生徒に見られないように注意しているらしい。それはそうだ。世界一のアイドルと、国賊のクタオが一緒にいるところなんて見られたら、スキャンダルになってしまう。

「どうしたの？」

東条さんは僕を人気のない廊下に連れ出すと、嬉しそうに話し始めた。

「今日のほーかご、乃木坂をスタジオピンクに連れてきていいって。パパから許可ももらったんだ！」

「スタジオピンク？」

「世界征服のアジトのことだ。昔はディーヴァの研究所だったけど、今はボクの芸能活動全般をとっかつするスタジオになっている。一部の関係者以外には場所も教えてないんだぞ。よろこべ乃木坂！」

くいつと胸を張る様子に、自然と頬が緩む。一般人が立ち入れないようなすごいところに行けるのはもちろん、彼女が僕のためにいろいろ工面してくれたことが嬉しかった。

「でも、乃木坂にM Pが効かないのは、ボクたちだけのヒミツだぞ？」

東条さんは急に真剣な表情を作る。

「M Pが効かない人間なんて、パパたちにとっては危険因子だからな。乃木坂を捕まえて解剖しようとするかもしれないし、刺客を送ってアンサツしちゃうかも」

「ふえっ!？」

一瞬驚いたが、よくよく考えてみればクローン人間だって平気で作ってしまうのだ。こんな高校生一人、簡単に殺せるだろう。

僕の不安を払拭するためか、東条さんは一段と明るい声で言った。

「だいじょーぶ! 乃木坂のことは、とってもアタマがいいから下僕にしたって言うてあるから!」

「そんな勝手に……。もしクラブプロの人に『それほどじゃない』って思われたらどうするの?」

「んー、萌やしてごまかす」

行き当たりばったりとはまさにこのこと。

こうして僕は、スタジオピンクなる秘密機関に足を踏み入れることとなった。

虹間区の郊外に、スタジオピンクはあった。

壁が一面桃色! なんてことはなく、外観はつまらないコンクリートの建造物でしかなかったが、この中に世界征服の夢が詰まっているかと思うとわくわくする。

幼少期に「世界征服による救世」に憧れた人は少なくないだろう。僕もその一人だった。世界を僕のルールで統制すれば、誰も意見の

相違で争うことはない。僕が正しいルールさえ作れば、世界は平和になるんだ。そんな短絡的なビジョンで満足するのは最初だけ。正しいって何？ 全人類が納得できる法律なんてありえない。逆らう人が出たら殺す？ それでは救世にならない。魔法でも使わないと、世界平和なんて望めないのではないだろうか……。

子供たちはそこで壁にぶつかり、そのうち世界征服なんて馬鹿な夢はすっかり忘れてしまう。しかし、僕はこの目で魔法による平和的世界征服を見届けるチャンスを得た。封印されていた夢が、ようやく叶うのだ。

感慨にふけっている僕を出迎えてくれたのは、背の高い男性（？）だった。

「はあい、坊や」

「こ、こんにちは」

スタジオの扉から出てきたのだからクラブ関係者に間違いはないだろうけど、それにしてもこの格好は何だ。金髪リーゼントにサングラス、ピンク色をした女物のフリルつきブラウスに白いスラックス、なよなよした仕草に厚化粧……。がたいがいいので、ただの女装趣味者を通り越してオカマなヤクザにも見える。しかも年齢不詳と来た。人の好みに口を出す気はないけれど、これで外を歩いていたら通報されそうだ。

気おくれしている僕に、東条さんが営業ボイスで説明を入れる。

「ボク専属のスタイリスト、ミッルだよ。今日はオフだからボクたちについてくるって」

「そうでしたか。よろしくお願いします」

警戒を解いた僕に、ミッルさんはぐいっとな顔を近づけて、品定めをするように眺めまわした。香水のにおいがする。

「あらー、可愛い子ね」

「いえ、とんでもありません」

「あたしと同じ二オイを感じるわ」

「いえ、とんでもありません！」

「謙遜しなくていいのよ。うふふ」

ミツルさんはアクセサリーをじゃらじゃらさせながら、ついてくるように合図した。変わった人だけど、悪い人ではなさそうだ。

後を追って歩き出すと、東条さんが小さな声で言った。

「ミツルには、乃木坂にMPが効かないこと教えてあるよ」

「いいの？ と振り返る僕に、彼女はこくりと頷いた。

「ミツルは信頼できるよ。ああ見えてしっかり者だし、こどもを大切にしてくれるから。もし乃木坂がカラプロから狙われるようなことがあったら助けるようにって言ってる」

そっか、悪い人じゃないどころか、いい人なんだ。

そう考えると、あのピンクのひらひらも頼もしく見えてきた。

「ところで、スタジオピンクってピンクの服を着るのが決まりなの？」

「えっ？」

東条さんはミツルさんのピンクな後ろ姿を見て笑い出す。

「きやははっ、あれはミツルの個人的好みだよ。『スタジオピンク』って呼ばれてるのは、ボクが桃色を名に負うディーヴァだから！」

なるほど、そういうことか。

最初に向かったのは衣装部屋だった。東条さんが普段着のように着ているドレスを始めとして、スクール水着、猫耳メイド服、巫女装束など、萌え要素の詰まった品々が並んでいる。

「好きな服をえらんで！ 記念にそれを着たボクのブロマイドをぞいていするよ」

そう言われても、何千着という衣装を前にして、何を選んだらいいというのだろう。困った僕は、ぱっと目についた薔薇色のドレスを指差した。

「じゃあ、あれで」

「んまー、吟ちゃんいいセンスしてるわねえ！ ピンクは女を美しくする色なのよ」

ミッルさんが腰をくねらせながらドレスを手取る。

「十分だけ待っててちょうだいね。胡桃ちゃんをちゃちゃっと可愛く飾ってくるわ」

「なに言ってるのミッル。ボクはもとから可愛いよ」

「確かにそうだね」

二人は戯れながら更衣室に入っていた。僕はぼーっと二人が消えた扉を見つめていたが、東条さんだって同級生の女の子だということ进行い出し、慌てて視線を逸らす。することもないので、暇つぶしにブレザーを脱いで鞆にしまった。別に暑くはなかったが、脱いでも寒くない快適な室温だったのだ。今度こそ手持ち無沙汰になって部屋の中をうろろしている、やがて更衣室のドアが開いて二人が戻ってきた。時計を見るときっかり十分。東条さんは完璧にドレスアップされている。普通なら数十分はかかりそうなものだが、さすが世界的アイドルのスタイリスト。ミッルさんのスピードは並みじゃないらしい。

「乃木坂はしあわせものだね！　こんな可愛いご主人様の下僕になれて」

東条さんはくるりと一回転して見せた。ふわふわのドレスと、薔薇をモチーフとした髪飾りが、爛漫と咲き誇る花を彷彿とさせる。

「ミッル、インスタントカメラ出して」

そう言いながら、東条さんはその辺にあった椅子の上で体育座りになった。右肩を背もたれにつける形で、顔だけこちらに向けて座っている、髪もドレスもよく見える。身に染みついたポーズ、技術なのだろう。

ミッルさんがインスタントカメラを構えながら、優しい声で言った。

「天下のくるたんが、撮影室でもないところで、適当な椅子に座って、安物のインスタントカメラで写真を撮られるなんて。不思議な光景ね」

「うん、でもそれでいいの」

東条さんは瞳を閉じて膝に頭を預けた。

「今ボクは、ひとりの女の子として写真を撮るんだから」

薄く目を開けて微笑む彼女の様子は、姿こそまさに天使や妖精といった類の存在に見えるが、中身は普通の少女なのだと改めて実感させた。天使や妖精なら、本当の自分が出せないなんて小さなことで悩んだりはいらないと思うから。でも、そんな小さなことで悩むからこそ、人間は可愛らしいのだとも思う。

写真撮影はあつけないもので、ミツルさんがパシャッとやってそれで終わり。写真の出来も庶民レベル。

でも、ここに写っているのは本当の東条さんなんだ。

衣装部屋から出る前に、東条さんは学校に来ていた時のドレス姿に着替えなおした。

「どっちにしてもドレスなんだから、そのまま良かったんじゃない？」

「む。いちおーボクにだって、私服と衣装の区別はあるんだよ」

確かに、さっきの薔薇色のドレスよりは、今着ているオフホワイトのドレスの方がいくらか質素には見えるけど……。どっちにしろ私服とは言い難いと思うのは僕だけだろうか。

廊下に出たところで、白衣を着た眼鏡の女性と出会った。

「ママ姉<sup>ねえ</sup>！」

東条さんが嬉しそうに駆け寄る。

「あら、胡桃、おかえりなさい」

顔を見て、一瞬で分かった。この人は東条さんの遺伝子的オリジナル、東条胡都博士なのだと。

絶世の美女とはまさに彼女のことを言うのだろう。東条さんが成長してスタイル抜群になったらこんな感じかな。いや、逆か。東条博士の幼女バージョンが、東条さんなのだ。すごい研究者なんだからお年も召していると思っていたが、びっくりするくらい若く見える。

「いつ見ても胡桃は可愛いわね。まあ私の遺伝子<sup>わたし</sup>使ってるんだから可愛いに決まってるけど」

「ボクもママ姉みたいなびゅーてぃーになりたいよう」

「何言ってるの、女はつるぺたのうがちが華よ」

東条博士はさりげなく東条さんの胸を撫で始めた。こ、これはスキンシップの一環だよね？ 東条さんは特に気にしていないようだし。

「ちょっとママ姉、こんなところで健康診断なんかしないでよ」

「すぐ終わるからね。ハアハア」

なんだ健康診断かあ。……なわけない！

固まっている僕に、ミツルさんがそつと耳打ちした。

「東条胡都はナルシストで真性のペドフィリアなの」

東条博士の大きな目がこちらを睨んだ。美人が睨むと迫力が半端ないって言うけど、本当だったんだ。ミツルさんも毅然とした態度で博士を見返す。これは……女の戦い！？

「何かおっしゃいましたか、ミツルさん？」

「さあ」

サングラスの奥で敵意が光った。さすがの東条さんも、二人の間に流れる険悪な空気におろおろしている。

「私は胡桃の『母』<sup>わたくし</sup>です。しがないスタイリストのあなたに指図される覚えはありませんわ。いつもいつも口を挟まれて、私、そろそろ限界です」

「博士の可愛がり方は、はつきり言って異常だわ」

「この子はいずれ平和な世界の頂点に立つのよ。可愛がって当然じゃありませんか」

「胡桃ちゃんはあるあなたじゃないのよ！」

「胡桃は私の最高傑作です！ 我が身と変わりありません」

「やめーっ！」

東条さんの甲高い叫びと同時に、博士とミツルさんの表情が急に緩んだ。

「……萌えー」

MPを使ったらしい。さっきまでの剣幕はどこへやら、二人はデレデレと笑っている。

「今日は胡桃の可愛さに免じて許して差し上げますわ、萌えー」

「く、胡桃ちゃん、ごめんね、あたし、守ってあげたいのに、どうしても萌えちゃうの、何でこんな、あたしは……萌えー」

二人とも萌えたくて萌えているわけではない。大の大人が強制的に萌やされている光景は、あまりに凄絶だった。

誰も東条さんにはかなわない。最強幼女東条さん。

「ふう。二人ともボクの大切な人だから、なかよくしてよね」  
呆れたように溜息をつく、東条さんは博士に声をかけた。

「ママ姉、これがボクの下僕の乃木坂だよ」

「あら」

MPの余韻が抜けきらない顔で、博士は僕を見つめる。

「高校生って聞いてたけど、中学生だったのね」

「いえ、高校生ですよ」

「男の子って聞いてたけど、女の子だったのね」

「いえ、男ですよ」

「……リアル男の娘って初めて見たわ」

この歳になって初めて男子を見たらしい。女子高出身なのだろうか。

「これなら私の胡桃が穢わたしされる心配もなさそうだし、安心だね。せいぜい胡桃の役に立ってよね」

妖艶な笑みを残して、博士はすたすたと去っていった。うーん、穢わたしすって……？

「ママ姉は、いい人なんだよ？」

僕のワイシャツの裾を引っ張って、東条さんは呟いた。

「いつもボクの身体に気を遣ってくれるし、こーねつ出したときも徹夜で看病してくれたんだから。そりゃあ確かに力ホゴだけど、どうしてミツルがあんなに怒るのか、ボクには分らないよ……」



悪いけど、僕はミツルさんに同意する。東条博士は東条さんのことを「最高傑作」と言った。彼女にとっては、東条さんのパーソナリティーよりもその性能、つまり容姿やアイドル性、そしてMPの方が大事なのだ。東条さんをディーヴァとしてしか見ない博士は、悪い人ではなくても好きになれない。もちろんこのことは東条さんには内緒だ。曖昧な笑みでごまかすと、東条さんも曖昧に笑い返して、声を張り上げた。

「よし、気を取り直して、次はパパに会いに行こー！」

パパということは、色川社長か。つまり一番偉い人。少し緊張してきた。

「色川社長って、どんな人？」

「んー、ボクには優しいよ」

「『には』……」

「功績重視だから、失敗したらこわいんだ。あと二次元に目がない」

話を聞いたらますます緊張してしまった。クタオだなんて知られたら、即刻首を刎ねられかねない。

階段を上がって右に曲がったところに、『社長室』はあった。

「本社じゃないのに、社長室？」

僕の素朴な疑問に、ミツルさんが答えてくれた。

「まあ、実質的にこっちが本社みたいなもんだからねえ。世界に三十億のファンがいるくるたんのプロデュースは、世界平和計画を抜きにしても最優先事項なもの」

確かになあ。ちょっと他のアイドルさんがかわいそうな気がするけど。

「パパー、乃木坂連れてきたよ」

東条さんがドアをノックすると、中から貫禄のある温かい声が聞こえてきた。

「おうおう胡桃か、入りなさい」

「はい」

僕の緊張を知ってか知らずか、東条さんは気兼ねすることもなくドアを開ける。

「あたしはここで待つてるから、頑張つてきなさいよ」

ミツルさんが応援してくれるけど、手に滲む汗は引くことを知らない。

校長室みたいなイメージの部屋の奥で、色川社長は机に向かっていた。六十代半ばの、温厚そうなロマンスグレーの男性だった。

「よく来たね、乃木坂くん」

「おっ、お会いできて光栄ですっ!」

「そう固くならなくてもいいのだよ」

柔らかく微笑む社長は、優しそうな人に見える。と、安心したのもつかの間。

「君は、何ができるんだい？」

「え？」

「胡桃は君を右腕として使いたいと言っているが、君にはそれだけの価値があるのかな？」

よく見ると目だけ笑っていない。やはり成果主義の実業家、僕を審査しようというわけか。社長は組んだ手に顎を乗せて僕の返答を待っている。

「えっと、家事一般は得意です」

「それだけかね」

社長の冷たい視線が僕を射抜く。怒鳴られているわけでもないのに、蛇に睨まれた蛙のように脚がすくむ。これが萌え文化の立役者、色川社長の迫力……!

「多忙な胡桃に仕えるなら、仕事上の人間関係やスケジュールを完璧に記憶できる能力が欲しいところだね。ここは一つテストをしてみようか」

彼は机の引き出しから一枚の紙を取り出した。

「まあこれでいいか……。社員の名簿の一部だ。一分あげるから覚えてみなさい」

手渡された名簿を見ると、百個ほどの名前がずらりと並んでいる。  
え、一分？

「はいスタート」

容赦なく始められる試験。

「はい終わり」

一分のあまりの儚さに涙が出そうだ。

「覚えている名前を言ってごらん」

「あ、相川みなえ、青山しゅ、俊二……」

しどろもどろで名前を言っていく。他の人と競争したことがないから分らないが、記憶力はある方だと思う。それでも答えられたのはせいぜい半数。難しそうな顔をして僕を見やる色川社長を正視できなかった。

「それで全部かね」

「……」

挫けそうになって目を逸らすと、心配そうに僕を見ている東条さんと目が合った。

そうだ。僕を必要としてくれた彼女のためにも、ここで諦めるわけにはいかない。

無能だと軽蔑されてもいい。生意気だと罵られてもいい。東条さんの下僕として、何としても認めてもらわなければ！

僕は顔を上げ、色川社長を真つすぐ見据えた。

「第三次世界大戦から四十四年経った現在、世界は痛みを忘れ、紛争も増えてきました。カデニアとファンゼル連邦なんか冷戦状態です。そんな現代において、カラープロダクションの萌え布教活動は素晴らしいと思います。でも、今のままでは東条さんにかかる負担が大きすぎます。僕は少しでも東条さんを支えたいと思うんです！もつともつと優秀になつて、必ずお役に立ってみせます！だから、僕を東条さんの下僕でいさせてください！お願いします！」  
勢いで頭を下げる。珍しく熱くなってしまった。自分の意思をこんなにも押し通そうとしたのは久しぶりかも知れない。

……恥ずかしい。

「顔を上げなさい。何か勘違いしているようだが、私はテストの結果に満足しているよ」

「でも、僕、半分しか」

社長は僕の顔を見て笑った。余程情けない面をしていたらしい。

「いや、だって、半分も覚えてたら普通にすごいでしょう。私は感心したくらいなんだが」

「じゃあ……！」

「心意気も気に入った。君を胡桃の部下として正式に認めよう」

「ありがとうございます！」

とん、と背後に軽い衝撃を感じて振り向くと、東条さんが僕に抱きついて「よかったね！」と言ってくれた。僕も、すごく嬉しい。

「パパ、神聖アキバ帝国のことも、話していいかな？」

「うむ。もう彼はカラプロの幹部同然だ」

幹部同然ってあわわわ！

感動に打ち震える僕に、新たな驚愕の計画が説明された。

神聖アキバ帝国      世歴二〇四三年四月二十七日（日）建国予定。

それは、国土を持たないネット国家である。

国際条約において正式に認められた国ではない。いわば仮想国家なのだ。

初代皇帝は幼女帝くるたん。首都は幻の都市、秋波原<sup>あきはは</sup>。第三次世界大戦中に消滅したオタクの聖地が、今ネット上に復活する。

国民になるにはややこしい手続きは一切必要ない。萌えを愛し、くるたんを愛すること。それだけでどんな人間でも国民になれる。自分の中の妄想では飽き足らず、国民としての目に見える証がほしい者は、メールで申し込みをすれば簡単にデータ状の国民証が手に入るという仕組みだ。

形を持たない神聖アキバ帝国は、現存するどの国家よりも自由に広がり続けるだろう。人種を越え、思想を越え、萌えが人類を一つにする。略奪や支配を経ず精神世界を征服する可能性を秘めた、カラープロダクション渾身の壮大なプロジェクト。

バックス・アキバーナ  
アキバの平和。

誰一人犠牲にしない、世界で一番平和な世界征服。

「というわけだよ、分かってくれたかね、乃木坂くん」

「二十日には建国記念ライブ、建国トージツには祝典が開かれるんだよ！ もちろん乃木坂も手伝うんだからね」

改めて、東条さんたちがやろうとしていることの大きさを知る。僕みたいな一般人が首を突っ込んでいいのかという戸惑いと同時に、この新しい波の中で僕の力を試してみたいと言う不遜な欲求も湧いてきた。

クタオで引っ込み思案な自分でも、今なら変われると思ったから。

「じゃあパパ、そろそろおイトマするねー」

「ああ。乃木坂くんも、気をつけて帰るんだよ」

色川社長に見送られて社長室を後にし、ミツルさんと再会した。

「あら、その顔は、上手くいったのね」

「はい！」

「あの厳しい社長に認められたってことは、誇りにしていいのよ」  
ミツルさんも喜んでくれているようだ。期待に応えられてよかった。

「乃木坂、帰る前にボクが住んでる部屋に寄ってかない？」

「って、このスタジオに住んでるの？」

「言ってなかったっけ？ ここはまるっとボクの家でもあるんだよ」

当然行くに決まっている。東条さんも、素で話したいことがあるのだろう。東条さんの部屋がどんな風なのかも見てみたいし。

「じゃあ、あたしはここでお別れするわ」

「そうですか。今日はお世話になりました」

ミツルさんに会釈をして東条さんについていこうとすると、小声で呼び止められた。

「ちよつとだけ、あたしの戯れ言を聞いてくれない？」

どんどん先に行ってしまう東条さんを気にしながらも、彼に耳を貸す。ミツルさんは身をかがめて僕に身長を合わせると、オカマ声なのに何故か神妙に聞こえる調子で話し始めた。

「誰一人犠牲にしない、世界で一番平和な世界征服。それが色川社長のコンセプト。でもね、誰一人犠牲にしないなんて嘘。胡桃ちゃんだけが、一人犠牲になってる。吟ちゃんにも分かるでしょ？」

小さく頷くと、ミツルさんは寂しそうな笑みを浮かべて言葉をつないだ。

「あの子には今まで友達なんて出来なかった。そしてあたしは、どんなに頑張ってもMPには敵わなかった。本当はあたしがあの子の一番になりたかったんだけど……。吟ちゃん、それはあなたに任せるわ。胡桃ちゃんを支えてあげて」

「何やってるの？ はやくはやくー！」

向こうから、東条さんの無邪気な呼び声が聞こえる。

「さあ、お行きなさい」

ミツルさんはそれだけ言っ、ぽんと僕の背中を押した。

東条さんは彼の心中など知るよしもなく、あどけない顔で「なに話してたんだ？」と訊いてくる。僕は胸にじんと染みるものを感じた。その正体はよく分からないけれど。

振り返ると、すでにミツルさんはいなくなっていた。

東条さんの部屋はピンクでフリフリしているのかと思いきや、モノトーンでシックなコーディネートだったのでびっくりした。東条さんが得意げに言う。

「意外だったか？　ボクは可愛いのも好きだけど、かつこいいのも好きなんだ。くるたんとしてのイメージがこわれないように、メディアにはダミーの可愛い部屋をしょーかいしてるんだが、やっぱりこっちが落ち着くな」

確かに、この空間はおしゃれなのにすっきりしていて、実に住み心地がよさそうだ。

「こんなにかつこい部屋なのに、誰にも見てもらえないなんて……まずい。ただもったいないと思って口にしたただけだったが、友達も作らないで頑張っている東条さんに向かって「誰にも見てもらえない」だなんて。傷つけてしまっただろうか。」

しかし取り越し苦労だったようで、当の東条さんは別段気にしている様子もなく話を続けてくれた。よかった……。

「ひとりで楽しむのもオツなものだぞ。それに、今は乃木坂が見てくれるじゃないか」

「っ……うん！」

こともなげに嬉しい言葉を言ってもらって、僕は少しどきっとする。こんなふうに同世代の人と素で会話できるなんて久しぶりだ。

「まあ座れ」

顔が赤くなるのを感じながら床に正座すると、東条さんは先ほど撮った写真を見せると催促してきた。意図は分からないが素直に差し出す。

「んー、やっぱりボクはいつ見ても可愛いなー。ポーズもバッチリだ」

ただの自慢話かと思えば、ふと彼女の表情が曇った。

「本当はお前といっしょに写りたかったんだけどな……」

「どうしてそうしなかったの？」

東条さんは呆れ顔で僕の頭を小突いた。予想外に痛い。

「ばーか。ボクとのツーショットを持ってるなんて誰かに知られたら、妬まれて殺されるぞ。ボク一人の写真なら、万が一見つかったもごまかしが効くだろ？」

「あ、そっか」

幸い、地味な僕に注目するような人もいないし、黙っていれば僕たちの関係はばれないだろう。

「写真、大切にしろよ」

そう言つて東条さんは写真を僕に返した。僕はそれを、傷つかなないように『スーパード僕道』に挟んでおく。しまい終わると、東条さんはもじもじと膝を抱え直し、何故かためらいがちな瞳を向けてきた。

「あの、さ。さっきはちょっとかつこよかったぞ」

「さっき？」

「ほら、パパに向かつてタン力を切ったときだよ！　なんていうか、初めて乃木坂が『男』に見えた」

初めてつて……。

褒められたのに若干落ち込むという不思議な状態に陥つたので、話題を転換してみる。

「ネット上とは言つても、国を作っちゃうなんてすごいよね！　忙しくなると言うけど、高校にはちゃんと来られるの？」

「なめるなよ、ボクはせーきの大天才だぞ！　国務も学校もりょーりつさせてやる」

東条さんは不敵な笑顔で言い放った。その自信に満ち溢れているところが堪らない。

「第一、虹高に通っているのは将来有望な人材により濃くMPの効果を植えつけるためだ。学校に行かないわけにはいかないんだ」

「そうだったんだ」

これが世界一のアイドルがわざわざ高校に通っている理由か。何とも合理的だと感心していると、東条さんの勝ち気な表情がふっと緩んだ。

「でも本当は、ボクも学校に行つてみたかつ　」

彼女が何か言いかけたその時。

突然、何者かによつて窓ガラスが蹴破られた。



「わああっ!？」

割れた窓から乗り込んできたのは、高校生くらいの女の子。とても今の蛮行を行ったとは思えない華奢な体躯に、機能性の高いタイトな黒服を纏っている。粉々になったガラスのかけらと共に長い髪が舞っている情景は、ファンタジックですらあった。だが、破片が足元に降ってきて、現実に取り戻される。

少女は蹴破った勢いでひらりと床に着地すると、茫然としている僕たちに顔を向けた。風貌は清楚でおとなしげなのに、こちらを見やる目つきには隙がない。そして、その手には拳銃。

何だこの状況。

「こちらOp・1。<sup>ワン</sup>東条胡桃を確認。捕獲します」

耳に付けた小型通信機に話しかける少女の後ろで、窓ガラスが元通りになった。……え？　僕は我が目を疑った。床に落ちていた破片がきらきら光りながら浮き上がって、窓枠まで飛んでいったかと思ったら、窓が再生したのだ。まるで継ぎ目のないパズルのように。どうという仕組みかは分からないが、今は呆気にとられている場合ではない。抜けていた腰を奮い立たせ、固まっている東条さんの手をとって駆け出す。

「逃げるよ!」

彼女も余裕がないのか、素直に僕についてくる。とりあえずドアの向こうへ!

「行かせません」

パン、という狙撃音と同時に、右足に熱い痛みが走った。

……撃たれた?

「いつ、いたっ」

「乃木坂っ!」

銃弾はかすめただけのようだが、結構血が出ている。銃に撃たれたのは初めてだ。当然だけど。っていうか何で僕こんなに冷静なんだろう。状況が非現実的すぎて、逆に理性がフル回転しているらし

い。

「安心してください、傷はすぐに治ります。さあ、東条胡桃さん、私と共に行きましょう。あなたはノクターンの力になる」

言っている意味が分からない。傷が治る？ ノクターン？ 東条さんは半ばパニック状態だ。

「乃木坂をいじめるな！ くらえ、にゅーんっ！」

泣き出しそうな顔でMPを放つ。これで助かった　はずだった。しかし黒服の少女は顔色一つ変えない。平気なのか？

「私はあなたには萌えません。諦めてください」

「そんな……っ」

東条さんは驚愕に目を見開いて立ち尽くしている。

「東条さん、逃げて！」

足を押さえながら必死で叫ぶ僕を、少女は訝しげに見据えた。

「あなたも萌えないのですか？ それに、まだ傷が治っていないなんて。あなたは一体……。いえ、今は任務が最優先です」

少女の手が東条さんに伸びる。

もう駄目だと思った瞬間　信じられないことに　何者かが壁

を通り抜けて出現し、その手をつかみ取った。

あれは、昨日の高野さん！

よく分からないけどありがとうございます！

「どこから……！？」

さすがの少女も動揺している。高野さんは手をつかんだまま少女を振り回し、ベッドに叩きつけた。少女はわずかに呻いたが、すぐに起き上がって状況を確認する。

「消えた！？」

何を言っているのだろう。高野さんは目の前にいるのに。

だが、少女にはまるで見えていないらしく、焦燥感を露わに辺りを見回していた。その間に、相変わらず無表情な高野さんが僕に声をかける。

「今、貴方以外の人間は私の存在を感知できない。東条胡桃と共に

早く逃げなさい」

感知できないってどういうことだろう。しかしそんなことに構っている暇はない。高野さんのご厚意に甘えて、一刻も早く逃げなければ。

「東条さん！」

「う、うん！」

東条さんも我に返ったのか、幼女とは思えないパワーで僕を引っ張って駆け出した。

廊下に出て非常ベルボタンを押し、また走り出す。

「世界征服目指してると、こんなのよくあること？」

「いや、これが初めてだ。何なんだよあいつは……！」

「高野さんって、昨日言ってたカラプロの刺客？」

「たかの？ 誰だそれは」

「さっきの着物の人だよ」

「あんな超能力者は知らない！」

正体不明の高野さんだが、いちご柄パンツの縁がある僕にとって  
は赤の他人ではない。いくら超能力らしき力が使えると言っても、  
相手は拳銃を持っているのだ。無事だといいいのだけれど……。

十字路に差し掛かったところで、向こうから誰かが走ってくるの  
が見えた。

「ミツルさん！」

異様にスピードの速いオカマ走りでは彼はやってきた。

「二人とも大丈夫？ 何があつたの？ ……って、吟ちゃん、怪我  
してるじゃない！」

「あ、うっ」

指摘されて痛みがぶり返す。必死になっていて忘れていたが、そ  
う言えば僕は怪我を負っていたのだった。……怪我？

恐ろしい可能性に気づいて振り返ると、血の跡が点々と僕に続い  
ていた。

やってしまった。

「ミッルさん、僕はいいから東条さんを安全なところへ」

「何言ってるのよ、怪我人を置いていけるわけないでしょう！」

「東条さんは拳銃を持った女の子に追われています。僕はこの通り、血の跡で居場所が分かってしまいますから、早く逃げてください」

拳銃という言葉聞いて、ミッルさんもことは一刻を争うのだと悟ったようだ。だが、東条さんは営業ボイスも忘れて反対する。

「ばか！ 血なんて垂れないように布でも巻けば……」

「処置してる間にあの子が来ちゃったらどうするの」

「それは……そうだけど」

彼女も僕の言葉で納得せざるを得なくなり、黙ってしまった。目を潤ませる東条さんを安心させるために、あえて軽口を叩く。

「向こうも僕なんか目当てじゃないから、見つかったても大したことにはならないよ。殺意はないみたいだったし」

自分でも怖いほど、僕は冷静だった。

ミッルさんに手を引かれて走り始めた東条さんは、名残惜しそうに僕の方を振り返った。

「死んだら殺すからなっ！」

こんな時なのに、つい笑ってしまった僕がいる。だって東条さんがあまりにも可愛いんだもん。

さてと。まずはどこかに隠れよう。そう思った矢先、右の道から足音が聞こえてきた。

これが後ろから聞こえてきたなら恐怖するけど、おそらくスタジオオピンクに勤めている人が非常ベルを聞きつけて来たのだろう。助かった。足の血をハンカチで押さえながら、右の道を進む。

やがて見えてきたのは、黒いジャージをラフに着崩した男性だった。やはり緊急事態においては、近くに大人の人がいってくれると安心する。あの人なら運動神経もよさそうだし、一緒に避難してくれたら頼もしい。

男性は僕に気がつくと、にこやかに声をかけてきた。

「東条胡桃は、どこにいるかな？」

おかしい。スタジオピンクの従業員なら、東条さんのことを呼び捨てにしたりはしないはずだ。ということは、この人……。

声にならない悲鳴を上げて、来た道を駆け戻る。けれど、どんな差を縮められていくのが感覚的に分かった。僕の五十メートル走のタイムは八秒九二。どうしてこんなに脆弱なのだろう。追いかけてここにすらならない。

軽く肩に手を置かれた。

「捕まえたぞ、中坊」

「ひゃあっ！」

恐る恐る振り向くと、ひょうきんそうな若い男性がにこにこ笑っている。怖い人じゃない？

「そんなにビビるなよ」。別に俺、中坊には用ないからさあ。それより、東条胡桃がどこ行っただか教えてよ」

中学生だと思われることが、今は救いだ。もし僕が大人っぽい容姿だったら、容赦なく尋問されていたかも知れない。

「と、東条さんは、秘密の地下道を通って逃げましたあ」

我ながら見え透いた作り話だと思うが、「知らない」が許されるとも思えなかった。僕の返事を聞いて、男性は眉を吊り上げる。

「アホな嘘つくなよ」

おちゃらけた声とは裏腹に、彼の手は拳銃に伸びていった。

「俺はOp・1とは違って、人殺しに全然抵抗ないんだよね。あ、Op・1っつーのはさっき中坊を撃ったねーちゃんな。あいつノクターンのエージェントのくせにさ、超能力で敵の怪我治してやるんだぜ。優しいよなあ。中坊は何故か治らなかったけどな」。ああ、で、結局何が言いたかったかというと、正直に答えといた方がいいよってこと」

頭に拳銃が当たってる……。

この人、さっきの女の子よりもヤバイ！

「本当ですっ！僕は地下道の入口も出口も分かりません！嘘についてないです！」

半狂乱のふりをして嘘をつく。僕にはもしかしたら演技の才能があるかも知れない。涙目なのは演技じゃないけど。

「ふーん、そっか」

僕の芝居を信じて男性が銃を下ろしてくれた直後、彼の通信機に着信が入った。

「はい、こちらOp・4。<sup>フォー</sup>え？ Op・1が勝てない相手がいるう？ ははは、あの化け物が勝てないなんて冗談でしょう！ ……

分かりました。あ、今日の前にさっきの萌えない中学生がいますけど、どうします？ あ、はい分かりましたー」

誰かと話し終えた男性は、ふと真面目な面持ちで僕を見おろした。

「悪いけど、予定変わったわ」

「え？」

足が床から離れ、身体がつんのめる。一瞬遅れて、男性の肩に担がれたのだと分かった。

「やつ、何するんですか、降ろしてください！」

「無理だよ、命令だもん」

男性がさくさく歩いていく中で、僕はまるで鞆のように呆気なく運ばれていた。抵抗して転がり落ちようにも、がっちりと身体を押さえられている。何とかしなくては。このままでは本当に拉致られてしまう。

「じ、自分で歩きます！ ほら、お兄さんも一人抱えてたら大変でしょ？」

「いや、いつもの訓練の重りの方が重いし」

こんな怪力からどうやって逃げろって言うんだ。必死に頭を働かせてはじき出した答えが、これ。

「トイレ！ 僕トイレ行きたいです！ トイレ行かせてください！ 早くしないと漏れちゃうトイレえ！」

恥を忍ぶでの迫真の演技。ところが男性は、動じることもなく僕の妄言を一蹴した。

「うるせー中坊だぜ。勝手に漏らしてろよ。まあそれも可哀想だから、ちよつと寝かせてやるか」

何だか悔しい。せめて慌ててほしかった。

そう思ったのも束の間、身体中から力が抜ける。

「あ……」

彼に何かされたみたいだけど、ふわふわして……なにもわからない……。

なんで。

目の前が真っ白になった。

## 第二章　ぴんく（後書き）

読んでくださってありがとうございました！

執筆者のサイト『Re:I』

<http://reiyumesaki.jimdo.com/>



### 第三章 のぞみ（前書き）

年齢制限をかけるほどではないと思いますが、やや暴力的な描写があるので、苦手な方は注意してください。

### 第三章 のぞみ

気がついたら、僕は床に転がっていた。

頭が朦朧として、慢性的な息苦しさを感じる。意識はあるのに感覚がない。まるで身体と精神を引きはがされてしまったようだ。

あの男の人は？

もしかして、抵抗の甲斐あつて肩から落ちることに成功したのだろうか。なら早く立ち上がらなくては とそこまで考えて、僕はいつの間にか気を失っていたのだと気づいた。この虚脱感はその後遺症なのだろう。ひどく眠い時の気分に似ている。

ぼんやりとした中で初めに伝わってきた感覚は、体温を奪う石床の冷たさだった。次に、手足を縛られていることを知る。手首の鬱血に苛立ちながら首をもたげると、鉄格子の窓の向こうに紫がかった夕焼けが見えた。どうやら意識がなかったのは一時間程度のようにだ。その間にこの見知らぬ薄暗い部屋に放り込まれたということらしい。移動時間もあるから、ここに来てからそれほど時間は経っていないと思う。

つい昨日まで普通の高校生として生きてきた僕は、まさか自分がこのようなアニメ的ピンチに見舞われるなんて考えてもみなかった。予習もイメトレもしていないから、ここがどういった類の部屋なのかも分からない。さしずめ監禁室といったところか。起き上がる気力もないので顔だけ反対方向に向けると、得体の知れない拷問器具がずらりと並んでいた。うん、予想以上だ。

冷静になって情報を整理しよう。スタジオピンクに襲来した人たちの言葉から考えると、東条さんを狙っている団体の名前はおそらくノクターン。こんな手荒なことをするのだから、少なくとも非法組織には違いない。その組織に、僕は今監禁されている。

ノクターンは、僕が東条さんの行方を知らないことを承知した上で僕を連れてきた。とすると、目的は何だ？ あのOp・4と名乗

った人は、僕を「萌えない中学生」と呼んだ。MPが効かないことが論点となるのだろうか。でも、拳銃の女の子にもMPは効いていなかった。もしかしたら、そういう人は僕以外にも結構いるのかも知れない。それならわざわざ僕を連れてきたのは何故？ とりとめもない考察が続いていると、僕が東条さんにとって特別ではなくなってしまうのは嫌だ、なんて、場違いなわがママが脳裏をよぎった。

東条さん、無事だといいなあ……。

冷えた空気が身に染みる。スタジオピンクの衣装部屋で、ブレザーを鞆に入れてしまったことを激しく後悔した。思わず呟く。

「寒い」

その声は自分でもびっくりするほど幼弱だった。声変わりがまだなので、小学生がダダをこねているようにも聞こえる。しかしここには、生徒のためにストープを点けてくれる先生も、一緒に震えてくれる級友もいない。そのはずだった。

「寒いですね」

透き通るような綺麗な声に、不安と期待を同時に抱く。声は足の方から聞こえた。転がったままでは声の主が見えないため、ひじを使って上半身を起こす。

灰色の石の壁を背に、黒い服を着た少女がへたり込んでいた。その両手首は頭の上で鎖につながれている。目が合うと、少女は優しい顔で僕に薄く微笑みかけた。

Op・1さんがそこにいた。

「えっ、あっ」

「安心してください。私はこの通り、あなたに危害を加えられる状態ではありませんし、そのような意思もありませんから」

確かに、今ここにいる彼女は全く無害であるように見える。見た目は儂げな美少女だから、拳銃さえ持っていなければ怖くはない。運動神経はものすごくいいのだろうけど、今は何故だか拘束されて

いる。

「どうしてあなたがこんなところにいるんですか？」

「お仕置きですよ」

つらい体勢のはずなのに、少女は何でもないかのように笑ってみせた。

「東条胡桃を捕獲できなかったことに対するお仕置きと、着物の女性に勝てなかったことに対するお仕置き。私はお母様に嫌われているからよくお仕置きされるけれど、こんなにも真つ当な理由でこの部屋に入れられたのは久しぶりです」

話を聞きながら、僕はほつとしていた。よかった、東条さんは無事に逃げられたんだ。もしかた高野さんに会うことがあったら、うんとお礼を言わなくちゃ。僕は捕まってしまったが、東条さんを逃がすことができたのは、ひとえに彼女がOp・1さんを足止めしてくれたおかげなのだ。

「あの……捕まってる身分で申し訳ないのですが、いくつか質問しても構いませんか？」

意外にも、Op・1さんは嫌な顔一つしないで快諾してくれた。

「あなたを襲った張本人がこんなことを言うのもおこがましいですが、まだ歳若いあなたを巻き込んでしまったことを、私は心苦しく思っています。できる限りお答えしますよ」

この人いい人だ。僕は感謝しながら、最初に一番気になっていたことを尋ねた。

「僕はどうして連れてこられたんでしょうか。きっと何の役にも立たないと思うんですけど……」

「もうお分かりではないのですか？ あなたが特別な人材だからです」

「特別？」

「東条胡桃に萌えない人間なんて、滅多にいるものではありません。私とOp・4は、東条胡桃に萌えないことを買われて今回の東条胡桃捕獲ミッションに抜擢されました。私は生まれつきなのですが、

Op・4については、事故で頭部に損傷を負って以来、愛や萌えという感情を失ってしまったそうです。てっきり、東条胡桃に萌えなのは私たち二人だけだと思っていましたが……。お母様は、カラープロダクションがあなたに萌えない技術を施しているのだと考えて、Op・4にあなたを連れてくるよう指示したのです」

『お母様』というのは、通信機の先にいた人物のことなのだろう。つまり、彼女たち凄腕のエージェントに命令できるほどの地位を持ち、僕をここに連れてくるように指示した人物ということだ。

「残念だけど、僕も生まれつきですよ」

「そうですか。でも、あなたが特別なのはそれだけではありません。ルネサンスが効かなかったのは、あなたが初めてなんです」

「ルネサンス？」

そう言えば、東条さんの部屋でもそんなことを言っていた。薬品か何かの名前だろうか。疑問に思っていると、Op・1さんは少しためらいながら説明してくれた。

「信じていただけないかも知れませんが、私、物体の時間を巻き戻すことができるんです。再生ルネサンスというのはノクターンがその力につけた名称で」

ふいにOp・1さんは話を止めて、戸惑うような、ほっとしたような顔で僕を見た。

「あの、驚かないんですか？」

意外だった。裏社会で働いていると言っても、やっぱり変な目で見られるのは嫌なのだろうか。その辺りは普通の女の子と変わりののかも知れない。僕は彼女を等身大の話し相手のように感じて、こわばっていた表情を緩めた。

「昨日からびつくりすることばかり起こって、何だか慣れちゃいました。ルネサンスもそうですけど、着物の人が壁を通り抜けてきたりとか」

「あれはカラプロの技術ではないのですか？」

「違います。……たぶん」

我ながら曖昧な回答だ。東条さんは知らないと言っていたが、色川社長が秘密裏に超能力開発をしていた可能性を考えると、はつきりとした答えは出なかった。

「だから僕は何も知らないし、あなたたちに何か要求されてもきつと応えられないし、そしたら僕は……」

用済みだ、とか言われて殺されちゃう？

僕が一番恐れていたことを察して、Op・1さんは安心させるように微笑んだ。

「大丈夫ですよ。ノクターンは東条胡桃の萌えの原理と、萌えに抵抗する方法を探っています。あなたは重要な資料なんです。だから乱暴に扱ったりはしません。安心してください」

安堵が体中に広がっていくのが分かった。しばらくは命の安全は保証してもらえらしい。一つ懸案事項が減ったので、僕はもう一つ気になっていたことを尋ねた。

「あの、『ノクターン』が何なのか教えてほしいんですけど」

Op・1さんは何故か怪訝そうな顔をする。

「あんなに東条胡桃の近くにいて、知らないということはないでしょう？」

「あれっ？ 知ってて当然のことなんですか？ やだな、僕世間知らずだから……」

自分の無知を恥じてごまかし笑いをすると、Op・1さんはますます浮かない顔をした。どうしたのだろうか。

「ノクターンは裏社会の軸とも言える組織です。裏社会は世界中の経済情勢を支配する場であり、大企業とは切っても切れない縁にあります。カラープロダクションだって例外ではありません。ノクターンと協力していた時期もありましたが、かつて先代Op・1に組織から抜け出す資金を与えたことが判明してからは、対立関係にあります」

「へえ。僕の知らないところで、世界って動いてるんですね」

何だか感心してしまった。しかし能天気な僕とは反対に、Op・

1さんは悲しそうに目を伏せる。

「何も知らない方を巻き込んでしまうなんて……」

「あ……」

やっと彼女が落ち込んでいた理由が分かった。彼女は東条さんの近くにいた僕を裏社会の人間だと判断し、『お母様』に報告した。きっと東条さんは、すでに裏社会でも影響力を持っているのだろう。だが僕は一般人同然の素人だった。Op・1さんは日ごろから、せめて一般人だけは危険に晒さないように立ち回っていたのではないだろうか。他のノクターンの人、例えばOp・4さんがそんな配慮をするかと言われれば疑問だけど、彼女だったらむしろその方が自然な気がした。

「僕だって、東条さんの下僕になった瞬間から裏社会の人間になったんです。気にする必要なんてありません。覚悟してなかった僕が悪いです」

「……」

フロローしたつもりだったが、気まずい沈黙が流れる。どうしよう。そうだ、また何か質問すればいいんだ。

「えっと、あなたのお名前は？」

これしかネタがなかったんだ。

「Op・1とお呼びください」

「いえ、本名の方です」

せっかくだからちゃんと訊いておこうと思ったのだが、彼女は何故か困ったように首をかしげた。背中の中ほどまであるストレートの髪が、腕の後ろで揺れる。

「本名、ですか。長いことOp・1 作品番号一番と呼ばれてきましたから、それを名前と認識していました。本名は分からないんです。あえて申し上げるなら、ふじまき ゆきな藤巻雪菜。これもお母様からいただいた仮の名ですが、Op・1よりは人間らしいでしょう？」

自分の本名も分からないなんて、裏社会は大変なんだなあ。

「じゃあ、藤巻さんって呼んでいいですか？」

彼女は不思議な言葉を聞いたかのようにきょとんとしたが、やがて柔らかな笑みを浮かべた。

「いいですよ」

そこで僕は調子に乗って、また同系統の質問を試してみた。

「藤巻さんはいくつですか？」

「十五歳です。今年で十六歳になります」

「あ、僕と同じ年ですね」

「はい？」

しまった。ノクターンの中では僕は中学生ということに通っているのだった。

慌てて言い直そうとしたら、勢いで体が動いて、脚の傷が床と擦れる。痺れるような痛み顔に顔をしかめたが、すぐに気づいた。こんなところを見せたら、藤巻さんが気に病んでしまう。案の定、彼女は心配そうに僕を見ている。

「傷」

「だ、大丈夫ですっ」

無理に取り繕った爽やかな笑顔は、藤巻さんの罪悪感を助長させただけだった。

「あなたを撃つ時に使った弾丸にはルネサンスの力を纏わせてあったので、本来ならあなたの傷はすぐに治るはずだったのですが……ごめんなさい」

本当に申し訳なさそうな顔で謝られてしまった。どうしてこんなに心優しい人が裏社会でエージェントなんてやってるんだろ。絶対向いていないのに。

「敵の傷まで治そうとするなんて、立派じゃないですか。そんな顔しないでください」

「裏の仕事を担う私がそのような配慮をしたところで、偽善でしかありませんよ。分かってるんです。私はルネサンスに甘えているだけなんだって」

事情は知らないが、裏の仕事が嫌でもノクターンを抜けることは



許されないのだろう。ミスをしただけで監禁されるのだから、組織を抜けようとすれば殺されてしまうのかも知れない。極論を言えば、本当に何も傷つけないなら殺されてしまえばいい。それなのにこのうと生きて裏の仕事を続ける自分の行動を、藤巻さんは偽善と呼ぶのだ。それを「偽善じゃない」と言ったところで、何の慰めにもならないのは分かっていた。だから、代わりに別のことで彼女を元気づけようと思った。

「藤巻さんがいてくれてよかったです。一人だったら、心細くて泣いてました」

彼女は、作り笑いかも知れないけど、それでも悲しそうな顔をやめて笑ってくれた。

「私も、あなたとお話できて嬉しいです。いつもは一人ぼっちですから」

場の空気が和んだその時、扉の向こうから二人分の足音が聞えてきた。硬い靴底と冷たい石床の質感がリアルに想像できて、鳥肌が立つ。藤巻さんが張りつめた表情で呟いた。

「お母様と……朝比奈さん？」

「とりあえず僕、寝たふりしてますっ」

僕はとっさにいもむし状態に戻った。いつまで寝てるんだと怒られる可能性もあるけど、怖い人といきなり対面したら心臓が止まりそうだ。藤巻さんと何らかの会話をするだろうから、それを聞くことを準備運動としよう。

足音が止んだ。鉄製のドアが開く音がした。鉄製のドアが閉まる音がした。足音が近づいてきた。……怖い！

「くるたんを逃しておめおめと帰ってくるなんて、いいご身分だねえ」

声質からして、中年の女性のような。高慢で冷徹な印象を受ける。

「申し訳ありません。ですが、帰還命令を出したのはお母様です」

「はん。あのまま戦っていたらお前は負けていただろう？ それを

考慮してやったんじゃないか。文句あるかい」

「……いえ」

「ほんと、見てるだけでイライラするよ」

鎖がこすれる音と藤巻さんの呻き声が聞こえたので、心配になって薄目を開けた。

黒いスーツを着た女の人が、藤巻さんの髪を一房つかんで頭を持ち上げている。藤巻さんは唇を引き結んで耐えていた。それともう一人、その様子を生温かい笑みを浮かべて傍観している五十代の男性。彼の方は穏やかな気性のように見えるのだが……。

「まあ、あたしはお前がどうなるうと構わないんだけどね。貴重な作品を減らしたとあっちゃあ、ここまで築き上げてきた信頼がパアになるからさ」

藤巻さんは黙って下を見ている。髪に隠れて、表情はうかがえない。

「あーあ、こんな役立たずじゃなくて、くるたんがいたらねえ」

女の人が藤巻さんの頭を壁に打ちつけて手を離れた。鎖の音と、壁と後頭部がぶつかる鈍い音が響く。ひどい。これはお仕置きじゃない、虐待だ。

「ああ、そうそう。朝比奈さん、こいつがくるたんに萌えないガキだよ」

目をつぶったのは結構ギリギリのタイミングだった。見つからなかったのは奇跡に近い。

朝比奈と呼ばれた男性は僕の方にやってきて、顔を覗き込んだ。

「寝てますね。つまらないな」

それで満足して帰ってくればよかったのに、彼はまだ僕の顔をじろじろ見ている。うう、今起きてるってばれたら気まずすぎる。

「何だかこの顔、気に食いませんね。正式にイノセンスを設立したらこき使ってあげましょう」

こき使う？ イノセンス？

「朝比奈さん、その人をどうするおつもりなんですか？」

僕と同じ疑問を持ったのか、藤巻さんが訊いた。すると、朝比奈さんはよくぞ聞いてくれたとばかりにべらべらと喋り出した。穏やかな雰囲気が一変し、やや子供っぽい情熱家という本性があらわになる。

「ぼくの今回のミッションにおいての一番の目的は、東条胡桃の芸能活動を止めることだったんですよ。人が自分の望みを素直に叶えようとする世界こそ、ぼくの理想です。望みが対立するなら、強者が弱者を組み敷けばいい。倫理なんかにとらわれず、望みの強さだけ強くなればいい、そんな世界を創りたい。そのためには東条胡桃の平和活動を止めなくてはならないんです。今日東条胡桃を捕獲できたら、芸能活動も止められたし、ノクターンの方で萌えの力を利用することもできたんですけどね。もう向こうも拠点を移動してしまっただしょうから、彼女をノクターンの手中に収めるチャンスはありません。そこでぼくは、個人的にイノセンスというアンチ東条団体を設立することにしました。ノクターンと協力して東条胡桃の萌えに対抗する方法を探りつつ、もっとアグレッシブに東条胡桃を辞めさせる行動を起こすつもりです。その子には、弱者としてぼくの望みにつきあっていたいただきますよ。身体調査もしますが、それ以上に、萌えずに東条胡桃に近づける彼はイノセンスにふさわしい人材ですからね！」

溢れんばかりの情熱　むしろ狂気とも言える気迫が伝わってきた。慣れていない僕や藤巻さんは圧倒されたが、女の人は何度もその話を聞かされていたようで、うんざりした様子で彼に告げる。

「夢を語るのもいいけど、そろそろopp・1のお仕置き始めたいんだ。さすがに朝比奈さんに見られるのはあれだから、出ていってもられないかい？」

「おっと、これは失礼」

朝比奈さんは頭を下げて退出しようとした。その際に、諦めの入った表情でお仕置きを待つ藤巻さんと目が合う。彼はふっと表情を崩した。もしかして慰めてあげるつもりなのだろうか。

しかし、その口から出てきた言葉は残酷なものだった。

「ああ、君のことを助けようとは思いませんよ、O p . 1。君は望みを持とうとしないでしよう？ 逆らいたければ逆らえるだけの力があるのに、角谷さんの言いなりになつて仕事をこなすだけ。ぼくは、そういう人間が一番嫌いなんですよ」

藤巻さんは黙りこくつてしまつて、何も答えない。

朝比奈さんは皮肉な笑みを浮かべた。

「では、せいぜい角谷さんの望みを受け止めてあげてください」

角谷というのは『お母様』の名前なのだろう。朝比奈さんが部屋を去ると、角谷さんは拷問器具の山の中からナイフを持ち出してきた。もつと恐ろしげな器具があるのにあえてそれを選んだのは、より直接的な感触を得たかつたからだろうか。

「さあて、お楽しみといきましょうか。くるたんを手に入れられなかった恨み、きつちり晴らさせてもらうからね」

含みのある笑みを浮かべると、彼女はいきなり藤巻さんの喉元にナイフを突き立てた！

「っ！」

藤巻さんは目を見開いてびくびくと震えている。白い首からは噴水のように血が溢れて、彼女の胸を濡らしていった。しかしそれも束の間。血の勢いは収まり、藤巻さんは動かなくなる。

……死んだ？

「あつはつは、母殺しの気分は最高だ」

角谷さんは意味不明なことを言いながらナイフを抜き取った。すると、輝く光が藤巻さんの上半身を包み込んだ。これがルネサンスの力。ちょうど東条さんの部屋の窓が直った時と同じように、藤巻さんの首が元通りになる。あんなに広がっていた血液も、跡形もなく消えていた。

「どう？ しよっぱなから殺されるとは思わなかったでしょ」

角谷さんは何でもないかのように軽口を叩いている。本当に楽しそうにしているものだから、腹の底から怒りが湧いてくる。何も出

来ない自分がどうしようもなくもどかしい。

藤巻さんは荒く息をつきながら角谷さんを見上げた。

「どうしてお母様はそんなに東条胡桃にこだわるのですか？ お母様の彼女に対する執着は、組織のためと言うよりご自身のためのように思えます。昔からそうです。くるたん、くるたんと、うわごとのように繰り返して……」

角谷さんは自分の短髪をいじりながらいい加減に聞いていたが、ふと真顔に戻って呟いた。

「いつかは言おうと思ってた。今がその時なのかもね」  
深く息を吐いて、彼女は言った。

「お前は作られた人間だ」

藤巻さんは返す言葉もなく角谷さんを見つめた。

「お前はくるたんだったかも知れないバイオロイドだ。まあ失敗作だけだね」

「どういう……ことですか」

「くるたんは、カラープロダクションが世界征服のために生み出した人工生命体なのさ。詳しくは分からないけどね、美人さんのクローンを元に作ったってだけは知ってる。カラプロの連中が美女の細胞を求めてあたしを訪ねてきたんだ。あなたのお母さんの細胞を使わせて下さいって。若い頃の母さんは美人で有名だったからね。大金と引き換えに、あたしは寝たきりの母の細胞を売った。そして、その細胞からお前が生まれたのさ」

つまり、藤巻さんは東条さんと同世代のディーヴァなのか。ならもしかして、ルネサンスはMPの仲間？ 超能力は偶発的なものではない？ しかし今はそんなことよりも、カラプロによって人工的に生み出されたディーヴァが、こんな仕打ちを受けて生きていることがショックでならなかった。

「あたしが母さんと不仲だったことは知ってるね」

「はい。私を見ると昔を思いだして腹が立つと、よくおっしやって  
いましたから」

「そのあたしが、どうして母さんのクローニングを許可したか。それ  
はね」

角谷さんは一度言葉を切った。その先を言ってしまうことに、た  
めらいがあるようだった。藤巻さんの姿が母親と重なって見えたの  
かも知れない。

「あたしは、母さんを好きになりたかったんだよ」

彼女は、母親に言えなかったことを、母親の分身に告げた。

「バイオロイドには人を強制的に萌えさせる力が芽生えるって話だ  
った。あたしはまだ若くて、夢を見てたんだねきつと。あたしを憎  
んだ母さんを好きにはなれなくても、リセットされた母さんなら、  
それも萌え萌えな母さんなら、二人仲良くやり直せるんじゃないか  
って、今考えたら馬鹿な期待をしてたんだ。本当に馬鹿だった」

MPの力がなければ母親を愛せないほど、この人は母親を嫌いにな  
ってしまったんだ。好きになりたいのに好きになれない辛さは分  
からないでもないけど、だからと言って。

「結局お前は出来損ないで、ただ母さんに似ているだけの目障りな  
ガキになった。お前が六歳の時だったかな、お前をこうやって刺し  
殺そうとしたのは」

だからと言って、藤巻さんを虐待していい理由にはならない。

「その時、ルネサンスが発動したんだ。いやらしい生への執着だよ。  
さつさと死んでしまえばいいのに生き返るもんだから、あたしや思  
いついちまったんだ。こいつなら最強のエージェントになれるって」

「それで私をノクターンに……」

「お前はあたしを失望させた罪を償わなくちゃいけないんだよ。あ  
たしにとって、くるたんは憧れなんだ。あんな可愛い子を、母とし  
て、娘として、愛していきたかった。その夢を台無しにしたお前を、  
あたしは許さない！」

角谷さんはナイフで藤巻さんの胸や腹を滅多刺しにし始めた。狂ってる。どうしてそんな虚しいことをするの？ 他に道はあるはずなのに。

「もうやめてください！」

僕は思わず顔を上げて叫んでいた。だが後悔はしなかった。何か言ってやらないと気が済まない。意志表示の弱いクタオな自分を変えようって、誓ったばかりなのだから。

角谷さんは手を止めて僕に歩み寄った。その間に、藤巻さんの身体はルネサンスで癒えていく。引き裂かれた服も再生していた。

「お前、起きてたんだね。狸寝入りとはいいい度胸してるじゃないか。名前は？」

ここで本名を答えたら終わりの気がする。とっさに思いついた名前を言った。

「池田……池田綿三です」

「ごめん池田くん。」

「メンゾウだって？ まあ、偽名ならもっと普通な名前言うだろうけどさ、変な名前だね」

「僕の名前なんてどうでもいい。藤巻さんをいじめるのはやめてください！ 東条さんみたいな力がないとか、お母さんのクローンだとか、そんなのは藤巻さんの責任じゃないじゃないですか！」

殴られてもいいと思った。覚悟もできていた。しかし、意外にも角谷さんは怒らなかった。代わりに、どこかしょげたような、不服を帯びた顔をした。まるで不当な理由で親に叱られた子供のように。

「逆恨みなのは承知の上さ。それでもあたしはこいつを憎み抜く。愛せないなら徹底的に憎むしかないんだ。中間は、無理だよ……。いいじゃないか、どうせ怪我はすぐ治るんだし」

「身体の傷は治っても、心の傷は残ります」

「何も知らないくせに、道德の教科書の受け売りみたいなこと言うんじゃないよ」

僕の言っていることは綺麗事だ。それは自覚している。対人関係は理屈でどうにかなるものではない。でも、僕は東条さんの下僕。『誰一人犠牲にしない、世界で一番平和な世界征服』の第一歩として、まずは綺麗事を貫く努力を払う！

とは言え、もともと臆病な僕は、早くも角谷さんの冷たい目に負けそうになっている。この震えは寒さのせいだけではない。手に嫌な汗をかいて背中の後ろですり合わせていた時、今まで黙っていた藤巻さんが静かに言葉を紡いだ。

「お母様は、それだけ由紀子さんを想っているんですね」

角谷さんはものすごい形相で彼女を睥睨すると、容赦なくナイフを胸に突き刺した。藤巻さんはぐったりとしたが、すぐに傷は消え、行き場を失ったナイフが音を立てて床に落ちる。上げられた藤巻さんの顔を見て、角谷さんは声を荒げた。

「そんな綺麗な表情かおするんじゃないよ！ お前もあたしを憎んでいくるせに！」

藤巻さんは聖女のような微笑みを湛えて首を横に振った。

「いいえ、私はお母様を愛しています。例え何をされても、あなたはお母様だから。子供とはそういう生き物です。お母様も、そうでしょう？」

角谷さんは一瞬だけはっとした様子を見せた。目を剥いて何か言いたげに口を開いたが、拳を握りしめ、そのまま踵を返して歩き出す。彼女の中で何かが起きたのは確かだった。扉の前で立ち止まり、ぽつりと一言。

「……手洗いに行ってくる」

その声は心なしか喉に詰まったような響きだった。

角谷さんが去り、足音が完全に聞こえなくなると、藤巻さんは僕を見た。

「池田さん、私に力を貸して下さいませんか？」

その目には決意に満ちた強さが宿っている。この部屋で出会って



から、優しくしてくれたり虐待されたりしているところばかり見てきたけど、この人は本来強いのだということを実感した。

「どうするんですか？」

「ここから脱出します」

そう言つと、藤巻さんは平然と鎖を引きちぎつて立ち上がった。

……えっ！？

「びつくりしましたよね。ここまでの筋力があるとはお母様も知りません。何故だか生まれつき怪力なんです。わ、笑わないでくださいね」

少し恥ずかしそうに横を向く藤巻さん。笑いはしないけれど、腰を抜かしそうだ。

藤巻さんは襟のファスナーを下げて、首の付け根を露わにした。そこには金属でできた首輪が付いていた。

「これは爆弾です」

「爆弾！？」

「組織を裏切ったことが判明したら、頭部を爆破されます。いくら私でも、脳をこっぱみじんにされてまでルネサンスを発動できる自信がありません。そこであなたの力をお借りしたいのです。あなたには多大な負担をおかけするかも知れませんが、成功の暁には、必ず無事に虹間までお送りします」

答えは決まっている。彼女を救いたい気持ちはずっとあったのだ。

「僕にできることなら、お手伝いします」

「ありがとうございます」

藤巻さんは、角谷さんが置いていったナイフで僕の手足を縛る縄を切りながら、作戦の説明をした。

「池田さんにはまず、私の首をレーザーカッターで切っていただきたいんです」

「え？ 何ですか、もう一度お願いします」

「私の首をレーザーカッターで切り離してください」

「……ええええっ!？」

僕の耳壊れたっばい。

「首が再生する前に爆弾を取り外してください。晴れて私は自由の身です。そしたらあの窓から脱出しましょう」

「そんなっ、首なんて切っちゃって、藤巻さんは大丈夫なんですか？」

「怪我をした時に発動するルネサンスは本能的なものです。意識がなくなってもちゃんと治りますよ。ほら、お母様に首を刺されても生き返ったでしょう？ 安心してください」

手足が自由になっても立ち上がろうとしない僕へ、彼女は氣遣うように手を差し伸べた。

「私みたいに血にまみれるのは、嫌ですよ。それは分かってるんです。でも、こればかりは協力していただかないと、あなたを助けられません」

人の首を切る。

僕がこの手で。

……怖い。

でも迷っている暇はない。早くしないと角谷さんが帰ってきてしまう。

「僕、やります。やるならパパッとやりましょう!」

「ありがとうございます。本当に、ありがとうございます」

藤巻さんは数ある拷問器具シリーズの中から、刃のない剣の柄のようなものを持ってきた。これがレーザーカッターか。

「このスイッチを押すとレーザーが発射されます。かなり小型に改良されていますが、威力は世界一の製品です。光が当たったところは焼き切れてしまいますから、扱いには注意してください」

簡潔な説明を終えると、藤巻さんは横になって襟を開いた。胸の谷間が少し覗いているが、今の僕たちにはなりふりを構っている時間なんてない。

スイッチに指を添え、照準を定める。

「痛いのは嫌ですから、一気にお願ひしますね」

「っうっうっう」

叫びたい衝動を押さえ込み、震える手でレーザーを発射した。目をつぶってしまいたいのは山々だが、軌道が外れて頭を切ってしまったら大変だ。血を噴いて切れていく首を見ながらの作業はつらかった。極度の緊張のせいで、感情以前に自然とぼろぼろ涙が出てくる。

それは長い時間のように感じられたが、実際にはほんの数秒のことだった。頭部が切断された首から急いで爆弾をはずす。爆弾をはずすことに必死だったので、切断面がどうか、そういったことは不思議と目に入らなかった。

爆弾をはずした直後、藤巻さんの首がつながった。僕の身体にべつとりとついていた血も瞬時に消える。彼女はぼんやりと首筋に手を這わせ、そこに金属の輪がないことを確認すると、感嘆のため息を漏らした。

「成功ですよ！」

喜ぶ藤巻さんの傍らで、僕は茫然とへたり込んでいた。目からは止めどなく涙がこぼれ続けている。そんな僕を見て、藤巻さんはふわりと僕を抱きしめた。

「ごめんなさい。無垢なあなたを血に染めてしまって、ごめんなさい。怖かったですよね。でももう大丈夫。池田さん、安心してください」

戦いとは無縁な甘い香りがした。そして、柔らかな胸の膨らみに、何となくお母さんを思い出した。まあ、お母さんよりも大きい気がするけど……。僕のことを中学生だと思っているから気にしていないんだと思うと、急に申し訳ない気持ちになってきた。

「あのっ、僕、本当は池田綿三じゃないんです。乃木坂吟つて言います。それで、その……高校一年生です……すみません……」

藤巻さんのきよとした顔に、さっと赤みが差す。彼女は慌てて僕から離れた。

「しつ、失礼しました！」

「僕こそ、今まで黙っててごめんなさい。それに、僕は怖くて泣いてたんじゃないですよ。藤巻さんが無事に治って、ほっとして涙が出たんです。だから気にしないでください」

「ほっとして……」

彼女はその言葉に何らかの感慨を感じたようだった。胸に手を当て、優雅に笑いかける。

「ありがとうございます」

何に対して言われたお礼なのかはよく分からなかったが、彼女が喜んでくれたならそれでいい。

それから藤巻さんが立ち上がり、僕も倣って立ち上がった。初めて彼女と並んでみると、ほとんど目線の高さに差を感じない。僕たちは同じくらいの身長らしい。

ふいに、藤巻さんが小さく「あ」と声を漏らした。

「どうしました？」

「同い年なら、ため口で構いませんよ」

「分かりまし……分かった」

僕の言葉に満足したように頷くと、彼女は鉄格子をぐいっと曲げて、大きな隙間を作る。鮮やかな力技にちよつと感動した。

「さあ、脱出しましょう」

藤巻さんの口調は、これがデフォルトラしい。

僕は彼女にうながされて窓枠によじ登り、隙間から外に出た。身体が小さくてよかったと思える貴重な瞬間だ。藤巻さんが出てこようとした時、角谷さんが部屋に戻ってきた。

「お前たち！」

「……さようなら、お母様」

藤巻さんは勢いよく窓から飛び降りた。部屋の中から女の人の怒号が聞こえたが、無視して一緒に走り出す。

「ここは次成<sup>つぐなり</sup>県のもくば駅付近。もくばエクスプレスに乗れば、虹間駅まで三十五分です」

「僕、ポケットの中に財布持ってるよ。たぶん二人分のお金はあると思う」

「決まりですね」

駅付近なら追っ手も目立ったことは出来まい。希望が見えてきた僕たちの前に、黒いジャージを着た男の人が立ちふさがった。

「Op・4……」

「よう、Op・1」

片手をポケットに突っ込んで、もう片方の手をフランクに振っているOp・4さんからは、全く敵意を感じない。普通に街中で知り合いと会ったという感じだ。

「私はあなたとは戦いたくありません。そこをどいてください」

「あー、それ同感！ 俺もねーちゃんとは戦いたくねえや。戦ったって勝ち目ないし。でも命令なんだよねー。言われたとおりにしないと俺が怒られちゃう」

全く緊張感のないヘラヘラした態度からは思考が推し量れない。いきなり撃ってくるかも知れないよと藤巻さんに注意しようとしたら、それより先に銃が飛んできた！……え、弾じゃなくて、銃？「やばい、おーぱすわんにじゅうとられちゃった」

演技じみた声で、彼はそう叫んだ。続いて、耳につけた小型通信機を地面に叩きつけ、また白々しく声を上げる。

「うわーやめてくれー、やっぱりおれじゃかてなかったよ」

そして通信機を踏みつぶした。彼が足を上げると、そこにはジャンクになった通信機があった。

「これでよし。俺はOp・1に負けました、と」

「ふふつ、あなたらしいですね」

藤巻さんは楽しそうに微笑んでいる。始めからこうなることが分かっていたかのようだ。

「お別れの前にさ、少し俺の話聞いてよ」

「何ですか？」

「俺さ、Op・1のこと、ずつとうらやましいと思って見てたんだ」

依然としてヘラヘラしたまま彼は語り始める。

「俺は誰にも萌えないし、人を殺しても悲しくない。俺って自由人に見えるけど、感情の範囲が狭いんだよな。だいたいヘラヘラしてる感じ。それに比べたらねーちゃんは、命令には従順だったけど、喜んだり悲しんだり表情は豊かじゃん？ 他のオーパスがギスギスしてる中で、ねーちゃんだけは何かが違った。お前には、ノクターンなんかじゃなくてもっとふさわしい居場所を見つけてほしいって、何となく思ってたんだよね。だから今日は俺にとってもいい日なんだ。これで話は終わり。あ、その銃はやるよ。俺からのなむけだ」

藤巻さんは夜色の拳銃をじっと見つめてから、腰の金具に固定して上着で隠した。それから彼女は、真剣なまなざしでOp・4さんを見上げた。

「Op・4、私たちと一緒に行きませんか？」

「ははは、俺はいいよ。お前と違って人の心を持ってねーから」

「……そうですか」

彼女は少し寂しそうに肩を落としたが、すぐに心を切り替えたようだ。精一杯の笑顔で別れを告げる。

「お元気で！」

「ねーちゃんもな！」

僕たちは、再びもくば駅への道を走りだした。

\*\*\*

母さんは軍の英雄だった。

けれど母さんは、英雄たる自分を嫌忌していた。

私は人殺しなの。人殺しのくせに、人並みに幸せになろうだなんて思ったから、罰が当たったんだ。

父さんは終戦の年に母さんと結婚して、五年後に殺された。母さんを恨む力デニア人による犯行だった。母さんはそれを天罰と呼んだ。そして、幼い私に怒鳴りつけた。

あなたは生まれてはいけない存在だったのよ。今すぐ私の前から消えて！

母さんは誰よりも自分を憎み、そして自分の血を疎んだ。あたしはどうしようもなく悲しくて、哀れな母さんを憎むこともできず、ひたすら泣いていたように記憶する。殴られても文句は言わなかった。子供は親の暴挙を正当化するものだ。

しかし成長するにつれ、母性の幻想は薄れていった。こんな人のために苦しむなんて、もうまっぴらだ。そう思った時ふと気づく。

こんな気違い女に存在を否定されたって、気に病むことないじゃないか。それなのに、どうしてこんなに苦しいの？ あたしが母さんに執着しているから？ そんなはずはない。あたしは母さんなんて大っ嫌いだ！ そう自分に言い聞かせた。どんなに求めても手に入らないものは、いつそ嫌いになってしまった方が楽だと知っていたから。

でも、あいつに「愛している」と言われた時。

一瞬だけ、母さんに愛されたような気がした。

あいつは母さんじゃない。それは分かっているけど、あたしはずっと待ち望んでいたのかも知れない。

あの顔で、あの声で、あたしを認めてくれる存在を。

\*\*\*

僕たちはもくばエクスプレスに乗っていた。ところどころに木馬に乗った少女の萌えイラストが描かれた、可愛い電車だ。この少女どこかで見たことあるなーと思っていたら、『くるたんのおもちやばこ』に載っていたイラストくるたんだった。こんなところま

で東条さんカラーに染められているなんて、さすがの一言に尽きる。

「私、もう自由なんですね。まだ実感が湧きません。でも、ずっと憧れでしたから……人生で最高の気分です」

流れていく景色を幸せそうに眺めながら、藤巻さんが言った。その服装は、もちろん例の黒服だ。機能的なデザインで、いかにも戦闘に向いている感じの。

「ねえ、藤巻さん。その服とっても目立ってない？」

幸せ気分には水を差すのは忍びないが、どうしても気になってしまった。

「あら、ご存じないですか？ 最近アニメで戦闘もののブームがあったでしょう。その影響でこういう服が流行ってるんですよ。動きやすいので仕事着にしましたが、一般的なファッションです。安心してください」

なるほど。僕の今どきのファッションに対する知識の少なさを痛感した。あまり外出をしないクタオだから仕方がないのだけれど。でも、もう一つ問題が。

「僕の脚の怪我、さつきからちらちら見られてる気がするんだ」

「何か訊かれたら、『破壊少女メガキモス』の将太のコスプレだと言いましよう」

「将太っていつも脚怪我してるの？」

「不定期に皮膚を突き破って脚から角が生えてくるキャラクターです。登場シーンの大半は出血しています」

「ええっ、なんか怖い」

僕なんかよりも、裏社会生活を送ってきた藤巻さんの方がずっと萌えに詳しい。ノクターンの人も萌えをたしなんているんだね。ちよつと意外。

今の会話に関連して、前々から気になっていたことを訊いてみた。

「藤巻さん、『安心してください』って口癖？」



「ああ、言われてみると……」

藤巻さんは自分の言動を振り返っているらしく、五秒くらい考えていた。

「確かにそうですね。ミッションで襲われた人たちによくそう言っているから、癖になってしまったようです」

苦笑しながら軽やかに微笑む。ああ、こういう人を癒し系って呼ぶのかな。狂乱の中で、一人の聖女が人々をなだめている様子が目に浮かぶ。優しい彼女の微笑みに、多くの人が救われたことだろう。

現在の心配事がなくなったので、まったりと過去の話をすることにした。

「どうして今日逃げ出そうって決意したの？　すごく勇気のいることだったと思うけど……」

これは純粋な疑問だ。前もって準備していたならまだしも、普通は急に逃げようと思ったりはしない。今まで『お母様』に従っていた彼女が、どうして今になって旅立とうと思ったのだろうか。

「実を言うと、限界だったんです。これ以上いじめられていたら、私はお母様を憎んでいました。愛する気持ちが負の感情に負けないうちに、お母様から逃げたかった。子供なら、親を好きでいたいじゃないですか」

予想外な、しかし藤巻さんの性格から考えれば当然の答えが返ってきた。寛容な彼女が限界まで追いつめられた背景には過酷な仕打ちがあったことは明らかで、微笑ましいとは言えないが、彼女の懐の温かさを象徴した言葉である。

藤巻さんはさらに続けた。

「それに、あなたがいたから」

「僕？　ああ、爆弾をはずす人間がってこと？」

つまり、チャンスさえあればいつでも逃げようと思っていた、と。自分で訊いておきながら、それは何か違うと感じた。本当の答えは、今度こそ予想外だった。

「それもありますけど……どうしてもあなたをお助けしたかったんです」

僕のため？

会ったばかりの僕のために、危険を冒してくれたの？

「私の傷を気にかけてくださったのは、あなたが初めてなんですよ」

この上なく綺麗な笑みを浮かべて、藤巻さんは言った。

電車ががたごとと揺れながら、僕たちを安心できる場所へと連れていく。

虹間駅に着いてからすぐに公衆電話に向かい、東条さんに電話をかけた。ちなみに僕は携帯電話を持っていない。もともと実家が貧乏だった上に、僕の一人暮らしが家計に与えた打撃は測り知れず、とてもではないが携帯電話を買う余裕などなかったのだ。虹高に通わせてもらえるだけでも感謝しているが、現代社会において不便だというのは否めない。

『はい、くるたんでーす！ どちらさまですか？』

つながった！ 懐かしい東条さんの営業ボイスだ。メモ帳はブレザーの中だったので、電話番号を覚えていたのは幸運だった。知らないおじさんが出たらどうしようかと思ってハラハラした。

「僕だよ、えっと、乃木坂です」

『のぎさかーっ！？』

耳をつんざくような、悲鳴にも聞こえる歓声を上げて、電話の向こうの東条さんは僕を質問攻めにする。

『今どこにいる？ ケガはないか？ 何があっただんだ？』

「へつくしゅ」

『？』

監禁室も寒かったが電車の中も冷房が効きすぎていて、風邪を引いてしまったのだ。本音を言つと、その辺にでも寝転がりたいくらい

いだるい。

「虹間駅にいるよ。何かあったかは後で話す。とりあえず、東条さんと合流したいんだけど」

『だいじょーぶなのか？ 今から虹間駅に迎えをよこす。待ってる』

「あ、僕以外にもう一人保護してほしい人がいるんだけど、いい？」

『だれだ？』

「えっと、ディーヴァの一人？ って言うか、さっき拳銃持って窓割った人って言うか、いや、でもほんとに悪い人じゃなかったから一緒に逃げて来たんだよ」

『よくわからないぞ……』

「ごめん、複雑な状況なんだ」

『んー、乃木坂が信じるなら、ボクも信じる！ ディーヴァっていうのも気になるしな。そいつも迎えに行こう』

「ありがとう」

電話を切ると、新たな穴が開いたテレフォンカードが戻ってきた。それに何となく充足感を覚える。

「どうになりました？」

後ろで僕を待っていた藤巻さんに問われて、迎えが来ることを告げた。

「大丈夫ですか？ 顔が赤いですよ」

「たいしたことないよ。へくしゅっ」

「完全に風邪引いてるじゃないですか。ベンチで座って待っていきましょう」

藤巻さんに連れられて待合所に行く。人混みが僕たちを紛わせてくれたおかげで、僕の怪我に気づく人はいなかった。時計を見るともう七時を回っている。今日の晩ごはんどうしよう。

一息つくと、藤巻さんはぼつりと不安事を漏らした。

「東条さんは、私のことを受け入れてくださるでしょうか」

確かになあ……。スタジオピンクでは、侵入・破壊・略奪・逃走を一通りやってきたわけだから、フォローする余地もない。それでも何とか元気づけようとする。

「大丈夫。東条さんは僕を信じるって言ってくれた。藤巻さんが無事に社会復帰できるように、きつと応援してくれるよ」

「乃木坂さんにそう言っていたけると安心します」

気休めでしかないような言葉で、彼女は安心してくれた。「安心してください」が口癖の藤巻さんだけど、本当に安らぎを求めているのは彼女自身だったのかも知れない。それが今こうしてほっとしてくれていることが、僕には嬉しかった。

十数分ほどして現れたのは、人混みの中でも目立つミツルさん。つていうか彼は公共の場でもピンクフリル金髪リーゼントサンングラス姿なのか。勇者だ。

「誰ですかあの人っ」

藤巻さんが必要以上に警戒しているのには笑ってしまった。

「東条さんの専属スタイリストだよ」

「本当ですか？ 乃木坂さんに何かあつたら私」

「本当だからその銃しまつてえ！」

訝しがる藤巻さんを何とか落ち着かせて、ミツルさんのもとへ向かう。

「吟ちゃん！ 無事でよかったわあ。さあ、一緒に帰りましょう」

ミツルさんは満面の笑みで僕を迎えてくれた。それから気を張っている藤巻さんにも目を向けて、にっこりと笑いかけた。

「あなたのことはあたしたちが全力でサポートするわ」

「……ありがとうございます」

「そんなに固くならないの！ 大人は子供を守るもの。あなたはもつと子供らしく気楽にしていいいのよ」

彼の容姿からは想像もつかない頼もしさに触れて、藤巻さんは一気に緊張を緩めたようだった。ミツルさんの大人としての矜持には、見習うべきものがある。僕も彼のように立派な大人になりたい（外

面的なことはまた別として）。

「さあ、外で車が待ってるわ。行きましょう」

傍から見たら、僕たちは立派なコスプレ集団に見えたことだろう。

目的地はスタジオピンクではなかった。

「え？」

「当り前でしょ、一度ばれた場所をアジトになんてできないわ。すでにスピアの施設に全ての機能を移し終えたところよ」

なんて迅速な処置。

「これから行くのはスタジオローズ。ほら、もう見えてきたわ」

壁が一面薔薇色！　なんてことはなく、外観はつまらないコンクリートの建造物でしかなかった……などとスタジオピンクの時と同じ感想を抱く。要するに何の変哲もない、風景レベルの建物だった。

運転手さんにお礼を言つて車から降り、ミツルさんの後についてスタジオに入る。ロビーには、僕のご主人様がいた。

「乃木坂おかえりーっ！」

それまでは隣にいる色川社長と話をしていたようだが、話を打ち切つて僕のところまで走つてきた。小さな身体がドレスと一緒に跳ねて、得も言われぬ可愛らしさを振りまいている。　あれ、止まらない？　ぶつかるぶつかる！

「ぐえ」

東条さんは僕に頭突きをかましてフンと鼻を鳴らした。

「見つかったも大したことにはならないっていったくせに！　捕まるなんてうそつき！　ばーか！」

「ごめんね」

「ボクは怒ってるよ。だけど」

彼女は僕にしか聞こえない低い声で、こう続けた。

「帰ってきてくれてよかった」

「……うん」

どうしよう、嬉しくてちょっと涙が出そう。帰りを待っていてくれる人がいるというのは幸せなことだ。

東条さんは藤巻さんを見て、「おねえちゃん」と呼びかけた。くるたんとしての口調では、同年代の相手でもおねえちゃん扱いらしい。

「おねえちゃんは、もうボクたちを襲ったりしない？」

その目は、疑っていると言うよりは、純粋な子供の目をしていた。しかし、彼女は肉体的には幼女でも、中身は天才女子高生だ。きつと頭の中では、複雑な思考処理が行われているのだろう。

「ええ。絶対に」

「そっか。パパがおねえちゃんに話があるって。行っておいでよ」

色川社長が手招きをして、藤巻さん呼び寄せた。三十秒ほど喋った後、二人はエレベーターの前まで歩いていった。あの二人が並ぶと、何だかシリアスな雰囲気ができる。

「何か用があったら、私たちは社長室にいるよ」

「乃木坂さん、東条さん、また後でお会いしましょう」

きつとディーヴァがどうかノクターンがどうか、込み入った話をするのだろう。二人はエレベーターの向こうに消えた。

「乃木坂、さむいのか？」

「え？」

「震えてるから」

確かに、館内に入ってからというもののうすら寒く感じる。クーラーが効きすぎているのではなく、僕が寒がりになっているのだ。手で腕を擦りながら正直に答えた。

「実は向こうで風邪引いちゃってつくしゅ」

「カゼ！？ そーいえば脚もケガしてるんだったな。ボクの許可なく体調を崩すとは、この不屈き者っ」

うわ、思ったより反応大きい！ しかも怒られた！

「罰としてスタジオロースの医療室でのキンシンシヨブんに処す！」

あれ。

「もしかして、治療してくれるってこと？」

「当たり前だろ。主たるもの下僕の健康を守るべし！ さあ、話はあとにして、とりあえず今はあたたいカッコして寝てろ」

東条さんの取り計らいによって、僕はしばらくスタジオロースでお世話になることになった。一人暮らしの身にはありがたい。ただ……。

家に置いてきた開封済みの牛乳が腐らないか心配だ。

医療室の責任者である東条博士に案内されて、僕は入院部屋のような部屋に入った。東条さんもついてこようとしたが、博士に「風邪が移ったらどうするの！ ライブが近いのよ」と言われて渋々自室に戻っていった。そう言えば、東条さんの部屋はこの建物でもやはりモノトーンなのだろうか。

「何ボーっとしてるの。はいこれ体温計ね。着替え持ってきてあげるから、その間に計っとくのよ」

「あ、はい、ありがとうございます」

東条博士が出て行った後、体温計をわきの下にはさみながら部屋を観察した。ベッドが四つ、それぞれカーテンがついていて、しかも憧れのテレビまで置いてあるという素晴らしい設備だ。小さいころ肺炎にかかって地方の病院に入院したことがあったが、その時はテレビのスイッチのつけ方が分からなくて悲しい思いをしたことを、今でもよく覚えている。今度こそ何か見よう。特にアニメ！

「なに物珍しそうにテレビなんか見てるのよ」

ちょうど体温を計り終えたころ、東条博士が荷物を持って帰ってきた。彼女は冗談のつもりだったのかも知れないが、実際に僕は物珍しそうにテレビを見ていたので、一瞬挙動不審になってしまった。おそらく何らかのツツコミを期待していたのだろう、博士は僕の反

応に不満げな顔を見せた。

「ノリ悪いわね……。体温何度だった？ 三十八・六？ 結構あるじゃない」

僕から体温計を受け取り、引き換えに荷物を押しつける。

「着替え。それとあなたが置いていった学生鞆。とりあえず脇に置いていて、ワイシャツ脱ぎなさい」

「え、何で博士の前で……」

「診察！ 私は医者でもあるの。医療室の責任者ってことから察してよ」

あ、ああ、そっか。彼女は変な人というイメージがあつて、つい身構えてしまった。

風邪の具合と脚の銃創を診た後、東条博士は薬を調合しに再び出ていった。窓越しに、白衣の姿が足音と共に遠ざかつて行くのを見届ける。遠い後ろ姿であつても、博士の美しさは輝いていた。だが、それを綺麗と感じる前に、僕はこんなことを思った。

成長後の自分の美しさを毎日見せつけられていながら成長できない東条さんは、どれほど切ないだろう、と。

一人きりになった僕は、ほとんど無意識のうちにベッドに倒れ込んだ。全身に安心感が広がる。体重と言うよりも、存在そのものをベッドに支えてもらっている気分だ。銃で撃たれたり、監禁されたり、人の首を切ったり……。今日一日で受けた刺激はとくに僕の許容量を超えていた。僕にはもう、自分を支えるだけの力がなかった。

恐れ、不安、そして喜び。処理しきれないごちゃまぜの感情が今になって押し寄せてくる。仰向けになってこらえようとしたが、突然目頭が熱くなって涙が溢れ出た。

「……ふえっ……」

昨日限りで僕の「日常」は終わったんだと、今になって真に理解した。例えこれから学校でいじめられたとしても、そんなことは些細な問題になつてしまふような、大きな世界に僕はいる。ちっぽけ



な僕には大きすぎる世界だ。でも、耐えられるかどうかじゃない。僕は東条さんの下僕なんだから、一緒に歩くんだ。

僕は顔に腕を押しつけ、声を殺して泣いた。泣けば泣くほど軽くなるような気がして、ひたすら泣き続けた。

やがて、安らかな眠りが僕を包み込んだ。

\*\*\*

吟くんがスタジオロースの医療室で寝息を立てているのを見つけた時、私は安堵のあまりその場にくずおれてしまった。

私が貴方を探している間に帰ってきてくれたのね。

貴方を失うことになったらどうしようかと、ずっと怯えていたのよ。

私の手が、実体と温度を持って彼の額をなでる。久しぶりに触れる人の肌は熱っぽかったが、それが正常の範囲なのかそうでないのか、三十六度を忘れた私には判断できなかった。

色素の薄い髪は父親譲りだが、無垢な寝顔はあの方によく似ている。そう気づいただけで私は幸せな気分になる。彼にとって私は高野透という素性の知れない女でしかないけれど、私にとって彼は望みそのものだった。

私は吟くんに出会ってはならないと、彼の父親から言い含められてきた。そしてそれを律儀に十年間守ってきた。

けれど昨日、私たちは出会ってしまった。それだけではない。彼は東条胡桃と出会い、次いでノクターンの少女とも出会っている。

彼の父親から、吟くんに情報を与える許可は得た。

明日彼が目覚めたら、私とあの方の話をしなければ。

彼が「調律者」である以上、「騎士」との遭遇は避けられないのだから。



### 第三章 のぞみ（後書き）

読んでくださってありがとうございました！

執筆者のサイト『Re:I』

<http://rei-yumesaki.jimdo.com/>

## 第四章 ほし

次に僕が目を開けた時、カーテンの隙間からは朝日が差し込んでいた。時計を見ると五時半。今日は土曜日だが、平日休日分け隔てなく六時に起きている僕にとっては、少し早い起床くらい感覚だ。でもまだ頭痛もするし、しばらく横になっていようかな……。

そう言えば、寝る前と着ている服が違う。布団から手を出して袖口をしげしげと見つめていると、横から声がかかった。

「貴方の服は、東条胡都が着せ替えていたわ」

「うわっ」

今まで全然気がつかなかったが、高野さんがベッドの隣の椅子に座って僕を見ていた。本当に存在感の希薄な人だ。すぐそこにいると分かっていても、幻を見ているような気分になる。とりあえず基本的な挨拶をしておこう。

「ええと、おはようございます」

「おはよう」

にこりとも笑ってくれないよ……。この人とのように接するベきなのか、皆目見当がつかない。彼女のことはほとんど知らないのだ。何者で、どこから来たのか。いちご柄のパンツが好きということしか知らないと言っても過言ではない。

「まずは謝罪させて」

「どうして高野さんが謝るんですか？ 僕はむしろお礼を言いたいの。昨日は助けてくださってありがとうございました」

しかし高野さんはほんのわずかに顔を曇らせた。

「昨日のノクターンの侵入は私の責任。だから謝罪する」

驚いて身体を起こす。勢いがよすぎて、ずきりと頭に痛みが走った。

「どういうことですか。高野さんはノクターンの関係者なんですか？ そもそも何でスタジオピンクの場所を知ってたんですか」

一息に質問を浴びせると、僕は背中側にあるベッドの柵にもたれかかった。やはりまだ本調子ではない。熱を出している時特有の嫌な寝汗が、外気に晒されて冷える。

高野さんは淡々と話し始めた。

「私はどこの組織にも属していない。そして貴方の敵ではない」

「それじゃあ高野さんは何者なんですか」

白を基調とした静かな医療室に、透き通った声が響く。

「単刀直入に言えば、宇宙人よ」

……そっか。宇宙人なのか。宇宙人だったら超能力くらい使ってもおかしくないよね。納得納得。

「驚かないのね」

無表情で見据えられると、睨まれているのに似た印象を受ける。もしかして驚いてほしかったのだろうか。

「もともと宇宙人はどこかにいるって思ってたし。それに、僕は昨日一日でアニメを超える経験をしてきたんですよ。信じます」

「そう。なら話しやすいわ。これから私が言うことは荒唐無稽に聞こえるでしょう。でも全て真実よ」

僕は少し緊張して、高野さんの話に耳を傾けた。

「始めに、スタジオピンクの場所がノクターンに知られた経緯について話すわ。もしかするとこれが一番信じられないかも知れない」

信じられないって、一体どんな壮絶な過去が……!?

「おととい、手書きの地図を見つけたら捨てるように頼んだわね。

それは、私がスタジオピンクまでの道のりを書いたメモのことだったの。私が道端に落としたのを、ノクターンの人間が拾ったのだと思われる。ごめんなさい」

……え。

「落し物が原因だったんですか？」

「私は真実しか言わない」

しょぼっ。

「そもそも何でスタジオピンクの場所を知ってたんですか。今だっ

てこうしてスタジオローズにいますし……」

「見たでしよう、私が壁を通り抜けるところを。私は自分自身と私に隣接する物体を不可視な霊体にする『ゴースト』という力を持っているの。ゴーストを駆使すれば、尾行・侵入・探索は至極簡単なものになる。私に行けないところはないわ。この星に来てから五十年近くが経ったけど」

「ちよつと待て、今何歳だ。」

「私はずっと食料や生活用品を盗み続け、不法侵入を繰り返してきた。以前貴方の部屋に住んでいたというのは本当だけれど、それは寝食に利用していたということであつて、不動産会社と契約していたわけではない。貴方が住み始めたとは知らなくて、出会った時は正直かなり焦ったわ。動揺を悟られないように必死だった」

冷静沈着にしか見えませんでした。

「私のことは他の人には言わないで。ばれたら問題になる」

「えつと、宇宙人さんですから、治外法権が適用されるかも！」

「問題は捕まることじゃない」

渾身のフォローは、高野さんの能面顔の前につけなく撃沈した。

「ゴーストになれば、捕まったとしても逃げられる。地球人の持つ物理的攻撃手段は私には通用しない。それよりも、私は私たちの存在を知られることを恐れているのよ」

「たち？」

「地球上にはもう一人、私の主でカタリ様という方がいる。カタリ様は私と違ってゴーストになることはできないし、そもそも自分が宇宙人だということもご存じないの。私にとって最も優先すべきことは、カタリ様の平穏な生活を守ること。宇宙人が地球にいると知られたら、カタリ様にまで調査の手が回るかも知れない。だから絶対に私のことは誰にも言わないで。……今日ここに來たのは謝罪のためだけじゃない。貴方にはゴーストが効かないから、うかつに他言される前に口封じに來たのよ」

脅しとも取れる言葉を投げかけられながらも、僕は高野さんを怖いとは思わなかった。純粹に『カタリ様』を想う気持ち、真剣な眼差しから伝わってくる。その様子は、むしろ微笑ましいとも呼べる気がした。

「カタリ様って、高野さんにとってとても大切な人なんですわ」

僕がそう言った時、高野さんは初めて大きな表情の変化を見せた。何と口元を上げて微笑んだのだ。

「カタリ様は私の全てだから」

表情に乏しい彼女の顔をここまで動かすなんて、カタリ様は偉大な人なのかも知れない。

「貴方にはもう少し話につき合ってもらおう。ここからは、先日貴方に言おうとしてやめた話の続き。貴方には聞く権利と義務があると判断した」

高野さんは微細な動作で居住まいを正して、抑揚こそ欠けるものの、流暢な言葉遣いで僕に語り始めた。

「私の故郷の星　ルルティナでは、『力』を持つ者に特別な役目が与えられる。力は幼児期の終わりごろに覚醒し、覚醒した者は力の種類によって役目を振り分けられるの。ルルティナ全土を支配するのは女王の役目。女王の力は純粹で神聖な力。女王の声に含まれる力に触れると、ルルティナの民は問答無用で萌える」

「それって……」

「そう、貴方たちがMPと呼称する力と同じよ。ルルティナの女王は萌えをもつて星を統括する。民は女王に絶対的な愛を向け、幸せに暮らしているわ」

萌えによる世界征服がすでに他の星で実践されているとは恐れ入る。ここまで来たら、MPが他の星にもあると考えるよりも、高野さんと共にMPの要素が地球にやってきたと考えた方が自然だ。

「女王の力を持った女王候補は姫と呼ばれる。そして、一人の姫に一人ずつ、女王の力を受けても萌えず、ゴーストのように特別な力を持つ『騎士』が存在する。姫は姫の役目を、騎士は騎士の役目を

果たさなければならぬ。私は姫として生まれたカタリ様の騎士となり、以来ずっとお仕えしているの」

つまり、騎士の人生は全てお姫様に捧げられるということ。高野さんがカタリ様を何よりも大事に思っていることにも納得できる。

「姫たちは女王を決めるその日まで、城に幽閉され続ける。女王以外の者に民が萌えてしまったら規律が乱れるから。姫の純粋な力はルルティナにおいて重要なエネルギー資源と見なされていて、姫たちは専用の装置で力を搾取されながら狭い世界を生きるの。カタリ様はいつも寂しがっていらっした。騎士は、孤独な姫に唯一与えられた味方のようなものだとは私は思っているわ」

高野さんがカタリ様を想う気持ちと、僕が東条さんを想う気持ちは、ひとりぼっちの主人を支えたいという点で一致していた。

「女王の任期は五百年で、任期が切れる前日に、次期女王を選ぶための儀式が執り行われる」

「ご、ごひやくねん……!？」

「地球人から見たら私たちは長生きで、力も強いよね。でも、驚くようなことではないわ。違う惑星で生まれた両者がこんなに酷似していることの方が奇跡的なだから」

千年も生きるんだったら、ルルティナには仙人みたいな人がたくさんいそうだなあ。僕の脳内では、ルルティナは白く長いひげを生やしたおじいさんだらけの星というイメージになってしまった。

「儀式で姫たちは互いに戦わされる。そして、最も強い者が次の女王となり、敗者は再び力を搾取される日々に戻るの」

「そんな……女王になれなかったら死ぬまでこき使われるってことですか？」

高野さんの表情が少しだけ苦々しくなった。彼女の表情の変化の中では大きい方だ。それだけ姫の境遇に心を痛めているということだろう。

「そうよ。でも、女王になれたからと言って幸せになれるわけじゃない。女王は民が能天気な萌えている間にも、一人で政務をこなさ



なければならぬ。吟くんも、東条胡桃を見ていれば分かるでしょう？　それがどんなに孤独なことか」

東条さんは言っていた。MPを使うと周囲の人がみんな萌えてしまつてまともに話もできないと。一度でもMPを使った相手には、くるたんとしての彼女が強く印象づけられる。MPを使っていない時でも、その人は東条さんを萌えの対象として見るようになるだろう。

萌えまくる人々に愛嬌を振りまきながら、本心では冷めた目で彼らを見ている疎外感、何度想像してもぞつとする。そんな疎外感を五百年も抱え続けるなんて。それじゃあ姫として生まれた時点で幸せになれないじゃないか。

「幼いカトリ様の夢は、自由になることだった。だから私はその願いを叶えたの。カトリ様をゴースト化して一緒に城から抜けだし、パクつてきた宇宙船に乗つて、私たちはルルティナを飛び立った」

すごいことするなあ……。でも「グッジョブ！」という言葉がこれほど似合う行動もない。僕にはそんな度胸はないから尊敬する。

「その頃の私は、行く当てもないのに、カトリ様を幸せにするのだと意気込んでいたわ。青臭いとは思うけど、私は今でもそれについては後悔していない。後悔するのはもう少し先のこと。私はルルティナとよく似た環境である地球を発見し、地上に降り立とうとしたけれど途中でコントロールが利かなくなり、宇宙船は墜落してしまつた」

「大丈夫だつたんですか!？」

「宇宙船は落ちる途中で燃え尽きてしまつたけど、私とカトリ様はゴースト状態で着地したから外傷はなかったわ。墜落した先は雑木林だった。私はカトリ様の無事を確認すると、水や食べ物を探しに出かけた。……それが最大の失敗だった。私が戻つて来た時、そこにカトリ様はいなかった。近くの孤児院の青年がカトリ様を見つけて連れ帰っていたの」

あれ、その話、どこかで聞いたことあるような……。

「必死の思いでカタリ様を探し出した私は、カタリ様が記憶を失っていたことを知った。落下のショックで、自分は死んだと思い込んでしまったのですね。ルルティナの姫としてのカタリ様は死んだ。孤児院の青年とも仲良くしていらっしやって……私は身を引いたの。私という限り、カタリ様はルルティナの関係者になつてしまふ。カタリ様が新しい人生を歩み始めるには、私は不要。そう考えて、私はしばらく地球を放浪していた。第三次世界大戦が始まって、戦場の歌姫のうわさを聞くまでは」

カタリ様は　。

「歌姫かぐやはカタリ様の二度目の人生なの」

高野さんはカタリ様と一緒にいたい気持ちを抑えてまで彼女を姫の身分から解放しようとしたのに、結局カタリ様は女王の力を使い始めてしまった。

僕はその続きを知っている。

「私はカタリ様が行くところについていき、陰ながら戦禍からお守りした。カタリ様も色川拓也も、戦地がどれだけ危険かをいまいち理解していないようだった。世界を平和にすることに夢中だったのね。でも、そんな無邪気さがまた愛しくて、私は『かぐや』を止めはしなかった。でもその結果、カタリ様は、私の目の前で……」

高野さんはそこで一瞬口をつぐんだ。ふと、一見無表情に見える彼女の顔に辛そうな影が差しているのに気づく。僕は続きを言おうとする高野さんを制止した。

「その先は、僕、知ってますから」

かぐやさんは錯乱した民間人に撃たれてしまったが、それは高野さんのミスではない。想定できないことだった。それでも高野さんは後悔してやまないのだろう。

「カタリ様がお目覚めになった時、一番喜んだのはきつと私。私であつてほしい、と言うべきかしら。色川拓也は『かぐや』による世界平和を諦めてはいなかったようだけど、カタリ様は色川拓也の息子の純人と恋をして、ただ自由を求めていらっしやった。私は今度

こそカトリ様に幸せになつていただくために、色川純人とアプローチを取って駆け落ちを提案したの。彼、何て言つたと思う？ 『俺はくぐやさえいれば、世界が滅んだって気にしない』ですって。私は色川純人を信じて、カトリ様との結婚を許した」

お義父さんとっみたい。

「駆け落ちは成功したけれど、カトリ様は私のことを知らないから、全て色川純人のおかげだと思つてゐる。カトリ様の幸せは私の幸せでもあるけど……少し悔しかった」

無表情で本音を吐く高野さん。無機質な所作の割には人間らしい人だ。

「これでカトリ様についての話はおしまい。色川拓也はカトリ様が宇宙人だと信じていて、今でも密かに宇宙人探しをしているから、貴方には下手に『宇宙人はいると思いますよ』なんて言つてほしくなかつたのよ。……ただ私が思い出話をしたかつたというのもあるけれど」

もしかしたら高野さんは寂しかつたのかも知れない。地球に来てからちゃんと会話をしたのは色川社長の息子さんくらいなんじゃないだろうか。その孤独も全てカトリ様のためとは言え、辛くなかつたわけがない。存在を隠さなくてもいい人間が増えてよかつたと素直に思う。

「それから貴方の話」

「僕？」

「ルルティナでは、姫と騎士の人数に乱れがあつた時、それによつて起こる混乱を終息させるために『調律者』と呼ばれる役割が生まれる。桁外れの身体能力を持ち、女王の力も騎士の力も無効化する最強無比の是正者。本来なら、そう説明できる。でもこの星では、何故か貴方に調律者としての力が宿つてしまつたの」

「何故か」を強調されたような気がしたが、もともと抑揚のない人なので気のせいかも知れない。

「調律者はその役割上、力を持つ者を集める性質がある。だから貴

方は私と出会い、東条胡桃と出会い、ノクターンの少女と出会った。ディーヴァからこんなに力のある者が生まれるなんて、地球人とルルティナ人の遺伝子は相性がいいみたいね。でもそれは、それだけ貴方がルルティナ人の身体能力を受け継いだディーヴァと出会いやすいということなのよ。貴方は力を無効化するけれど、身体的にはとても不完全。だからこの話を聞いてもらったの。せめて知識だけでもあれば、心構えはできるから」

僕が不思議な力を持つ人々と出会ったのは、偶然ではなかったという事か。それなら、今まで気づかなかっただけで、普段からディーヴァの誰かとすれ違ったりしていたのかも知れない。東条さんとの出会いをきっかけに、次々と表面化してきただけで。

「あともう一つ。始めに私は犯罪を犯して生活していると言っただけで、少し言い訳させてちょうだい。力には恒常型と意識型の二種類があるの。意識型が自らの意思で発動させる能力であるのに対し、恒常型は発動している状態がデフォルト。力を抑えるのはとても難しい。ゴーストは恒常型の力で、私は今でも長時間姿を現していることはできない。だから働けないの。決して怠けているわけではないのよ」

姿を現すのに努力が必要だなんて……。そしたら誰かとお話しするにも苦労するだろう。表情や言葉の抑揚に乏しいのも、会話の経験が極端に少ないせいなのかも知れない。一人では生きていけないような小さい頃から、高野さんはゴーストだったんだ。

ん？ 小さい……？

そこで僕はぱつと重大なひらめきを得た。

「高野さん、東条さんの病氣ってもしかしてルルティナ星から来たりしませんか？」

「病氣？」

「幼児のまま成長が止まっちゃった原因の病氣ですよ。東条さんの成長はもう望めないんでしょうか」

ルルティナ人の遺伝子か、高野さんたちが地球に来た時に持ち込

まれた異星のウイルスが病気のもとなら、対処法を知っているのではないかと思つたのだ。

しかし、帰ってきた答えはあまりに残酷なものだった。

「それは病気のせいじゃないわ。東条胡都が不老の薬を東条胡桃に投与したせい」

「……え？」

「彼女自身もその薬で若さを保っている。東条胡桃は薬の副作用を病気と勘違いしてそのように言っているのでしょうけど」

東条博士が、意図的に東条さんの成長を止めた……？

ショックを受けたその時、突然ドアが開いて、東条博士が入ってきた。噂をすれば影。

「あら、起きてたのね。調子はどう？」

そう言つて僕の額に手を当てる。この人が東条さんの成長を止めた張本人だと思うと、面倒を見てもらっているのにもかかわらず怒りが湧いてきた。ミツルさんいわく、彼女はナルシストのペドファイル。自分が幼かった頃の可愛らしさを留めておこうとも思つたのだろうか。ひどいエゴだ。東条さんは何も知らず博士を慕っているのに。

「十時間も寝てたくせに、全然熱下がってないじゃない。朝ごはん食べたら、今度こそ薬飲んでもらうからね」

博士のすぐ近くに高野さんがいるけど、やはり全然気づく様子はない。あ、今通り抜けた。

「あなたが寝てる間に服着せ替えといたけど」

「はい、お世話になりました」

博士は何故かにやにやしている。

「あなたの身体は小学生並みね」

「……」

ああああ変態変態変態っ！

もうほつとしてほしい！

寝る前に泣いていたことについて何も言われないだけかもしれませんと考

えるべきか。いや、やっぱり変態だ。

「また後でご飯もってくるから、それまで大人しく寝てなさい」

僕の反応を楽しんでから、博士は部屋から出ていった。

昨日の時点で僕は東条博士の考え方に反対だったが、この数分で彼女への好感度は劇的に暴落した。あの人は人間の尊厳を軽視しすぎだ。いつか痛い目に合えばいい。はつきりと口にする勇氣もなく心の中でそんな暴言を吐いている僕も卑怯だけど……。

「社員が活動を始めたようね。私はそろそろおいとまさせてもらうわ」

高野さんは衣擦れの音を全く立てずに立ち上がった。

「貴方との会話はとても快適だった。ゴーストのことを気にしないでいいんだもの。今日は楽しかったわ」

「いえ、こちらこそ」

高野さんはレアな笑みを浮かべて壁まで歩いていく。

「またお話ししよう、吟くん」

そして壁の向こうへ吸い込まれるように消えていった。

午後になると大分気分がよくなったので、ついにテレビを見ることにした。

もう同じ過ちは繰り返さない。テレビのスイッチは真ん中にあらず！ 真ん中のはダミーだ。押したら最後、大量のボタンが出現して人間を混乱させる。右下のこれが本物だ！

緊張に震える指先でスイッチを押すと、一瞬にして画面に色がともった。

“『なんだただのクロマニヨン人か』アニメ化決定！”

おおっ、いきなりアニメのCM。

“人気ライトノベルがついにゴールデンタイム登場！”

主人公「俺は人類最後の生き残り。休眠冷凍から目覚めた二十万年後、そこは四種類の獣人が覇権を争う女だけの世界だった」

鳥っばい女の子「なんだただのクロマニヨン人か」

主人公「ハーピー族の女王に魔神として呼び覚まされた俺は、持ち前の頭脳で大活躍！でもこれでいいのか？違う、本当の幸せは愛だ！俺は全種族の女王にフラグを立てる旅に出る！」

蛇っばい女の子「坊や、いいこと教えてあげましようか」

ウーパールーパーっばい幼女「こう見えても妾は大人じゃ！」

人魚っばい少女「……好きにすれば？」

鳥っばい女の子「ハーレムって何ですか？」

地球の命運をかけた四つ股が今始まる！

SFラブコメスペクタクル『なんだただのクロマニヨン人か』、

九月から放送開始！”

どーん！（効果音）

何かすごそうなアニメだな。でも、クタオにはちよつとなじみにくいかも。ゴールデンタイムでハーレムって……。

呆けていると画面の右上に「コール受信：東条胡桃」という文字が表示された。続いて、ど真ん中に大きく、

「応答しますか？ はい いいえ」

え、応答しますかって言われても、何これ。どうやって選ぶの？よく見ると棚にリモコンがあつたのでボタンを押してみた。エアコンが起動した。

さらによく見るともう一つリモコンがあつたのでボタンを押してみた。カーソルが「いいえ」の方に動いた。コールの意味は分からないけど、東条さんが相手なら答えは決まっている。僕は「はい」で決定ボタンを押した。

ぷつりと画面が入れ換わり、東条さんの姿が映し出される。

「おおつ、乃木坂！もう起き上がっていいのか？」

どうやらこのテレビはテレビ電話としての機能も持っているらしい。さすがにトップアイドルだけあって、東条さんのテレビ映りは最高だ。まるですぐそこにいるかのように感じる。

「うん、いっぱい寝たから、熱も下がってきたよ。脚の怪我也大し

たことないみたいだし。心配かけてごめんね」

「まったくだ。お前はボクの下僕である限り、ボクの許可なくどこかにいっちゃったりするなんて許されないんだからな！……もつと自分を大切にしろ」

ぶいっとそっぽを向いて怒ったように言う東条さん。よく考えてみたら、僕は下僕になった次の日に拉致られてその次の日はベッドの上。何て不甲斐ない。東条さんが怒るのも当然だ。

「僕、もつといい下僕になれるように頑張るよ。今『スーパー下僕道』っていう参考書を読んでるんだ。きっと読み終わったころには立派な下僕になってるからね！」

「あはっ、なんだそのギャグ！地味におもしろいな」

東条さんは何故かけらけらと笑い始めた。スーパー下僕道という書籍名のせいで冗談だと思われたのだろうか。僕は著者の名誉のために鞆から実物を取り出して東条さんに見せた。

「ギャグじゃないよ。ほらこの本！下僕の何たるかがこと細かに記されたすごい本なんだ。下僕が足をなめるのはご主人様の健康状態を確かめるためなんだって。僕もいつか東条さんの足を」

「おい」

東条さんは、困ったような、憐れむような眼差しを僕に向ける。

「それは『僕下の階の下僕』っていうマンガから派生したジョーク商品だぞ？」

「えっ」

僕は思わず本を取り落とした。

ジョーク商品！？精巧に作りすぎだっ！

「ゆーめいなマンガなのにそれを知らないってことは……やっぱりお前、クタオだったんだな」

「……」

テレビの臨場感がこれほど厭わしい時はない。東条さんは画面の向こうから静かに僕を見ていた。怒っているようには見えない。でももちろん喜んでるようにも見えないのだ。



「ごめん、隠そうとしてたわけじゃないんだ」

切りだすタイミングを逃していただけ。決して東条さんをに嫌われるのを恐れてだましていたのではない……そう自分に言い聞かせる。

ふっと、東条さんは口元を緩めた。

「いいよ。会ったときからそんな気はしてたんだ。乃木坂は、萌えに慣れてないとゆーか、ちょっとみんなからズレてる感じだったかな」

「許してくれるの？」

萌えのリーダーである東条さんにとって、クタオは敵のはずなのに。

「許すもなにも、気にしてないぞ。クタオだとかオタクだとか、そんなことで人間の価値は決まらないってボクは思ってるから。でも、乃木坂が萌えがキライなら……ボクの下僕やってるのは、苦痛だよな。ごめん、無理矢理下僕にしたりして」

「そっ、そんなことないよ！ 僕はクタオだけど、萌えて幸せだと思っし、平和も願ってるし、何より東条さんの力になりたいんだ！」

東条さんは上目遣いで僕を見て、不安げな声で尋ねた。

「ほんとに？ ムリしてない？」

「うん。っていうか、僕、東条さんの下僕リストラされたら泣くよ」

「そうか……ならよかった！」

東条さんが笑顔になってくれてほっとする。彼女が悲しそうな顔をしているを見るのは心が痛い。

「乃木坂に報告することがあるんだ。雪菜がボクたちのなかまになって、世界平和計画を手伝ってくれるんだって」

「藤巻さんが？」

「うん。ノクターンがボクの力を利用しようと狙ってるから心配で放っておけないって」

「せつかく裏社会から出られたのに……」

「ボクもそうだったんだけどな。そしたら一つおねがいがあるっていうんだ。高校に通わせてほしいって。だからボク、今から虹高に行って校長せんせーにMPかけて、雪菜を裏口入学させようと思うんだけど、どー思う？」

どう思っつて……それはMPの悪用に他ならないけど……。藤巻さんの境遇を考えればそのくらいしたって許されるよね？

「やっちゃえやっちゃえ！」

「だよな！ きゃははっ」

赤信号みんなで渡れば怖くないの精神である。

「ところで、当の藤巻さんは今どうしてるの？」

「まだパパと話合ってるよ。問題が山積みらしいんだ。ディーヴアはみんな超能力者になったんじゃないかーとか、だれがスタジオピンクの場所をバラしたんだーとか、着物の女はけつきよく何者だったんだーとか。ディーヴアは今日から探し集めている確かめることになったよ。ノクターンのやつらはスタジオピンクの場所が書いてある紙をひろったんだって。でも社員の中にそんなメモしてるヤツはいない。情報ろーえいだ、スパイがいるのかもって、パパ血相変えて怒ってた」

そういうことが、と僕は心の中で頭を抱えた。カタリ様と高野さんが残していった謎と痕跡はあまりに多すぎる。僕はこういう疑問を上手くごまかして、カタリ様を守らなければならないのだ。

「でも、いちばん問題なのは、ボクのアンチがいるということだっ！ まったくけしからん！ ボクは、世界を平和にしようとかんばってるのに……」

東条さんのアンチ団体 イノセンス。

今までただ人々に萌えられるただけに尽力してきた東条さんには、このことはショックだったに違いない。しょんぼりと頂垂れてしまった。かわいそうに。何か声をかけてあげなきゃ。

「東条さー」

「いやいや、もっと明るいにゅーすを言おう！」

立ち直りが早すぎて何も言えなかった。ごめん。

「あしたは神聖アキバ帝国建国はっぴょー記者会見をひらくんだ。生放送で全世界同時配信だぞ」

「え、まだ発表してなかったの？ 建国ライブは来週の日曜日ですよ？」

「何力月も前からはっぴょーしてたら、ネットが大荒れしちゃうだろ。一週間まえくらいがちょうどいいんだ」

なるほど。東条さんほどの人気者となると一般論が通用しない。

「世界中が歓喜に包まれるだろーな！ テレビを通すとMPの効き目はうすれちゃうけど、それでも世界中の人間を萌やしてみせる！」

「僕、テレビから見守ってるよ」

「うんっ」

やっぱり活き活きとした東条さんが一番だ。この笑顔を守るのは僕の役目なんだろうと思うと、誇らしいような申し訳ないような、くすぐったい気持ちになる。

「あっ、ひとつ注意しとくけど、クラスメートかだれかにライブ行かないかって誘われても、うんっていうんじゃないぞ。お前にはとくとーせきが用意してあるからな」

「特等席！？ すごい、ありがとう」

「礼には及ばん。さてとっ、そろそろ学校に行って雪菜のにゅーがく手続き取ってくるか」

東条さんは座っていた椅子からぴょんと降りた。その何気ない動きさえ洗練された身のこなし。全ての動作に人を引きつける魅力のある人なんて、彼女以外にいるのだろうか。

「じゃあな乃木坂。あさつては月曜日なんだから、それまでにカゼ直しとけよ」

クールに手を振って画面から消える。通信は僕の方で切っておけということらしい。

……テレビ電話ってどうやって切るんだろう。  
リモコンの存在を思い出すまで、僕の前のテレビはずっと誰もいない東条さんの部屋を映し続けていた。スタジオピンクの時と同じ、白黒仕立てだった。

\*\*\*

岩口県のとある小さな町に、乃木坂純・乃木坂愛と名乗る夫婦がいた。

彼らの住む小さな家に、ゴースト化した高野透が降り立つ。彼女は純を探し出すと、一人でいるところを見計らって姿を現した。

「うわっ！」

「……そんなに驚かなくてもいいでしょう」

「あ、やつほー、透さん」

純はおちゃらけた様子で手を振った。童顔と矮躯が相まって、少年のような印象を与える容姿だ。いや、実際に、彼の肉体年齢は二十代前半を保っているのである。

透は仏頂面で懷から袋を取り出し、純に差し出した。

「いつもありがとうね」

「勘違いしないで。カタリ様のため。貴方のためじゃない」

それは透が定期的にスタジオピンクに行き、東条胡都の不老薬をごく微量ずつ拝借して、ある程度の量にまとめたものだった。

「カタリ様の寿命に見合う分だけ貴方には生きてもらわなければならない」

「分かってるよ。大事に飲ませていただきます」

純はポケットの中に袋を入れ、「それで」と本題を切り出した。

「ついに吟に言っちゃった？」

「言った」

「まさかあのことは……言っていないよね？」

「言っていないわ。貴方が色川拓也の息子であることも、カタリ様が吟くんの母親であることも」

純は安心しつつ寂しがるように眉を下げて、感慨深げに呟いた。

「ついに吟、いろいろ巻き込まれちゃうんだな」

「巻き込まれるのではない。吟くんは自ら世界を動かすの」

透の言葉を聞いて、純は膝を打った。

「吟が家にいた時は、メディア見せないようにして必死で家に縛りつけようとしてたけど、やっぱり自由にさせてやるのが一番なんだって、今になって納得したよ。俺だって危険を冒して愛と結婚したわけだからさ」

「そうね。確かに貴方の教育方針には問題があった。保健体育の教科書の一部を墨で塗りつぶしたり」

「見てたのか……」

「見てた」

にこりともしないで言われると、ひどく責められているような気がして、純は逃げ出したくなる。

「だってえ、やっぱり自分の子供にはいつまでも純粹であってほしいし」

「それは親のエゴイズムよ」

「ですよー」

とん。とん。とん。

向こうの廊下から、ゆったりとした足音が聞こえてきた。純が透に目くばせすると、彼女は条件反射のようにゴースト化する。質量も温度も消えた透に、気配などというものは存在しない。

「純ちゃん、誰か来てるの？」

滑らかな黒髪を揺らして歩いてくるのは、白いネグリジエを着た乃木坂愛である。彼女は盲目であるためか音声に敏感なのだが、純朴な性格なのでごまかすのは簡単だ。

「いいや、誰もいないさ」

しかし、この夜だけは違った。

「そう……。でもね、何だかとても会わなければならないような気がしたの」

姫と呼ばれた頃の名を捨て、平穏な主婦として生きる彼女は、何も見えない瞳で透を見つめていた。

\*\*\*

次の日の十時ごろ、藤巻さんがお見舞いに来てくれた。東条さんの時と違って、東条博士はあっさりと面会の許可を出してくれたそう。藤巻さんなら風邪を移されても問題ないと、適当に判断したのだろう。

「乃木坂さん、お邪魔しますね」

控え目な様子で部屋に入ってきた藤巻さんは、初めて見る普通の服装だった。パステルカラーを基調とした清楚なコーディネート。いや、彼女の話では黒服だって一般的なファッションらしいけど、田舎育ちの僕としては今の格好の方が落ち着く。

「お体の具合はいかがですか？」

「もう熱も微熱くらいになったよ」

一日ぶりに会った藤巻さんは、改めて思うけど儂い感じのする女の子である。吹けば掻き消えてしまうようにさえ見える。この体のどこに金属の鎖を引きちぎるような力があるというのだろう。ただ、華奢な体躯の中で、胸だけは量感を持っていた。彼女はスタイルが いいのだ。

「私、東条さんのおかげで虹間高校に編入できることになったんです」

「よかったね！ でも、こんなことを訊くのはあれなんだけど、その……べ……」

「勉強についていけるのかってことですか？」

言いづらいところをつないでくれた。

「学校に通ったことはないのですが、一応ノクターンの一員として大学卒業までの学習はしてきました。たぶん大丈夫です」

「そっか、余計なお世話だったね」

「いえ、高校とノクターンでは教えるものも違うでしょうから、変なところでつまずくかも知れませんが。その時は乃木坂さん、私に勉強を教えてください」

そんな頭のよさそうな顔で教えてって言われても、逆に自信をなくしちゃうよ……。

「ああ、明日が楽しみです。私、ずっと憧れてたんですよ、学校に通うこと」

幸せいつぱいの微笑みから、彼女の喜びが伝わってくる。それだけに、「ただの高校生」ではないということが惜しい。

「カラプロの計画になんか首突っ込まないで、高校生だけやっていればよかったのに」

僕がそう言うと、藤巻さんは肩をすくめて微笑みを苦笑いに変えた。

「私は家族にも憧れてましたから、カラプロダクションのみなさんにそれと近いものを感じてしまったんです。東条さんはとても可愛い人。色川社長は厳しいけれどお父様のように優しくて。世界のどこかにいるディーヴァたちは、私にとっては姉妹のようなもの。どうしてもそんな『家族』を放つてはおけなかったんです。せつかく乃木坂さんに助けていただいたのに、申し訳ないとは思っています……」

「うっん、藤巻さんがそれで幸せなら、僕は応援するよ！」

変に罪悪感を持ってほしくなかったのであえて明るく振る舞うと、藤巻さんも暗い雰囲気を払拭し、晴れやかに頷いてくれた。

「ありがとうございます！ 実は、私がカラプロに協力しようと思ったのには、もう一つ理由があるんですよ」

「ん？ 何？」

「乃木坂さんのお役に立ちたくて」

口にした本人はいつもの聖女スマイルで悠然としている。けど今、すごく思い切ったこと言ったよね？

「あ……ありがとう……」

僕は気恥ずかしくなって視線を下に向けた。

「乃木坂さんは、私に自由と未来をくれたんですよ。もっと胸を張ってください」

彼女はそう言ってくれるけど、やっぱりちょっと落ち着かない。もじもじしていると、藤巻さんが助け船を出してくれた。

「そろそろ東条さんの記者会見が始まりますね。テレビ、つけましようか」

さすがに長年あの角谷さんの支配下にあっただけあって、気配りが上手だ。藤巻さんがテレビのスイッチを入れると、ちょうどニュース番組をやっていて、『くるたんの緊急記者会見 このあとすぐ！』という字幕が右上に出ていた。

まもなく生放送が始まった。

「とゆーわけで、みんなっ、神聖アキバ帝国の国民になってボクをいっぱい崇めてねー！」

神聖アキバ帝国の概要を一通り説明し終わると、東条さんは建国ライブの宣伝を始めた。

「一週間後の二十日には、建国ライブを開催するよ！ 気になる会場は、国際都市縦浜の『縦浜オリハルコンホール』！ ちけっとはお早めにね！ さらに、二十二日にはカデニアに大しゅっちょー！ 外国のみんなも、首都サンデシアのミレニアムタワーでボクの声をたんのうして下さい！ ライブに来られないひともしもご安心を。ライブはぜーんぶ全世界同時中継だよっ！ みゅーん」

ざわざわと記者たちから感嘆が漏れる。僕も藤巻さんも感知できないが、きつと今MPを使ったのだろう。

「みんながくるのを待ってるよー！ うにー！」

ゴリっと思がして、画面に人の足が写った。どうやらカメラマン



が悶絶してカメラを取り落としたらしい。

相変わらず、東条さんはトップアイドルだ。

記者会見が終わった後は、神聖アキバ帝国についての特集が延々と放送されていた。僕たちには見る必要のないものでテレビを切る。藤巻さんは僕の体調を気遣って退出しようとした。

「あ、乃木坂さん。言い忘れてました」

ドアの前で立ち止まり、僕を振り返る。

「私の本当の名前、分かりましたよ。角谷白雪っていうそうです。でも、これからも藤巻雪菜と呼んでください。白雪だなんて、私には綺麗すぎて恥ずかしいです。……それに、この名前はお母様からいただいた唯一のもんですから」

「うん、分かった」

いつか藤巻さんとお母さんが和解できる日がくるといいな。

「それでは、お大事に」

彼女の後ろ姿を見て気づいた。おとといのような薄幸な感じが、もう吹き飛んでいるということに。

僕は夕方家に帰った。風邪はほぼ完治、銃創も生活に支障のないレベルにまで落ち着いていた。あの時の僕はちよつと撃たれただけでショックを受けていたが、このかすり具合からすると、藤巻さんはよほど手加減してくれたみたいだ。彼女に恐れをなしていた僕が、今や彼女の幸せを願っているなんて、不思議な感じがする。

冷蔵庫に入れてあった開封済みの牛乳は、腐臭こそしなかったものの生で飲むのはためらわれたので、ホワイトシチューにしてじっくり熱を通してから食べた。

それから何時間が精神安定剤代わりに勉強して、寝た。

次の朝学校に行くと、珍しく他のクラスメートたちがすでに登校

していた。

「おまいら神聖アキバ帝国の国民証もらう？」

「もらうに決まってるだろ常識的に考えて」

どうやら神聖アキバ帝国の件で話をするために、みんな早めに来ているらしい。

「よお、乃木坂」

「あつ、おはよう」

遅刻ギリギリのイメージがあつた池田くんも、今日は早く来ていたようだ。やたら真面目な顔で寄ってくるから何事かと思いきや、切り出された話は平和な内容だった。

「俺さ、ファンクラブ会員三桁内の特典で、建国ライブのチケット手に入りそうなんだ」

「へえ、よかったね！」

最初はそれだけかと思つたのだが、話には続きがあつた。

「でさ、思つたんだけど、このチケットで乃木坂にナマのくるたん見せてやりたいなって」

「え？」

「だからさ、チケットやるから、お前俺の代わりにライブ行つてこいよ！　こんな機会でもなきゃあ、いつまでもクタオのまんまだろ？」

いや、それは申し訳なさすぎる！　東条さんに特等席を用意してもらつていなかったとしても、僕にはそこまでしてもらつて平気でいられるほどの図太さはない。申し出を断る旨を伝えると、池田くんはとても残念そうな様子で腕を組んだ。

「真面目なヤツだな……。分かった。じゃあライブのDVDが出たら、学校のパソコンで見せてやつからな。ほんと、くるたんのない人生なんて、俺あかわいそうで見たらんねえよ」

何で僕の周りにはこんなにいい人ばかりなんだろ。じーんとしてきちゃった。

「ありがとう」

「なーに、くるたんのファンとして、布教運動は当然のことだぜ」

こんなことがあつてからクラスを見渡すと、数日前とは全く違う風景に見える。ひそひそ声なんか気にならないし、何だかとてもいいクラスのようなだ。高揚した気分ですらなくて、自然と耳に入ってくる栗本さんの楽しそうな声をバックに勉強していると、担任の先生が小走りで教室に入ってきた。

「転校生が来たけど先生もう授業に行かなきゃならんから、後は栗本仕切つといてくれ！　じゃあよろしく！」

「ええええちよつ先生！」

当然のごとく、クラス中から困惑の声が上がる。まあ、何も知らなかったら状況は飲み込めないだろう。新学期早々編入だなんて明らかにおかしいんだから。

栗本さんに促されて教室に入ってきたのは、制服を着た藤巻さん。生徒の多くが私服を好む中で、藤巻さんは完璧に制服を着こなしている。清楚な彼女は、太陽のように人の目を引く栗本さんと並ぶと、白い残月のようである。藤巻さんは色川社長厳選の美人であり、クラスでは悪目立ちしてしまうかも知れないと心配だったが、栗本さんがいれば上手く溶け込んでいけそうだ。

「今日からお世話になる藤巻雪菜です。よろしく願います」

藤巻さん、表社会デビューおめでとう！　僕は心から拍手を送った。

昼休みは、栗本さんが藤巻さんを自分のグループに誘ったため、みんなが彼女たちの周りに集まってわいわいはしゃいでいた。逆に僕の孤立具合はいつそう顕著になった。僕と藤巻さんは会ったことのない人間という設定なので、馴れ馴れしく話しかけることもできない。藤巻さんもそれを分かっているから、僕のことを見ないよう意識している。

一人でお弁当を食べること自体はそれほど苦ではない。僕に孤独を感じさせているものの正体は、周囲のにぎやかなおしゃべりだ。

一人だけ独りで浮いているのが孤独なのだ。やっぱり僕は臆病なク  
タオなのだと、嫌でも思い知らされるから。

「乃木坂くん」

「……ふえ？」

タコウィンナーを口に放り込んだ時、フレンドリーな栗本さんの  
笑顔が勢いよく視界に飛び込んできた。

「今日はキリエたちと一緒に食べない？ みんなで食べた方がおい  
しいよ！」

「……」

その優しさが責任感や建前から来るものだとしても、僕は嬉しか  
った。

「んー！」

ウィンナーを頬張ったまま何度も頷く僕を見て、栗本さんはくす  
りと笑った。

栗本さんという架け橋を渡って、僕はクラスメートの島に少しず  
つ足を踏み入れていく。そしてその島は、僕が思っていたよりもず  
っと暖かい空気に包まれていた。

だが……その人口密度のせいかな、栗本さんの隣りに座っていた佐  
々木くんが貧血を起こしてしまった。まさか、クタオと席を共にし  
たストレスのせいじゃないよね！？

栗本さんのグループで昼休みを過ごし、一つ分かったことがあ  
る。

栗本さんはクラスの人気者で、いつも人に囲まれているにもかか  
わらず、どことなく人と距離を取っているようにも見えるのだ。

その理由がまさかこんなにすぐ分かるなんて思っただけじゃなかつた  
けど。

「乃木坂くんは、クタオだよな？」

放課後、二人きりの教室で突然栗本さんはそう言った。帰ろうと  
したところを呼び止められて、最後の二人になるまで待っていたの

だが、まさかいきなりそんなことを言われるなんて……。

「怖がらないで。キリエは乃木坂くんを責めてるんじゃないんだよ。むしろその逆」

両手の指と指を突き合わせ、長い睫毛を伏せて彼女は告白する。

「あのね、キリエもほんとはクタオなの」

「えっ」

だって、どこからどう見ても完璧なオタク撫子なのに。

栗本さんはフリルのついたメイド服の裾を握りしめ、僕の目をまっすぐ見た。と言っても僕の方が背が低いから、若干見下ろされる形になる。

「メイド服は手っ取り早くオタクに見せかけるためのカムフラージュ。キリエの家はメイド喫茶やってるから、メイド服には困らないんだ。他にも、みんなと友達になるためにアニメ見たりラノベ読んだり……でも本質はクタオのままなの。萌えなんてウケ狙いの虚しい作りものに見えないんだもん」

人との距離感は、オタク撫子の演技をしていることから生まれていたのか。

「だからなの？ 僕に気を使ってくれていたのは」

「うーん、そんな感じかな。キリエ、ひとりぼっちの寂しさはよく知ってるから。乃木坂くんにはそんな思いさせたくなかったんだよ」

てつきりクラスを円満にするという義務を果たしているのだと思っていたけど、クタオのよしみだったんだ。クラス会長として以上に親切に接してくれていた理由も分かる。

「いつもありがとうね。栗本さんのおかげで、クラスに馴染めそうだよ」

彼女の心遣いに効果があったことを伝えて喜んでもらうつもりだったのだが、意外なことに栗本さんは不安げな顔を見せた。

「乃木坂くんが寂しくない程度にでいいんだよ？ あんまり馴染んだら、乃木坂くんまでオタクになっちゃう。乃木坂くんには今のま

までいてほしいな」

僕は、栗本さんが望んでいるのは僕がクタオらしさを抑えてクラスに参加することだと思っていたから、返ってきた言葉には意表を突かれた。

「乃木坂くんは、東条胡桃のライブ、行かないよね？」

僕は表向きには東条さんとは何の関係もないクタオなので、彼女の気持ちを考えなくとも答えは一つしかない。

「……うん」

「だよな！ 乃木坂くんはキリエの仲間だよな！」

本当に嬉しそうだ。クタオは少数派だから、少しでも仲間がいると安心できるんだよね。その気持ちは分かるけど……。

実際は萌えの女王の下僕であることを考えると、だましているようにでいたたまれない気持ちになった。

栗本さんと別れた後、こっそりと東条さんと合流し、スタジオオリズへと向かった。ライブの日までに、僕にもやらなければならな  
いことがあるらしい。車の中で大まかな説明を受ける。

「乃木坂にはライブが始まるまでボクのそばにいてほしいの。でも一般人がボクにひつついてたら、オリハルコンホールの関係者が不審に思うでしょ？ だから、乃木坂にはひとつ演技をしてもらうね。ボクが神聖アキバ帝国建国に際して雇うことにした秘書、それが乃木坂の役！」

「秘書の演技って？ スーツ着たりするの？」

「ううん、女装」

えええ と声に出したいところだが我慢した。確かに、正体を隠すには性別を変えるのが有効だ。それに文句を言うのはわがままだよな。そう自分を納得させる。

「もちろんそれだけじゃなくて、ボクのスケジュールはぜーんぶ把握してもらうよ。つまり、乃木坂<sup>オトコ</sup>は下僕で乃木坂<sup>オンナ</sup>は秘書なの！  
ね、いいアイデアでしょ？」

「う、うん」

東条さんは僕をからかっているわけではなく、本当に名案だと思っ  
て言っているようなので、下手に突っ込むこともできない。この  
作戦は僕のためのものなのだから、むしろ感謝しなくてはいけない  
のだろう。

スタジオロースに着くと、待ち構えていたミツルさんがすごい勢  
いで僕を引っ張っていった。戸惑いがちに見上げると、目がらら  
んと輝いている。

「最初見た時からずっと可愛い服着せてあげたいと思ってたのよー。  
こんなに早く願いが叶うなんて、あたしたらツイてるわぁ」

「えっ、もう女装するんですか」

「胡桃ちゃんは女装したあなたを見てからいろいろ設定考えるって  
言ってたわよ」

「でも心の準備が」

「ふふっ、あたしに任せておけば大丈夫よ」

更衣室に放り込まれ、僕は　。

目の前にいる少女は、頼りなげな様子で僕を見つめ返していた。  
ベビーピンクのエプロンドレスに身を包み、黒いタイツの足元  
には可愛らしい赤い靴。髪型は緩やかなウェーブのかかったロングで、  
うさ耳のついたカチューシャをつけている。

鏡の中の僕は、すがすがしいほど女の子だった。

前々から僕の体は発展途上で女々しいと気にしていたけど、まさ  
かこれほどだったなんて……。体のことは時が解決してくれると信  
じていた僕だが、だんだん自信がなくなってきた。

「可愛いわぁ、もう芸術の域に達してるわよ」

「これなら絶対みんな女の子だって思うよ!」

ミツルさんと東条さんに絶賛されて、嬉しくなくもない。とても  
複雑な気分。

「よーし、乃木坂　の設定できたー!　これ覚えてね」

手渡されたメモ用紙を見ると、そこにはこと細かに「わたし」の設定が記されていた。

名前：銀杏

年齢：女の子に歳を聞いちゃだめですよ。

誕生日：二月十七日

サイズ：身長156センチ　B74・W60・H78　43

？

特技：おもいだす

「え、これ僕のこと調べて書いた？」

「うつん、てきとー」

それにしても妙に真実度が高いんだけど……。誕生日がぴったり合っているのは奇跡としか言いようがない。

「僕、ぎんなんって名乗ればいいの？」

「ぎんなんじゃないよ、いちようだよ！　乃木坂の下のなまえはギンでしょ。だから色の銀をなまえに使ってみたの！　ふふーん、われながらいいセンスっ」

なるほど。東条さんからもらった名前、大切にしよう。

「それならこれもつけましょう！」

ミツルさんが僕の首につけたのは、いちようの葉の形のペンダントトップをあしらったチョーカー。秘書がこんなにおしゃれいいのかと疑問に思ったが、トップアイドルの秘書ならこのくらいでないといむしろ不自然だと説明された。

その後、東条さんの提案で、この格好のまま色川社長にも顔を見せることになった。色川社長は僕が女装して東条さんのライブに付き添うことは知っているらしいので、今さら恥ずかしがることもない。

「失礼します」

社長室のドアを開けると、色川社長と目が合った。そのとたん、彼はやたら真剣な形相でデスクから身を乗り出した。

「き、君はっ……！」



「？」

「あ……ああ、乃木坂くんか」

何故かがっかりされてしまった。

「すみません、お邪魔でしたか？」

慌てて謝る僕に、色川社長は突然こう言った。

「なあ乃木坂くん。美少女は最高だと思わないかい？」

「はい？」

面食らう僕に構わず、色川社長は持論を展開し出した。

「人間の価値が容姿で決まるとは思わないが、やはり萌えの頂点には美少女だろう。人は本能的に美しいものを好み、守ろうとする。それは遺伝子レベルで美が求められているからではないかね」

色川社長は改めて僕を見て、一つ深いため息をつく。

「君のその姿が少しかぐやに似ていたものだから、ディーヴァを作っていた時のことを思い出してしまつてね。いやあ、全くもって惜しい。君が女の子ならスカウトしたいところだよ」

「え……あ、すみません、男で」

「なに、気にしないでくれ」

額を抑えてうつむく社長。何と、彼はそのまま嗚咽を漏らし始めた。もう何が何だか。

まさか僕が女の子でないことを悲しんで泣いているわけではないだろう。きつとストレスがたまっているんだなと思つて、僕は社長の背後に回つて肩に手を置いた。

「お疲れでしょう。肩、叩いて差し上げますね」

それが例え僕の上四倍以上生きている剛腕実業家であっても、泣いている人を放つて立ち去ることはできない。昔親にしてあげたように、色川社長の凝り固まつた肩を叩いていると、彼はいくらか落ち着いたようだった。

「実はね、ディーヴァがなかなか見つからないのだよ。私がDQNドキュンネームをつけたせいで、皆改名してしまつたらしい」

「どきゅんねーむ？ 何ですか、それ？」

「おや、もう死語なのかな。私も年を取ったものだ。簡単に言つと変な名前のことだよ。朱雅<sup>しゅが</sup>亜とか、紫那<sup>しなもん</sup>紋とか」

うつ、それは確かに改名したくなる……。

「私にとっては、すべてのディーヴァが娘のようなものだ。三歳までしか接していなくとも、一人一人ちゃんと覚えている。他の子も雪菜のように虐げられていたらと思うと、ろくに眠ることもできなくてね。ああ、こんなことなら手放すのではなかった。本当だったら今頃私には、孫がいたっておかしくないのだが……みんな私から離れていく」

考えてみれば、色川社長は家族運のない人だ。真心込めて育て上げたかぐやさんと実の息子さんには駆け落ちされて、ディーヴァたちは消息不明。きつと東条さんも忙しくてあまり遊べないんだろうな。萌え業界の大物だから、敬遠されてしまつて友達も少なそうだし……。

孤独な老人の影が、暖かな夕陽に照らし出される。

「私のしてきたことは、間違っていたのだろうか」

僕は手を止めて少し考えた。何が正しくて何が間違っているかなんて、軽々しく口にできるものではない。でも、これだけは言える。

「僕には世界平和以上の夢は思いつきませんね」

「……そうか」

僕は肩たたきを再開した。こんなことをしたって彼の大切な人々の代わりにはなれないけれど、少しでも社長の心の隙間を埋めることができたら思つて。

四月二十日。ついに建国記念ライブの日がやってきた。

前日から現地入りしていた僕たちは、縦浜オリハルコンホールで最後の調整を始める。

オリハルコンホールでは以前に何度もライブをしたことがあるの

で、館員さんたちは東条さんやミツルさんとは顔見知りだ。逆に二ユーフェイスの秘書（僕）は物珍しいらしく、手が空いていると頻繁に話しかけられた。

「ワンマンなくなるたんに秘書さんがつく日が来るとは思わなかったな。名前何て言うの？」

「いちようです」

「いちようちゃんかあ。よろしくね」

またある時は、若い男性に呼び止められた。

「君、かなり若いよね？　いくつ？」

十五だなんて本当の年齢を言うわけにはいかない。一応秘書として働く社会人という設定なのだ。

「女の子に歳を聞いちゃだめですよ」

「あつはっは、こりや失礼。じゃあ代わりにスリーサイズ教えてよ」

「バスト74、ウエスト60、ヒップ……あ」

しまった、つい設定メモ通りに答えてしまった。相手はと言うと、冗談のつもりだったのに返事をされてしまって困惑している。当然だ、年は答えなくてスリーサイズは答えるなんて不自然すぎる。

「……っ、何言わせるんですかもう！」

演技にぼろが出ないうちに頭を冷やそうと、僕は空気を吸いに廊下に出た。そこで、テレビ局の人らしき集団に出くわした。

「あのー、くるたんの関係者の方ですか？」

「秘書です」

「舞台裏を取材させていただきたいのですが」

あらかじめ東条さんから言われていた通り、僕は丁重にお断りした。

「ああーっ、潜入失敗です！」

レポーターの残念そうな声が聞こえるけど気にしない気にしない。

開演十五分前になり、僕は東条さんから客席に行くように指示を

受けた。

「二階の最前列のまんなかが乃木坂の席だよ。あとはシゴトのことなんか忘れて、ボクの歌を楽しんできて！」

今日の東条さんのドレスはいつもと違って短く、裾からふわふわのかぼちゃパンツが覗いている。もちろんミツルさんによるコーディネートである。彼女は月と星を合体させたような髪飾りの位置を整え、不敵な笑みと共に真っ暗な舞台を見据えた。

「さあ、しょーたいむの始まりだ」

客席に向かう途中で、僕は会ってはならない人に遭遇してしまった。

「うわー、トイレどこだよ、始まっちゃうよ、トイレどこだよ」

池田くんがトイレを求めて廊下をうろろろしていた。正しい選択をするなら、ここは顔を隠して素通りするところなのだろうが、トイレを探す人を見捨てるなんて人でなしのやることだ。何より池田くんには恩がある。

「お手洗いはその角を左に曲がった階段の上ですよ」  
できるだけ女の子っぽい声で、脇から教えてあげた。

「うおっ!？」

池田くんはびくつと振り返ったが、僕の顔はよく見ずに「あざーっす!」と叫んで左に曲がっていった。彼にとつて緊迫した状況でよかった。女装しているとはいえ、さすがに顔をじっくり見られたらアウトだ。

僕の席の隣には、藤巻さんが座っていた。彼女は舞台セッティングには立ち合わず、直接こちらに来ていたのだ。

「おつかれさまです、いちようさん」

すっかり本名で呼んだりしない辺りに、彼女の優秀さを感じる。僕だったらきつと一度は間違つて、どもりながら言い直すと思う。

僕も藤巻さんも、東条さんの歌を生で聴くのは初めてだ。心地よ

いクッションに腰を降ろし、期待に胸を膨らませていると、やがて客電が落とされ、夢の舞台が幕を開けた。

てれってれってれー

てれってれってれー

前置きなしに曲が始まる。ホリゾント幕にだけ青が灯っていて、依然舞台は暗いままだ。だがこれは演出。前奏が激しくなるところで、一斉にライトがつく。

どんっ！

伴奏の音と照明効果が相まって、僕たち観客の心を一気に躍動の舞台へと引き込む。

華やかな光に照らし出された東条さんは、可愛らしく振り付けをこなしながら、天使のロリ声で電波な一曲目を歌った。

おぼえたての九九を　パパにおしえてあげました  
パパはおとなのくせに　とってもよろこびました

おとなはなんでも知ってるんでしょ  
どうしてそんなによろこぶのかな  
答えはきまっているよ  
ボクがかわいいスターだから！

コースター　ブースター　ボクすたー  
マイスター　モンスター　ボクすたー  
世界でいちばん　ボクすたー

事前に東条さんに教えてもらった話では、この歌は彼女のデビュー作で、当時八歳の東条さんがメロディーと歌詞を手掛けたものだ。その時、東条さんは自分のスター性をどの程度理解していたのだろ

うか。ただの小学二年生が書いていてもおかしくない詩の内容であるところに、逆に巧妙さを感じる。八歳と言う年齢だからこそ、自分をスターと称しても非難の対象にはならず、可愛らしさを強調できたのだ。

「不朽の名曲、『ボクすたー』でしたーっ！ きょうはみんな、来てくれてありがとー！ それからテレビの前みんなも、見てくれてありがとー！ こんなにたくさんの方がボクのこと応援してくれてるんだね。ボクはりきっちゃうよ！ みーん」

「萌えー」

観客一同、早くも東条さんのMPに当てられている。MPが効かない僕も、歌を聴いてますます東条さんに惹かれた。彼女はMPなんかなくたって最高のアイドルに違いない。

数曲元気な歌を歌って客のテンションを上げたところで、東条さんはぽんと異色な歌を投入した。

「続いてっ、涙腺崩壊アニメ『ラビットデイズ』のエンディングテーマ、『ひとりぼっちの僕らは』を歌いまーす！ しんみりした曲だから、みんなも静かに聴いてね」

「おお……」

この歌は人気が高いようで、客の反応が一味違った。

前奏が始まり、辺りが清らかな空気に包まれる。萌えに徹した今までの曲目とは違い、この曲はシリアスで繊細な哀しみをはらんでいる。東条さんの口り声でこの曲風に合うのか？ 数秒後に僕は、一度でも彼女の歌唱力を疑ったことを恥じることになる。

僕の羽根は氷でできていた

凍てつく空を飛んでいたら

いつの間にか大きくなりすぎて

歩けなくなっていた

ひとりぼっちの僕らは出会い

氷の羽根を溶かして  
飛ばなくても 歩けばいいと  
手を取って歩み始めた

いつか僕らは別れ告げるけれど  
今はそばにいて  
愛しい日々が過去になっても  
ぬくもり思い出せるように

これが六歳児の声帯から出る声とはにわかには信じられない。電  
波ソングを歌う時のような蛍光色の声色ではなく、水彩絵の具を水  
に溶かしたような柔らかい歌声だ。声質そのものは幼いままなのに、  
神聖な威厳さえ感じられる。歌い方一つでこころも変わるなんて。  
僕は天才を目の当たりにしていた。

やがて僕らは別れ告げるけれど  
今はそばにいて  
優しい日々が過去になっても  
歩き続けていけるように

いつか世界は終わりに告げるけれど  
今は泣かないで  
孤独な日々が僕らをつなげて  
新たな世界を紡ぎだす

最後のサビのリフレインには涙が止まらなくなった。胸を締めつ  
ける切なさの正体が「救い」であるような気がして。東条さんの歌  
声が、僕の魂に宿る一切の哀しみを抱擁し、泣かないでと鎮めてく  
れるような、そんな安らぎを覚えた。

歌が終わった時に聞こえたのは、拍手ではなく、涙交じりの「あ

りがとう」だった。

ああ、感動するってこういうことを言うんだ。

その後はほとんど明るい曲で、たまにバラード調の歌も交えながらライブは進んでいった。そしてついに、最後の曲の番が来た。

「いよいよ、さいごの曲になってしまいました。今から歌うのは、神聖アキバ帝国の国歌『パックス・アキバーナ』です！ ではではっ、ミュージックスタート！」

争い絶えぬ大地に

萌えいずる愛の新芽

泣いてる子も 泣かせた子も

いたいのにいたい飛んでけ

みんなで平和になろうよ

願えば 望めば きっと叶うから

パックス・アキバーナ

全てが萌えに包まれたなら

パックス・アキバーナ

みんな笑顔でいられるよね

萌えは世界を救う

聴衆の歓声がこだまする。

「アンコール！ アンコール！」

彼女はまさにスター。世界を彩る星だった。





## 第四章 ほし（後書き）

読んでくださってありがとうございました！

執筆者のサイト『Re:I』

<http://rei-yumesaki.jimdo.com/>

## 第五章 ひいろつ

ライブは大成功のうちに幕を閉じた。

僕は一刻も早く東条さんに会ってこの感動を伝えたいと、小走りで楽屋に向かう。ホール内は観客でこった返していたが、関係者用通路を通ればスムーズに行けた。

楽屋の前にはミッルさんと色川社長が立っていて、困った様子で楽屋の扉を見つめていた。ミッルさんなんか頬に手を当ててため息をついている。

「何かトラブルでも？」

心配になって尋ねると、社長がそわそわしながら答えてくれた。

「胡桃が楽屋に籠ってしまっただね。帰ってくるなり、一人にしてくれと……」

どうしたんだろ。何か気に病むようなことがライブ中にあったのだろうか。僕が見ていた限りでは、これ以上ないというほどの大成功だったと思うのだが。

立ち尽くして閉ざされたドアを見つめていると、ほんの二センチばかりドアが開き、その隙間から東条さんの声が聞こえてきた。

「乃木坂？ そこにいるの？」

いつも強気な東条さんのものとは思えない頼りなげな声だ。

「いるよ。大丈夫？」

「……乃木坂だけ来て」

横目で社長を見ると、彼はやや迷ってから頷いた。僕はドアを少しだけ開けて、静かに入室した。

東条さんは部屋の片隅に置いてある椅子に、ライブの衣装のまま腰かけていた。脚の長さが足りず、力の抜けた小さな足が宙に浮いている。僕が楽屋に入ってきてても頂垂れたままで、顔すら上げてくれない。本当に、どうしてしまったのだろう。

「東条さ」

声をかけようとしてやつと気づく。彼女は小さな肩を震わせながら、声を抑えて泣きじゃくっていた。

「うつ、うえ……ひつく……えう……」

「うわわ、何があったの!？」

東条さんはごしごしと目を手で擦って、やつと僕を見た。しかしすぐに目に涙が溜まり、ぽろりとこぼれ出す。

「……なあ、乃木坂。お前はボクのことを可愛いと思うか？」

突然何を言い出すのだろう。そんなのは自明の理だ。

「可愛いに決まってるでしょ」

「どこが？ 具体的に答えろ」

「えっ、うーんと……」

どうして主人の長所くらいぱつと言つてあげられないんだろう。

東条さんのいいところはたくさんあるはずなのに、いざ訊かれると答えられない。東条さんの魅力は、どこがいいとかそんな局所的なものではないのだ。決して彼女に魅力がないから答えられないのではない。でも答えないわけにも……。

「ははっ、ムリいつてごめん」

東条さんは気まずい雰囲気吹き飛ばそうとしたようだが、僕にはその笑みが痛々しかった。不甲斐ない自分が恨めしい。

彼女はふと悲しげな顔に戻って、僕をつぶらな瞳で見上げた。

「アイドルだって、たまには甘えてもいいかな？ 下僕にくらい悩みをうちあけても、許されるかな？」

「何でも話してよ！ 僕はそのためにいるんだよ」

クタオで孤独だった僕は、東条さんが必要だと言ってくれたおかげで救われた。彼女の支えになりたいという気持ちは、出会ったあの日から変わっていない。

「……ありがとう」

東条さんは切なげに目を伏せると、自らの苦しみを吐露した。

「ボクは世界一のスターで、たくさんの人から愛されて、だれもがうらやむ人気者。拍手も歓声も、ぜんぶボクのもの。デビューして

から数年、しょーがつこの高学年くらいまではそう思ってた。でもちがった。ボクはある日、MPのない自分がどれだけ価値のないものか気づいたんだ。

認めるしかないから認めるが、ちいさいころからMPに頼ってたせいで、ボクは対人コミュニケーションがうまくない。くーきが読めなくなつてMPがあれば可愛がってもらえる、そんな人生だったからな。MPがなかったら、ボクはつまらないガキでしかないんだ。それを自覚したとき、ボクはとてつもない虚脱感におそわれた」

自信に溢れた言動も、少し強引なところも、自分に自信のない僕からすれば頼もしいし、可愛らしくもある。しかし本来、出る杭は打たれるものだ。たとえ東条さんにどれほどの実力があつたとしても、世間はその立ち振る舞いを批判する。「空気を読め、出しゃばるな」と。今はその勢力がMPで骨抜きにされているから、叩かれずに済んでいるだけなのかも知れない。

愛されて当然、萌えられて当然という態度を、MPなしで続けていくことは可能だろうか。今の僕には、客観的な判断など下せなかった。だから何も言えなかった。

「そんなボクがみんなから萌えてもらえるのは、ひとえにMPのおかげだ。MPがあるからボクは存在を許される。必要とされているのはボクじゃない。MPがないボクなんて、パパもママ姉もファンたちも、いないんだ」

「でも僕は」

「わかってる。乃木坂がボクのこと大切に思ってくれてるのは、わかってるよ。でもそれは、乃木坂が特別だから。乃木坂にはきつとひとを大切に思える才能があるんだと思う。雪菜もおんなじだ。あいつはすぐにボクとなかよしになってくれたけど、それも雪菜がやさしいからだ。すごいのはお前たちだよ。ボクはなかまに恵まれているんだな」

自嘲的な笑みを浮かべる東条さんを見ると、僕まで悲しくなつて

しまう。でも、反論したって彼女の神経を逆なでするだけだ。MP  
がなくても東条さんは一流のアイドルだと僕は思うけど、それを証  
明するすべはない。

「ちゅーがくせいのおかげに、成長促進剤をつくって飲もうとしたこ  
とがあつたんだ。でも、それがママ姉に見つかって……ママ姉、怒  
って薬をぜんぶ捨てたんだ。あなたは幼女だから価値があるのよ、  
可愛くなければ意味がないのよ、って……」

「何、それ……ひどい」

東条さんが東条博士のことを慕っていると知っていても、非難の  
声を禁じえなかった。東条さんの劣等感、この発言でさらに膨れ  
上がったに違いない。東条さんの成長する権利を奪い、その上彼女  
の心を傷つけてまで、博士は幼女だったころの自分の姿に酔いしれ  
たいと言つのか。東条さんは僕には人を大切に思える才能があるっ  
て言ってくれたけど、東条博士のことは本当に許せない。

「いや、ママ姉のいうことは正しいよ。ライブやってたら、ボク、  
かなしくなっちゃった。みんなはボクに萌えてるんじゃない、MP  
に萌えてるだけなんだってな。ボクは『幼女』『ボクっ娘』という  
萌え記号でつくられたMP発生装置みたいなものなんだ。ちよつと  
前には、一生世界平和のために自分を押し殺さなきゃいけないのか  
と思つて、かぐやみたいに逃げてしまいたくなつたこともある。で  
もボクはそうしなかった」

彼女は自分に言い聞かせるように言い放った。

「自分に救える世界がそこにあるのを、放つてはおけないから」

かっこいいい！

僕は言葉を失った。何てかっこいいことを言ってくれるんだろう  
僕のご主人様は！

「……ん、ちよつとはずかしいこと言っちゃったかな」

「すごいよ！」

「え？」

「そんな風に思えるって、すごいことだよ！　だって、世界のため

に自分は我慢って、普通の人にはできない決心だよ。そういう人のことを何て言うかくらい、クタオの僕でも知ってる。ヒーロー、英雄だよ！ 東条さんはアイドルを超えて英雄なんだ」

東条さんは少し照れて目をしばたいた。

「そう、か？ ボクとしてはとーぜんの選択なんだけどな。白人諸国が高いせーかつ水準に達した今でも、黒人による白人差別はつづいてるし、白人も黒人に植民地にされてた時のことをまだうらんでる。それを象徴するみたいに、カデニアとファンゼル連邦の冷戦はどんどんひどくなってる。でも、ボクががんばって戦争を食いとめることができるというなら、人生をかけるだけの価値がある。くるたんを演じつつづけるのは苦痛だが、世界を救うこと自体はボクの願いでもあるんだ。だから、今日はちょっと弱気になっちゃったけど、ボクは逃げたりしない」

M P使いのアイドルである限り、東条さんは一生自分の虚像に全てを持っていかれてしまう。それを覚悟した上でのこの言葉は、まます東条さんを好きにさせた。

「かぐやは自分と恋人の幸せをゆーせんしてカラプロを去った。ボクはそれを悪いとは思わない。むしろ、かつこいいとすら思う。逃げたりしない、なんてえらそうにいつてるが、よーするにボクには世界を見捨てる勇気がないだけだ」

「それは違うよ」

僕は自信を持って断言した。

「東条さんは、優しいんだよ」

カタリ様 いや、かぐやさんと呼ぶべきか と色川社長の息子さんとの大恋愛を軸に、ディーヴァたちの運命は回っていると言っても過言ではない。かぐやさんが世界征服をディーヴァたちに丸投げしたから、今の東条さんの苦悩があるのだ。かぐやさんが悪い人だとは思わないし、高野さんがあれだけ敬慕しているのだからむしろいい人なんだろうけど、それでもかぐやさんの恣意に僕たちが振りまわれている感じがするのは否めない。

世界平和を捨てて恋人との幸せをとったかぐやさんは、きっと個人に対する愛情が深い人なのだろう。反対に、自分よりも世界を優先する東条さんは、博愛精神の持ち主だ。かぐやさんと東条さん、どちらが正しいかと聞かれたら答えにくいけれど、個人的には東条さんの方が「偉い」と思う。僕はそんな東条さんが好きだ。高野さんがカタリ様を慕っているように、僕も東条さんを慕っている。

いつの間にか涙が乾いていた東条さんは、自分でもそれに気づいて一瞬驚いたように目の辺りに手を当て、それからにつこりと僕に笑いかけた。

「なんだか、乃木坂に話したらココロが軽くなつたみたいだ。ありがとな」

救いも答えも、最初から東条さんの中にあつたのだ。僕はただ、それを引き出す手伝いをしただけ。

「ボクのがんばりは乃木坂が見てくれる。それに雪菜も。ミツルだって、MPには萌えちゃうけど、本当のボクを優先してくれる」

「うん」

「なーんだ、ボク、ぜんぜんひとりじゃなかったんだ！」

立ち直ってくれてよかった。東条さんは少し躁鬱質なところがあるけど、元気な方が彼女らしい。

「パパー、ミツルー、心配かけてごめんねー！」

ててとドアに飛びついて楽屋の外に踊り出す。あるいは、元気に振る舞っているだけで、内心ではまだ孤独感を感じているのかも知れない。それでも彼女にはいつまでも落ち込んでいる時間はないのだ。あさつてにはカデニアでライブがある。心が落ち着いてきたことで、楽屋に籠っている場合ではないと思い出したのだろう。

その日の夜、東条さんは日本を発った。

翌日の月曜日、僕はいつも通り登校した。

僕と藤巻さんは、カデニアのライブと同時期に学校を休んだらさ



すがに関連性がばれるということで、日本での待機を命じられたのだ。

今日も多くの生徒が早朝登校して、東条さんのライブの感想を言い合っていた。栗本さんも女の子たちの中心で会話をしているということは、クタオであつてもライブの中継は見たのだろう。この日本では、東条さんの話題抜きにはコミュニケーションが成り立たない。いや、テレビが買えないくらいの貧困地区に住んでいる人でもなければ、世界中の誰もがライブの話をしているはずだ。

藤巻さんは編入してきたばかりだが、彼女の人柄と、彼女をクラスに溶け込ませようという栗本さんの心配りが相まって、すでに栗本さんや他の女子と友達になっていた。藤巻さんは、あくまで一般人としてライブに行った時の感動を語っている。

「よっ！」

「ひゃっ」

突然後ろから小突かれてびっくりした。僕にこんな風に話しかけてくれるのは一人しかいない。池田くんは満面の笑みで僕に報告した。

「俺、くるたんのライブ行ってきたよ」

「うんうん、どうだった？」

「最高だった！ やっぱりくるたんはネ申<sup>かみ</sup>だあ！ 笑い泣き感動泣き萌え泣き、俺泣いてない時間なかったからな！」

それからしばらく池田くんは東条さんを褒め称えていた。好きな人が褒められているのを聞くのは、自分が褒められるのよりも気分がいい。

「あ、あと、トイレの場所分からなくて困ってたら、女の子が教えてくれたんだけどさ」

それ僕だけど、全然気づいていないみたいで安堵する。

「何とそれ、くるたんの秘書だったんだよ！ 俺すごい人に会っちゃったよマジで！」

ちよっと待てー！

「何でその人が秘書だつて分かったの!？」

「録画しといたテレビのくるたん特集で、出てたんだよその人が！ライブの舞台裏を取材しに行った時にその女の子が出てきてさ。まあ取材は断られてたけど。いやー、まさかくるたんの秘書に会えるなんて俺はラッキーだな！」

「そ、そうだね……」

どうしようどうしよう、テレビに映っちゃった！

でも、凄腕スタイリストのミツルさんが変装を手掛けたんだから、そうそう簡単に男だとは見破られないはずだ。大丈夫、と信じたい。

僕と東条さんの関係に気づく人が出るのではないかと思うと、授業中もそわそわと落ち着かなかった。誰かが僕を見ているような気がしたのだ。

そして、その嫌な予感は当たってしまった。

またもや僕は、放課後栗本さんに呼び止められた。何となく、この時点で「ああ、ばれたな」と悟った。彼女は僕にクタオ仲間であることを望んでいるので、監視の目を光らせているのかも知れない。

「乃木坂くん、テレビに出てたよね」

「何のこと？」

手遅れだと分かっているけど、一応しらばっくれておく。

「はぐらかそうとしたって無駄。キリエには分かるよ。変装したって、乃木坂くんのことなら見破る自信あるもん。まさか東条胡桃の秘書をやってたなんて……」

怒ってはいないようだ。どちらかと言うと、悲しげな顔をしている。暗い声で呟く。

「残念だよ。乃木坂くんは嘘をつくような人じゃないと思ってたのに」

「い、ごめん……。あのっ、このことは秘密にして！ お願い！」

手を合わせて懇願すると、栗本さんはその手を押さえて優しく言った。

「最初からそのつもりだよ。バラしたら乃木坂くん、妬まれて殺されちゃうかも知れない。キリエはそんなの嫌だから」

てつきり厳しく咎められるのではないか思っていたけど、案外許してもらえるのかな。なんてほっとしたのも束の間、栗本さんは引き続き優しい声で、恐ろしい言葉を口にした。

「やっぱり東条胡桃のせいだよ。あの子が乃木坂くんに悪い影響を与えてる。乃木坂くんは悪くない。そうだよ」

どう返すべきなのだろう。いいえと答えて栗本さんの機嫌を損つたら、「乃木坂くんなんかもうクタオ仲間じゃない！」とか言われて、秘密をばらされてしまうのだろうか。でも下僕自ら主人の悪口を肯定するわけにもいかないし……。

迷っていると、栗本さんは東条さんの批判を付け加えた。

「東条胡桃は世界中のみんなに愛されなきゃ気が済まない気違いだよ。ネット国家なんか作っちゃってさ、女王様気取りにもほどがあるよね。だから乃木坂くん、もうあの子には近づかないで」

「う……」

嘘でもうんと言えればいいのに、僕は首肯さえできなかった。怯えた僕のそぶりを見て、栗本さんはふっとコケティッシュな笑みをこぼす。

「ごめんね。でも、キリエは乃木坂くんのことを心配して言ってるんだよ？ あいつといたら洗脳されちゃう。クラスみんなはもうダメ。乃木坂くんだけは守りたいの！」

「……」

返事をしない僕に痺れを切らしたのか、栗本さんは自分の鞆の方に歩いていった。よかった、帰ってくれるんだ。と思いきや、彼女は鞆から一枚のチラシを取り出して戻ってきた。手渡されたままに受け取る。チラシの最上部には、「イノセンス」の文字があった。これって。

「ネットでクタオ専用スレッドにいたら、アンチ東条のグループがあるって書き込みがあつてね。メールしたら集合場所教えてくれて行ったらこのチラシもらったの。ねえ、乃木坂くんも一緒にイノセンス入らない？ 東条胡桃から解放されるいいチャンスだよ！」

「やだよ」

ほぼ無意識のうちに言い切っていた。強い調子ではなく、臆しなから出した声ではあつたが、栗本さんに意思表示するには十分だった。彼女は予想以上に決然とした僕の態度に動揺しながら、明らかに気落ちした様子で作り笑いをする。

「そつか……。だよ、乃木坂くんは優しいから、アンチ団体なんて合わないよね。今日はいろいろ強く言っちゃって、ごめん。キリ工、帰るね」

栗本さんは今度こそ本当に荷物を持って帰ろうとした。でも、このまま帰らせてはいけないと思った。

「栗本さん！」

「なに？」

「イノセンスには入らないで！」

東条さんはもちろんだけど、栗本さんだって僕にとっては大切な人だ。彼女はF組の最高のクラス会長で、思いやりのあるいい人なんだ。その二人が敵同士になるなんて僕は嫌だった。駄目元でも頼んでみなければ、後悔することになる。

僕の決死の必死な気持ちとは裏腹に、栗本さんはあっさりと頷いた。

「乃木坂くんがそう言うのなら」

よ、よかったあ。

安堵して、僕も帰ることにした。

昇降口を出て歩いていくと、校門のそばに藤巻さんが立っているのが見えた。視力がいいのは、僕の希少な取り柄の一つだ。藤巻さんも、かなり遠くからだが僕の気配を感じたようで、振り返って小

さく手を振ってくれた。

「どうしたの？ 誰か待ってたの？」

近づいてから訊いてみると、「乃木坂さんを」と意外な答えが返ってきた。

「私が編入してきた初日も、一週間目の今日も、栗本さんはあなたを放課後に残してコンタクトを取っています。それに、彼女は授業中、ずっと乃木坂さんを見ていました。その……プライベートな人間関係に口を挟むつもりはありませんが、何か問題が起きているのではないのかと思って」

「プライベート」の辺りで語調が乱れた。彼女の中では、必要な相談か余計なお世話かという葛藤があったらしい。結果として、僕は話しかけてもらって助かった。栗本さんの話の内容をかいつまんで説明する。

「それから、こんなチラシをもらったんだけど……。ちょっと読んでみよう？ 僕もまだ怖くて見てないんだ」

僕は栗本さんからもらったイノセンスのチラシを藤巻さんと一緒に覗き込んだ。リーダーである朝比奈さんからのメッセージを除いて、あまり情報は記載されていない。おそらくイノセンスにとつてはほとんどの日本人が敵（東条さんのファン）であるため、電話番号や拠点の住所は仲間内にしか知らされていないのだろう。そもそも朝比奈さん自身が裏社会の人で、身柄を明かすわけにはいかないのだ。名前すら書いていない。

『こんにちは。アンチ東条団体イノセンスの代表です。』

始めに言うておきますが、ぼくは萌え自体を批判しているのではありません。ぼくはあくまで、アイドル東条胡桃をはじめとするカラープロダクションについて、異議を申し立てたいと思うのです。

東条胡桃の声を聞いていると、否応なく萌えてしまうことはありませんか？ これは決して気のせいではなく、カラープロダクションが科学技術を使って我々に催眠術のようなものをかけているので

はないかと、ぼくは推測します。彼らは「東条胡桃は素晴らしい」という画一化された価値観を世に定着させ、また東条胡桃に平和を訴えさせることで、強制的に争いをなくした疑似平和をもたらそうとしているのです。

しかし、東条胡桃の言うことだから争いはやめよう、そんな考えで作られた平和は、果たして真の平和と言えるでしょうか。

少しばかり、ぼくの昔話を聞いていただきたいと思います。

ぼくは第三次世界大戦時、戦場となった地区に住んでいました。当時小学四年生でした。

街が壊滅し、ぼくの親が殺された頃になって、「歌姫」が現れました。そう、みなさんがご存じの、歌姫伝説の幼き歌姫です。彼女はどこまでも響き渡る不思議な歌声でカデニア軍を萌えさせ撤退させると、満足そうに笑っておりました。ですがぼくとしては笑っている場合ではありませんでした。なぜなら、ぼくの親はもう死んでしまったからです。

ぼくは復讐を誓いましたが、できませんでした。歌姫のせいで戦争が終わってしまったからです。そこでぼくは思いました。これは正しい終末なのか、と。

もともと第三次世界大戦は憎しみの連鎖で始まりました。第三次世界大戦はご存じの通り、ファンゼル連邦が黒人諸国に対する攻撃の機会を狙っているという情報を得たカデニアが、ファンゼル連邦に軍を派遣し、兵器の存在を探し続けた末に一人の青年を誤って射殺してしまったことが原因です。ファンゼル連邦は、長らく黒人国家からの支配を受けていた白人諸国が第二次世界大戦後に独立し、集結した国家ですから、黒人の大国カデニアに対する憎しみは相当のものだったでしょう。

ところが「歌姫」が中途半端なところで戦争を終わらせてしまったせいで、この憎しみは発散させられないままとなってしまうました。これは冷戦状態の一因でもあります。

本来であれば、憎しみが憎しみを呼んで、もっと悲惨な戦争へと

進んでいったはずです。ぼくも成長して兵士になって、親を殺したカデニアに報復をしてやったはずなのです。争いの末に得た真の平和でなければ、ぼくは認めません。最終的に平和が得られず、人類が滅びるのであっても、ぼくは自然な終末として受け入れます。

人に罪はありません。

人は常に無罪です。街を破壊しても、人の親を殺しても、です。

したいと思ったことをするのが自然な姿ではありませんか？ 自然に善悪はないのですから、自然に従うことが罪になるなど有り得ません。カラープロダクションの人類洗脳計画も無罪です。しかし、イノセンスが抵抗運動に出ることもまた無罪です。ぼくたちは正義を決することを目的としてはいません。やりたいことをやるのです。

ぼくと同じ考えを持っている方は、他にもいらっしやるはずですよ。その方は是非、イノセンスに力を貸してください。東条胡桃による平和の押し付けを食い止められるのは、今しかないのです。

あなたが我々の朋となる日を楽しみに待っています。

イノセンス代表者』

文章はところどころ子供っぽいが、朝比奈氏の思想はしっかり伝わってきた。この論理は正しいとも間違っているとも言いがたい。平和を絶対的な善とするか否かという根本的思想が、僕たちとは違う。

「藤巻さん、これどう思う？」

聡明な藤巻さんは、つかえることなく自分の意見を述べた。

「カラープロダクションと融和することは不可能でしょうね。話し合いで解決する問題ではありませんし、バックにはノクターンがついています。この理念からすると、国家の法律もあまり重視していいでしょう。しかし、表立ったテロ行為は行わないはずですよ。朝比奈さんもノクターンの一員である以上、身元が露呈してノクターンの存在が明るみになることは避けなければなりません。よほどの

ことがなければ、彼らは少数派、東条さんの世界征服には支障をきたさないとは思いますが……」

「そっか」

有用で申し分ない意見を聞いたのにも関わらず、僕はどこか物足りない気持ちでいた。もつと何か、他に言ってほしいことがあるような。

そんな僕の様子に気づいたのか、藤巻さんは微笑んで言葉をつないだ。

「このチラシを読んだ今でも、世界平和計画を支援しようという意志は変わっていませんよ。私は東条さんの味方です。乃木坂さんも、そうでしょう?」

「うん!」

僕は何となく嬉しくなった。

東条さんがカデニアでライブをやっている頃、僕は日本で高校の授業を受けていた。いくら東条さんのライブがリアルタイムで中継放送されていると言えど、さすがに学校側も授業をさばらせてはくれなかったのだ。当然と言えば当然だが、「くるたん」の影響力を考えると、むしろ意外ととらえる人もいるだろう。池田くんとか。

古文の先生の講義をメモしていると、前方から僕を呼ぶ声がした。

「こんにちは、吟くん」

「え? !?」

高野さんが前の席の人と同じ場所に、透過した状態で立っていた。

『どうして授業中に来るんですか!』

ノートの隅にそう書いて見せると、高野さんは悪びれた顔一つせず要件を告げた。

「貴方の主人が、今大変なことになっている。早くテレビを見た方



「がいい。事は一刻を争うわ」

『どうしたんですか』

「とりあえず仮病を使って外に出て。今ここでそれを言ったら、貴方はクラスの真ん中で挙動不審になって担任の目に留まるかも知れない」

ただ事ではないと言うことは分かった。僕は演技をする緊張感から震えつつ、すっと手を挙げる。

「あの、先生。気分が悪いので保健室に行ってきます」

「私が付き添います」

クラス会長として、すかさず栗本さんが立ち上がった。気持ちはありがたいけど、今は一人にしてほしいのに！

狼狽していると、僕の焦りを察した藤巻さんも立ち上がる。

「いえ、私が行きます。保健委員になったことですし、お仕事したいんです」

そう言えば、彼女は編入してきた翌日に保健委員になったのだった。先生もその言葉に納得したらしい。

「保健委員か」

「はい」

「じゃあよろしく頼むよ。栗本は授業受けてていいぞー」

栗本さんは何故か顔をしかめて藤巻さんを一瞥した。藤巻さんは構わず僕に「行きましよう」と声をかけ、僕たちは静かに教室を後にする。「僕たち」の中に高野さんも含まれているのは、僕だけが知ることだ。

「坂の下のビルの壁に、大きなテレビが貼りついてるのを知ってるわ。あそこなら三分で行ける」

高野さんが教えてくれたが、リアクションを示すわけには行かないので表面上は無視した。教室から離れたところで、藤巻さんは怪訝そうに訊いてきた。

「どうしたんですか？ 本当に具合が悪いのではないように見えましたが」

「うーんと、やっぱり東条さんのライブが気になっちゃって。坂の下のビルの壁面ディスプレイをちょっと見てこようかなーと……」

自分でも苦しい言いわけだと思う。池田くんのようなキャラだったらい出しでもおかしくない話だけど、普段律儀な僕がこんなことを言うなんて不自然だ。だが藤巻さんは不思議そうな顔はしなくても、深く追求はしないでくれた。

「そうですか。乃木坂さんがそうおっしゃるなら、私は文句は言いません」

僕たちは三人で坂の下まで降りていった。

「え、うそ……」

ディスプレイを見て初めに口にした言葉がそれだった。

『ミレニアムタワーにテロ攻撃予告！』

道行く人が皆足を止め、画面に釘づけとなる。

ミレニアムタワーって、東条さんのいるところだよ……？

『繰り返します。先ほどカデニア政府に、ファンゼル連邦のテロ組織シャデニールからテロの犯行予告がありました。爆薬を積んだ戦闘機でカデニアの首都サンデシアのミレニアムタワーに突っ込み、自爆テロを行うというものです。戦闘機はすでにサンデシアの上空を飛行しており、防衛隊の出動も間に合いません。ミレニアムタワー最上階のホールで行われていた東条胡桃さんのライブは中止となり、現在避難活動が行われていますが、全員が一階まで下りて脱出するには時間が足りません！ サンデシアは嘆きに包まれています。ファンゼル連邦国務長官ゲルド・ネスマン氏は、「国家としては全く関与していない、この件については我々も非常に心を痛めている」とのことです。引き続きこのニュースについてお伝えします』

何だそれ。全員は助からない？

行き場をなくして逃げ惑う東条さんのファンたちを想うと、それだけで泣きそうになる。東条さんの安否だって分からない。無事に逃げてほしいと願うことしか、僕にはできない。

僕たちのそばにいた女性が金切り声を上げた。

「テロリストは何を考えてるの！？　くるたんよ？　くるたんがいるのよ！？」

「きつとテレビのない貧困地区の奴らなんだ。そうでもなければ、こんなの有り得ない！」

女性の肩を抱いて、恋人と思わしき男性も憤慨する。

ディスプレイに、実況中継でミレニアムタワーが映し出された。終戦直後に建設が決まり、世歴二〇〇〇年、平和と未来の象徴として造り出された美しい高樓。

それが今、僕の手の届かないところで大量殺戮の舞台になるとしている。

「見てるだけなんて、こんなのやだっ！　せめて東条さんと話ができればいいのに！」

僕は堪らなくなり、半ば泣きの入った声で叫んだ。東条さんを失うかも知れないという恐怖が、僕の心をこれまでにないほど蝕んでいた。

「私の携帯、使いますか？」

藤巻さんが差し出した携帯電話を、反射的に受け取る。

「番号の前に08をつければカデニアにある携帯電話にかけられます。東条さんが現在携帯電話を所持しているかどうかは分かりませんが……」

「ありがとう、試してみる」

僕はできるだけ冷静になつて電話をかけた。こちらの混乱が向こうに伝わってしまったら、東条さんにも迷惑をかける。

トゥルルルル。トゥルルルル。

コール音が耳に痛い。もし電話がつながらなかつたら、そしてもし東条さんがテロに巻き込まれてしまったら、僕は二度と東条さんとしやべれなくなる。お願い、つながって……！

僕の願いが通じたのか、東条さんは電話に出てくれた。

『もしもし雪菜！？』

「乃木坂だよ」

『乃木坂か、ちょうど声を聞きたいと思ってたんだ。今こっちは大変なことになってて』

「うん、テレビで中継してる。東条さんはもう避難した？」

『避難するつもりはない』

「ど、どうして」

『みんなが助からなきゃ意味がないだろ！　ボクはいま、塔のてっぺんの展望台に向かっている。そこから歌って戦闘機にMPをぶつける。テロリストの気が変われば、みんな助かるんだ』

「そんな、無謀だよ。死んじゃう、やめて！」

『やめてって言っくな！』

怒鳴りつけられて、僕は口をつぐむ。

『ほんとうにボクのこと大切に思ってるなら、がんばれって言え！』

この言葉が、僕に大事なことを思い出させてくれた。

そうだ、東条さんは英雄になる人だ。他の人を見捨てて逃げるようなことはしない。だからこそ僕は東条さんのことを慕ってやまななんだ。

「がんばれ！　東条さんならできる！　がんばれ」

僕は力の限り東条さんを応援することに決めた。

\*\*\*

俺と相棒は、シャデニールの仲間全員の希望を背負って旧式の戦闘機に乗り込んだ。資金のない俺たちにとっては、裏ルートで手に入れたこの戦闘機が唯一の攻撃手段だった。この攻撃が失敗したら、それはシャデニールの敗北を意味する。

戦争はまだ終わっていない。

それがシャデニールの合言葉だ。

第三次世界大戦が始まった責任は、明らかにカデニアにある。勝敗のつかない不完全燃焼の戦争ではあったが、カデニアは我々に謝罪すべきなのだ。それなのにカデニアは、戦時中に占領したファンゼル連邦の領土を返還しようとししない。全て「終わった」ことにしてやり過ごそうとする。

シャデニールの構成員の大半は、占領された領土を故郷とする者だ。俺もその一人。できることなら、カデニアの謝罪声明と領土復帰の朗報を聞きながら、美味しい酒を飲みたかった。だが、行動を起こさぬ限りそれは無理だと悟った。

だから俺と相棒は空を飛ぶ。

たった二つの命でカデニアに間違いを思い知らせてやることができるなら、お安いものだ。

「タワーが見えてきましたよ」

感慨にふけっていると、相棒が目を輝かせて告げた。

第三次世界大戦を経験した俺と違って、彼はまだ若い。自爆テロなんかにつき合わせるのは、正直俺は反対だった。だが、その嬉々とした表情を見て、俺は考えを改める。こいつも祖国のために立ち上がった立派な勇士だ。

「あれ。誰かいます、塔のてっぺんに」

「何だと？」

目を凝らすと、確かに人影がある。……子供？

子供は大きく腕を広げ、そして胸の前で手を組んだ。祈りでも捧げているのだろうか。

どこからか、美しい歌声が聞こえてくる。無論この戦闘機にラジオなどついていない。旋律の流れは子供の動きと一致しているが、この距離で、それも戦闘機越しに人間の声が聞こえるわけがない。ではこの声は何だ。心に直接響いているとも言っのか。

今まで感じたことのない、表現しがたい情動が押し寄せる。全ての苦しみを洗い流してくれるような、夢にいざなうような歌声が俺たちを包容する。

天使の歌を、俺たちは聴いた。

\*\*\*

僕は電話をしながら、ずっとディスプレイを見つめていた。そこにはすでに、シャデニールの戦闘機が映し出されていた。

『もう外に出るぞ。ケータイはつけっぱなしにしておくけど、話はいったんやめだ』

「うん」

『……ぜったい帰るから、ボクのがんばりを見てて』

「うん！」

その会話から数秒後、画面がミレニアムタワーの展望台に切り替わり、小さな東条さんの姿が現れた。桜をモチーフにした薄い桃色のドレスに身を包み、僕のご主人様は輝かしいほどの美しさを湛えて人生最大の舞台に降り立った。

レポーターが何か言いかけたが、すぐにやめた。東条さんが澄み切った声で歌い出したからだ。彼女にしては珍しいオペラ調の曲。マイクも使わないのに、物理的制限を超えてカメラのところまで声が届いている。これも女王の『力』だろうか。

戦闘機は止まらなかった。

止まらずにタワーの脇を通り抜け、そのまま空の彼方へと消えていった。

助かったんだ。東条さんも、ファンのみんなも、戦闘機のパイロットも。

僕の周りにいた視聴者は歓声を上げた。僕は笑いながら泣いた。

『あれは……天使でしょうか？』

のちにこのレポーターの言葉は、東条さんの偉大さを物語る一つの名文句となる。

僕は誇らしかった。

\*\*\*

最近胡桃が自分の意志を押し通そうとすることが増えたように感じる。

少し前までは、不服そうな顔は見せても、最終的には私の言う通りにしていたのに。

私は胡桃を愛しているということ、私がいなければ胡桃は生きていけないということを、幼い頃から教え聞かせてきた。胡桃は聡い子だから、すぐにそれを理解して「いい子」に育ったと思っていた。

多少の自立は、年齢的に仕方ないと認めてきた。例えば勝手に下僕をつくるなど、そのくらいのことは。しかし今日のことは明らかに黙過できない。胡桃は制止する私をMPであしらって、独断で展望台に行ったのだ。結果的に大勢の命を救うことができたが、一歩間違っていたら死んでいた。

やはり乃木坂くんが来てからだ。胡桃が変化を見せたのは。

かぐやの時もそうだった。かぐやの心に純人が入り込みすぎた結果があれだ。最初は微笑ましい友人関係でしかなかったのに、一体いつの間に恋愛関係に移行したと言うのだろうか。東条博士によれば胡桃は恋愛をするような精神発達をしていないとのこと。だが、恋愛をしないにしても、乃木坂くんとの生活が彼女の独立を促すものなら？

私自身、乃木坂くんにはつい心を許してしまうところがある。それが同年代の胡桃だったら、どれほど彼に影響されることがか。

私は萌えの普及の立役者だ。私がニートだった頃に馬鹿にされていたオタク文化は、正義になった。今や私は誰にも蔑まれることはない。それでもなお感じ続ける、この敗北感はなんだ。純人にかぐやを取られ、今度は乃木坂くんにも胡桃を取られてしまうのではない

かと、私は怯えている。

胡桃の中に私以上に大きな存在があるなんて、これは危惧すべきことだ。

何とかしなければ……。

\*\*\*

東条さんから帰国したとの知らせを受けて、僕たちは二十三日の夕方、僕が下僕になったあの体育館裏で待ち合わせをした。

早く東条さんに会いたくて、僕は二十分も前に体育館裏に来てしまった。待つこと二十分。定刻通りに東条さんはやってくる。

昨日の感動はお互い語り尽くしてしまっているので、まず言うべきことはこれだ。

「おかえり、東条さん！」

東条さんはにこにこ顔で僕を見上げた。

「乃木坂、今日はだいじな話があるの」

「うん、何？」

「乃木坂はもういらないよ。きょうをもって下僕リストラ！」  
え？

一瞬言葉の意味が分からなくて、僕は首を傾げる。しかしだんだん頭の理解が追いついてきて……。

「ボクは乃木坂がいなくなっただけでさみしくないんだ。だからもういらな——い」

ねえ。

「だってボクはほんとうのヒーローになったんだよ！」

何で二人きりなのに営業ボイスなの？

「MP 抜きボクの勇気を、みーんなほめてくれるんだ。乃木坂の意味なくなっちゃった」

やめてよ。



「いままでありがとうね」

いつもみたいに、ふてぶてしく喋ってよ。

「きょうからボクと乃木坂は赤のタニンです。あんまりボクに近づかないよーに！」

全く未練を感じさせない足取りで、東条さんは僕から離れていく。

行かないで。

言いたくても言えない。僕には彼女を呼び止める権利がない。

だって、彼女に必要とされない僕は、ただのクタオなんだから。

東条さんの下僕をクビにされたら泣くと、過去の自分は言った。  
でも違ったようだ。

本当にクビにされてしまった僕は、胸が痛すぎて、涙も出てこなかった。

## 第五章 ひいろつ（後書き）

読んでくださってありがとうございました！

執筆者のサイト『Re:I』

<http://reiyumesaki.jimdo.com/>

## 第六章 おむすび

僕はクタオらしくクタつと萎れた心で、とぼとぼと歸路についた。

家に帰るなり鞆を放り出して、机の棚の中から適当に抜き出したワークブックで勉強する。精神を安定させるにはこれが一番だ。だが、手が震えて上手に字が書けなくなり、五分くらいでやめてしまった。

僕は無気力に床に身を横たえる。いつもなら布団以外のところで寝転がったりはしないのだが、今日ばかりは布団を敷く気力がなかった。

寂しくなくなったからって、リストラすることないじゃないか。そんな未練がましい思いが募る。東条さんにとつて、僕は使い捨ての下僕でしかなかったの？ 心がつながっていると思っていたのは僕だけ？ …… それじゃあまるで、馬鹿みたいだ。

僕はすっかり自分がカラプロの一員になったように錯覚していたが、結局は部外者だったのだ。僕は藤巻さんのように裏社会に通用する能力を持っているわけでもない。だから、用済みになったら置いておく理由がない。

ああ、僕はとんだ勘違い野郎だ。

自分には東条さんのそばに置いてもらえるだけの価値があると思いきこんでいた。彼女は「僕」を下僕にしたんじゃない。MPが効かない人間を下僕にしたらだけ。そのくらいのこと、本当は分かっていたはずなのに。

悶々と思考のループに陥っていると、家の電話が鳴り出した。耳障りです。今は一人にしてください。そうは思ふものの、出ないのも申し訳ないので、物憂い身体を起こして受話器を取った。

『もしもし？ 乃木坂愛です。吟ちゃんのお宅でしょうか』

少女のような、ふわふわした声が耳に届く。母だった。

「僕だよ、吟だよ」

『あら吟ちゃん、久しぶり。さっきは間違い電話をかけてしまって、相手の人に怒られちゃったのよ。これからは気をつけなくっちゃ』

母は何も知らないで、いつも通りのほほんとしていた。

僕がいくら苦しくもうと、世界は何事もないように回っていく。

母に心配をかけないために、僕は空元気を出して受け答えた。

今の自分と過去の自分が重なり、暗澹たる中学生時代を思い出させる。お母さんが笑っていてくれることが、せめてもの救いだ。

『入学してから半月経ったわね。友達はできた？』

……できたよ。主人と下僕って名義だったけど。でも。

『できたのね、よかった。吟は引っ込み思案だから、私も純ちゃんも、心配していたのよ』

友達に、僕の届かないところに行ってしまった。

『高校生活は楽しい？』

本人が孤独じゃないと言うのなら。

『せっかく遠くまで通ってるんですもの、満喫してこないとね』

喜んで祝福しなければならぬのに。

『元氣そうで何よりだわ』

どうして僕は喜んであげられないんだ？

人の幸せを喜べないなんて、そんな自分にますます嫌気が差す。

電話が切れてからも、僕はしばらく壁に身を預けてその場を離れなかった。もう何も考えたくない。一人で泣いていた。けれど涙は出てこない。

四月二十四日、木曜日。くもり。

朝から陰鬱な雰囲気だったが、ルーチンワークは乱さなかった。

六時に起きて朝ごはんとお弁当を用意し、七時半に家を出る。ただし、お弁当は手を抜いて塩のおむすびしか作らなかった。

今日の朝はまた栗本さんと二人きりだった。イノセンスに勧誘さ

れたあの日以来、僕は気まずくて彼女とろくに顔を合わせられないでいた。栗本さんの方は、逆にちらちらこちらを見ている。何か言おうとしてためらっているような素振りだったが、僕は気づかぬふりをした。ごめんね。

心の傷が開くと嫌なので、極力無感情でいられるように生活していたら、帰りがけに校門で待つていた藤巻さんに呼び止められた。

「またこんなところで引き留めてしまつて申し訳ありません。今日のあなたのご様子が気にかかったので。教室で堂々と話しかけられないのは不便ですね。そろそろ、教室でも交友関係を深めませんか？」

「ああ……うん……」

「やっぱり今日おかしいですよ、乃木坂さん。どうしたんですか」

藤巻さんは僕が下僕をリストラされたことをまだ知らなかった。

東条さんもこの件については言い出しづらかったのかも知れない。

簡単に説明すると、藤巻さんは信じられないといった風に驚愕の顔を見せた。

「そんな、何かの間違いです！ お二人が離れ離れになるなんて。

私、東条さんに話を聞いてみます。乃木坂さん、今日はくれぐれも注意して帰ってくださいね。落ち込んでいる時は注意力も散漫になりますから」

僕は藤巻さんに見守られて校門を後にした。

事故にこそ遭わなかったが、途中で雨が降り出したので濡れてしまった。僕の心のようにじめじめとしていて気持ちが悪かった。

四月二十五日、金曜日。雨。

雨の降りしきる校門で、昨日と同じように藤巻さんとお話をした。

「残念ながら、昨日話していただいたことは事実のようです」

藤巻さんは沈痛な面持ちで切り出した。

「それでも私は、乃木坂さんのお役に立つという指針を変えるつもりはありません。今すぐに東条さんを説得することはできないでしょうが、いつかきつと、再びお二人が一緒にいられる日々を取り戻しましょう」

「……ありがとう」

家に帰ってから、初めてカラプロに行った日にもらった東条さんの写真を眺めた。写真の中の東条さんは、僕に微笑みかけている。もうこの笑みは見られないんだと思うと、胸が締めつけられる思いだった。

気を取り直して晩ごはんを作ろうとしたら、台所になめくじがいたので塩をかけた。なめくじは小さかったので、すぐにしぼんでしまった。悲しくなった。いつもだったら絶対殺さないのに。何をやっているんだろう僕は。

四月二十六日、土曜日。晴れ。

家で勉強している最中に、高野さんが壁から現れた。一旦手を止めて身体を彼女の方に向ける。

「こんにちは。今日は東条胡桃のところには行かないの」

「行きませんよ。下僕を解雇されたので」

僕はこともなげに答えた。昨日の夜、僕は現実を受け入れて、もうこのことでうじうじ悩んだりはいしないと決めたのだ。

「解雇……。貴方はそれでいいの」

高野さんは一つも表情を動かさずに問う。彼女と話していると、鏡に映し出されたように自分の心が見えてくるのはどうしてだろう。僕は高野さんに答えるというより、自分に言い聞かせるように述べた。

「いいんです。東条さんはもう僕を必要としていません。僕を必要としない人に取り縋ろうだなんて、見苦しいじゃないですか。僕と東条さんのつながりは切れてしまったんです」

「では、貴方を必要としない東条胡桃には、会うつもりはないというのね」

「そうです」

「気持ちの悪い依存関係ね」

高野さんは冷徹に言い捨てた。

「それでは東条胡桃自身よりも、東条胡桃に必要とされることが重要ということになるわ。貴方は自分が孤独から救われたいがために彼女の下僕をしていたの？」

指摘されて言葉に詰まる。

最初は、確かにそうだったかも知れない。あの時は東条胡桃というアイドルの存在さえ知ったばかりで、東条さんの人柄なんてほとんど知らなかった。僕が東条さんを支えようと誓ったのは、長年クダオと呼ばれ軽蔑されてきた自分が誰かに必要とされたことが嬉しかったからだ。

「本当に東条胡桃を愛しているなら、不要と言われたからといってあっさり諦められるかしら。貴方は主人がもう救済をもたらす存在ではないと判断して、自ら切り捨てているのではないの？ 私には信じられない。吟くんが、切れたつながりを結び直そうとしないことが」

でも、実際に東条さんの下僕として過ごしていくうちに、僕は彼女のひととなりに触れた。そして心から彼女を好きになった。僕は自分の孤独を埋めてくれる人についていこうと思って東条さんの下僕をやっていたんじゃない。かわいそうなアイドルに同情して応援していたのでもない。世界のために頑張る彼女自身の魅力に惹かれて、彼女を支える存在でありたいと思ったんだ。

僕はただ、友達でありたかったんだ。

「今でも東条さんは僕にとって大切な人なんだって、高野さんのおかげで気づきました。僕を必要としているかどうかは関係なかったんです。東条さんのことが好きだから、僕は彼女の近くにいたかったです。リストラのショックでそんな単純なことを忘れてました。

つながりは、結び直せるでしょうか」

心なしか、高野さんが笑ったように見えた。

「それは貴方次第。彼女に貴方の想いが伝われば、きっと」

役目は終わったと言わんばかりに、高野さんは壁際へと歩いていく。そうだ、高野さんは今でもカタリ様の騎士だ。自分のことを忘れてしまったカタリ様を、もう自分には何も与えてくれないかぐやさんを、人柄だけで愛している。高野さんの想いがかぐやさんに伝わることは、もうない。

僕は後ろから声をかけた。

「ありがとうございます！」

高野さんはわずかに顔が見えるだけ振り返り、また壁の方を向く。

「私は自分の意見を述べただけ」

表情は分からなかったが、何となく、満足げに微笑んでいるような気がした。

四月二十七日、日曜日。晴れ。

今日は神聖アキバ帝国建国の日だ。ネットでは大変な騒ぎになっているんだろうな、などと考えていると、インターホンが鳴った。

「はい」

玄関ドアの覗き穴から来訪者を確認する。黒いスーツを着た長身の男性だ。真つ黒なサングラスをかけているが、精悍な顔つきであることは分かる。誰だこの人。

「ど、どちらさまでですか？」

少し気おくれして尋ねると、意外な声が返ってきた。ただし囁き声で。

「あたしよあたし！ ミッル！ 内緒で来てるから早く中に入れてちょうだい！」

えええええ。信じられない。



「ほんとにミツルさんですか？」

「ホントよ！」

「何で僕の住所知ってるんですか」

「胡桃ちゃんから聞いたのよ」

「じゃあ、一つ質問します。僕が女装した時の名前は？」

「いちようちゃん！」

どうやら本物らしい。ドアを開けて招き入れると、彼はカツラをはずした。すると勢いよく金髪リーゼントが飛び出してきて、僕の頭上でぶるんぶるんと揺れた。サングラスも黒いものから薄紫のものに取り換え、スーツを脱ぐと下からはピンクのフリルつきブラウスが現れる。仕上げに彼は神速でメイクを施した。そこには見知ったミツルさんが立っていた。

「どう、あたしの変装」

「びつくりしました、さすがです！」

「お仕事していると、身分を隠して移動しなきゃいけない時もあるのよね。だから自分の髪の毛で最高のカツラを作ったわ」

先ほどまで装着していたカツラを自慢げに振る。市販のカツラで満足しないところがミツルさんらしい。

「そうそう、本題に入るわ。胡桃ちゃんがあなたをリストラするなんておかしいと思ったのよ。だから問い詰めたら、泣きながら教えてくれたわ。あれは色川社長に命令されて無理矢理言わされたことだったんですって！」

「……え？」

「だーかーらあ！ ホントはあの子、吟ちゃんをリストラしたくなんかなかったのよ！」

それが本当なら、心臓が爆発するくらい嬉しい。いや、心臓が爆発っていうのは言いすぎかもしれないけど、泣きたくなるくらい嬉しいのは確かだ。

それなのに、あの時心に深い傷を負った僕は、つい疑念を抱いてしまう。

「でも、あの鋭い藤巻さんでさえ、事実だつて言つてたのに」

そんな僕の暗い気持ちを吹き飛ばすように、ミツルさんが勢いよく否定してくれた。

「胡桃ちゃんはい優をもこなすトップアイドルよ。あの子の本気の演技は、雪菜ちゃんでも見破れないわよ。それに、胡桃ちゃんが自分の意思であなたを解雇したつて考えるより、強制されたつて考えた方がむしろ現実味があるでしょ？　胡桃ちゃんは優しい子だつてこと、あなたなら分かつてるはず。胡桃ちゃんには、逆らえない理由があつたのよ」

ミツルさんはビシツと人差し指を立てて声高に叫ぶ。

「なんと、胡桃ちゃんが吟ちゃんを解雇しないなら、刺客に始末させるつて言われたんですつて！　きつと社長は、あなたと胡桃ちゃんが仲良くなりすぎるのを恐れたのね。先代の歌姫さんの例もあるし。胡桃ちゃんは今でも吟ちゃんと一緒にいたいつて思つてるわ。だから行つてあげて！」

「行くつて……スタジオロースにですか？」

あの辺りはバスも走っていないし、徒歩で行くには遠すぎるな。でも、東条さんのためなら頑張れる。と思つたら、ミツルさんに突っ込まれた。

「神聖アキバ帝国の建国祝典によ！」

「そんなの開かれるんですか？」

「知らなかつたのお！？　連日テレビで報道されてるのに」

記憶を辿ると、確かにそんな話があつた。

『二十日には建国記念ライブ、建国トージツには祝典が開かれるんだよ！』

その後ノクターンの襲撃があつたりして、すっかり頭から抜けていた。

「とにかく、行つてあげなさいよ。場所は秋波原跡<sup>あきはばら</sup>よ。バスに乗ればすぐだから！　ああん、あたしそろそろ仕事に戻らなきゃ。じゃあね、吟ちゃんっ！」

あつという間に再変装して慌ただしく部屋を飛び出してくミツルさんを眺めながら、僕は心を躍らせていた。

僕たちの絆は、まだ結び直せる！

最寄りのバス停から秋波原跡行きのバスに乗ること十五分。

秋波原跡はもともと観光地として有名で、人通りの多い地区だが、今日はことさら人口密度が高い。どこに行けば東条さんがいるのだろう。

『神聖アキバ帝国建国祝典開催！　くるたんの路上トークライブはあちら　』

ふと目に入ったポスターに感謝して、矢印に沿って進もうとすると、誰かに突然右腕を掴まれた。

「どこ行くの？」

朗らかな声に振り返れば、小首を傾げる栗本さん。

「もしかして、神聖アキバ帝国の祝典に行くのかな？」

気のせいだろうか、僕の腕を掴む力がいつそう強くなった。一見含みのない笑顔に見えるが、これは絶対怒っている。

「ごめんね、栗本さん。クタオとかオタクとか関係なく、僕は東条さんに会いたいんだ」

僕は栗本さんを振り払って人ごみに紛れてしまおうとした。が、彼女の力はどんどん強くなっていく。何これ、女の子の力とは思えない！

「行かせない。東条胡桃になんか会わせないんだから！」

「うわっ」

怒気をはらんだ声でそう言い放ち、栗本さんは僕の腕を捕えたまま早足で歩き始めた。必然的に、僕は意志に反して彼女についていてしまう。

「痛いよ、離してっ」

いつもは思いやりのある人なのに、栗本さんは振り向いてもくれ

ない。どこか分からない場所へ連れて行かれるのは怖い、僕には為す術もなかった。彼女の顔が見えないのが余計に不安をそそる。

トークライブ会場から離れれば離れるほど人は減り、ついに僕たちは二人きりになってしまった。お店が立ち並んでいるところを見ると、本来はここも賑わっているのだろう。しかし今日ばかりは、みんな祝典に流れてしまっている。

栗本さんは『メイド喫茶ゆんゆん』という店舗の前で立ち止まった。小さな屋敷のような外観で、CLOSEDと記された木札がかかっている。

「キリエのお母さんはここの店長なの。今日は誰もいないよ」

彼女は裏口に回り、鍵を開け、僕を引っ張りながら中に入っていた。こちら側は栗本家の住宅になっているようで、靴脱ぎ場がある。慌てて靴を脱ぐが、栗本さんはそろえる時間まではくれなかった。歯痒い思いで乱れた靴を見ながら、僕はリビングへ引っ張り込まれていく。

「やっと二人きりになれたね」

やっと僕を放してくれた栗本さんは、柔らかい笑みを浮かべた。

「乃木坂くんは、キリエの気持ちに気づいてるかな？　きっと気づいてないよね」

ふうつと深く息を吐き、彼女は艶っぱいまなざしで僕を見つめる。

「八年前から、乃木坂くんのが好きでした」

「何でそんな前から……」

普通はもつと違った感想を述べるところなのだろうが、ぽろりと出た言葉がそれだった。僕が女の子に告白されているというこの状況も信じがたいが、それ以上に八年前というのが気になってしまった。

「やっぱり覚えてないよね。無理ないよ、小二の時の話だもん。」

三年生になる前にお母さんがこのメイド喫茶を創業して、キリエと一緒に引っ越しちゃったけど、小二までは乃木坂くんと同じ岩口

県に住んでいたの。それも、同じ小学校の、同じクラスにいたんだよ。その時はキリエ、お菓子の食べすぎで太ってたから、見た目じゃ分からないのかもしれないね」

小二の時の記憶を辿る。しかしその頃の記憶は曖昧で、よく思い出せない。僕が告白されるわけがないという思いが強かったため、冗談や人違いといった可能性ばかりが脳内を巡った。

「転校してからもずっと、キリエは乃木坂くんのことばかり考えてた。次に会う時は可愛い姿を見せたくて、ダイエットもしたよ。おかげで今はみんなから可愛いって言われる。ねえ、乃木坂くんが見ても、キリエは可愛いかな？」

僕は本心のまま答えた。ちよつと恥ずかしかったけど。

「可愛いよ。栗本さんはすごい美人だと思う」

「ほんと！？ 嬉しい、乃木坂くんが可愛いって言ってくれた！」

泣きそうな顔で喜ばれると、逆に良心が痛む。僕は栗本さんが思っているような素晴らしい人間ではないのに。

「キリエね、何となく乃木坂くんには近い将来会えるんじゃないかって思ってたの。中学の時やった全国模試って、成績上位者の名前がカタカナで発表されるでしょ？ それに毎回満点取って掲載されてる人がいたの。ノギサカギンってね。キリエは家がここだったし、乃木坂くんほどの学力があれば虹高に来るかも知れないなんて甘い夢見ながら、虹高を受験したんだ。そしたらほんとに再会できたんだよ！ 毎日一番に登校してたのだって、乃木坂くんとできるだけ早く会いたかったから。それくらい、キリエは乃木坂くんが好きな」

「何でそんなに僕のこと……」

くすりと笑う様は魅力的で、普通の男子だったら迷わずつき合ってくださいと言っているところだ。でも僕はまだ、栗本さんに好かれていたという事実を認めることができなかった。

「乃木坂くんはキリエのヒーローなんだよ。近寄ると病気になるって言われてたキリエに唯一優しくしてくれたのが、乃木坂くんだった」

たの」

「……！」

思い出した。学級委員長になった年に、僕が手を引いて歩いた女の子のことを。彼女の近くにいた子が貧血を起こすことが数回あって、それ以来彼女はいじめられていたのだ。汚いとか、ばい菌が移るとか、心ない言葉を投げかけられて、その子はいつも泣いていた。

『なかないで。きょうしつにもどろう？』

『やだ、こわいよ』

『じゃあ、ぼくと手をつなごう。いつしよならこわくないよ』

あの怯えた目をした女の子が、澀瀬とクラスをまとめ上げるクラス会長になっているなんて。時は人を成長させるんだなあ。

しみじみと過去に思いをはせていると、栗本さんは思いがけないことを口にした。

「でも、いじめっ子たちが言ってたことも真実なの。キリエに触れた人間は生命力を失って、最終的には死に至る」

「そんなことないよ！ あれはただの嫌がらせで、栗本さんは病気のもとなんかじゃ」

「乃木坂くんの気持ちは嬉しいけど、キリエは本当に疫病神なんだよね。ちよつと脅してやったら、お母さんが教えてくれたよ。キリエは造られた人間なんだって。乃木坂くんは東条胡桃の秘書だから知ってるかな？ デーヴァのこと」

何だこの展開。まさか、栗本さんが……？

「……知ってるよ」

「なら話は早いね。キリエは歌姫になれなかった最後のデーヴァ。もともとはキリエのキは木曜日の木じゃなくて、黄色の黄だったんだって。キリエはMPじゃなくて、もつと邪悪で使い道のない超能力を手に入れちゃったの。実は虹高に入学してからも、何人か保健室送りにしてるんだよね。気をつけてても、ちよつとさわるだけでもうダメ」

昼休みに、会話の中心にいらながらも微妙な距離を保っていた様子を思い出す。僕はつきり彼女が隠れクタオだからだと思っていたが、事態はもつと深刻だったんだ。

「実力テストの結果発表の日、乃木坂くんの手を取っても何も起きなかった喜びは、きつと他の人には分らないよ。だって、ちゃんと人に触れたのは八年ぶりだったんだよ？ お母さんでさえ、近寄るな、さわらないでって忌み嫌うキリエの身体が受け入れられた、奇跡の瞬間なんだよ。ほんと、泣いちゃいそうだったんだから」

人に触れることを許されない栗本さんの心中は、察するに余りある。東条さんや藤巻さんと違って、栗本さんに備わったのは恒常型の力なのだろう。何十年も力の制御を訓練してきた高野さんでさえ、長い間姿を現していることはできないと言っていた。栗本さんはこれから何年費やせば人と触れ合えるようになるのだろうか。

「じゃあ、僕のことを好きって言うのは、僕しかさわれる人がいないから？」

栗本さんは首を横に振り、切なげに僕を見る。

「それは違うよ。例え乃木坂くんが特別な体質じゃなかったとしても、キリエは乃木坂くんを好きになってた。乃木坂くんは人を救うことのできる人だから。キリエは乃木坂くんの魂に恋をしてるんだよ。」

ねえ、キリエとつき合ってくれないかな。キリエの体は、言ってみれば乃木坂くん専用。浮気なんかできないし、できたとしても絶対しないよ。こないいい女の子、他にはいないと思うけどなあ」

栗本さんは僕に迫ってくる。でも、駄目だ。栗本さんは僕を過大評価している。僕に執着しているから他の人の良さに気づけなくなっているんだ。

「僕なんか、駄目だよ」

「ダメじゃないよ。どんなに苦しい時だって、死にたくなるような孤独の中でだって、乃木坂くんのことを想うだけで救われたの。乃木坂くんのいるこの世界で、生きていようって思えたの！ 乃木坂

くんが思ってるよりずっと、キリエは乃木坂くんのことが好きなんだよ。この気持ちに嘘はない」

「うう……」

ここまで言われてどうしてつき合ってやらないんだと、誰かが見ていたら怒るかも知れない。しかし僕には、交際を拒否する真つ当な理由があるのだ。

「僕、好きな人いるし……」

途端に栗本さんの顔色が変わった。僕の肩を掴んで、ものすごい剣幕で問い詰める。

「誰！？ 雪菜ちゃん？ まさか東条胡桃とは言わないよね？ 誰、誰なの！？」

「中学校の……先生……」

僕は栗本さんが怖くて震えていた。嫌でもつき合うつて言うべきだったのかな？ 今の彼女なら怒り狂って僕を殴るかも。藤巻さんと同じくらいの力だったらどうしよう、死んじゃう。先生、僕にご加護を……！

ところが、栗本さんはころつと落ち着いた態度になって、その上軽やかに笑い出した。

「あはっ、なあんだ。それって子供の小さな初恋だね。安心したよ」

よかった、怒られなかった。と気を抜いたのも束の間。

「でも、これで乃木坂くんも恋をするってことが分かっちゃったなあ。どうしよう、うっかりしていると他の子に取られちゃうね。それくらいなら、今のうちにキリエのものにしておかないと」

よく意味は分からなかったが、どことなく危険を感じさせる言葉を口にして、栗本さんは僕の方へ歩み寄ってきた。僕が後ずさりしても、栗本さんは顔を上気させて近づいてくる。妖艶な笑みは僕に恐怖を与えた。

「やっ……来ないで……」

笑ってるけど、やっぱり怒ってるんだ！



恐慌状態に陥った僕の身体は言うことを聞かず、足がもつれて倒れてしまう。手を使って少しでも彼女から離れようとするが、奮闘むなしくすぐに追いつかれてしまった。

栗本さんは僕の腰にまたがって、上半身を押し倒す。

「怖くないよ。むしろ気持ちいいはず」

もう僕に抵抗する気力は残っていなかった。栗本さんの重みがおなかにのしかかって、息が苦しい。肺から空気が漏れる。誰か助けて。

栗本さんは僕の顔を手で優しく挟み込んだ。混乱した僕の思考に、新たな刺激が加わる。

「んっ……」

僕の唇に、栗本さんの唇が押し当てられた。

## 第六章 おむすび（後書き）

読んでくださってありがとうございました！

執筆者のサイト『Re:I』

<http://reiyumesaki.jimdo.com/>

## 第七章 はあと（前書き）

最終章です。

## 第七章 はあと

食べられた！

僕は瞬時にそう思った。

朦朧とする意識の中で、口内を貪る栗本さんの存在だけが浮き彫りになっている。こんなに乱暴ってことは、すごく怒ってるんだ。恐怖で息ができなくなる。酸素が欲しい。心臓の音が耳の奥で聞こえる。体が熱い……。

何も考えられなくなったところに、ようやく僕の唇は解放された。新鮮な空気を求める体は、自然と小刻みに喘いでしまう。口呼吸できるようになって、栗本さんが腰にまたがっている以上、肺の圧迫感は癒えない。

栗本さんは頬を赤らめて僕を見下ろしていた。憤怒の形相かと思いきや、満ち足りた幸せそうな顔だった。人差し指でうっとりと唇をなぞる。

「乃木坂くんは、これがファーストキスだね？ キリエもこれが初めて。まあ、キリエにキスなんかされたら、普通の人は即死だけど。どうだった？ 気持ちよかった？ 毎日イメーグトレイニングしてるから、結構自信あるんだよ」

「ふえ……？ いまの……キス？」

ぼんやりとしていた僕は、つい思ったことを口走ってしまった。「違うよ、キスっていうのは、お父さんとお母さんがチュッとするあれでしょ？ 今のは全然違う。栗本さんは僕のことを食べようとしたんじゃないの？」

僕はすぐに後悔した。こんなことを言っ て下手に刺激したら、また乱暴されるかも知れない。おそろおそろ栗本さんと目を合わせる。

何故か彼女は照れていた。

「やだー、乃木坂くん、どこでそんな言葉覚えたの？ ふふ、大人のキスも知らないくせに。そんなに言うなら食べちゃおうかな？ そしたら乃木坂くんはキリエのものだもんね」

確かに、僕を食べて消化吸収すれば栗本さんの骨肉になるんだから、その理論は間違っていないけど……。交際を断られただけでそんな極論に達するなんて、そんなに僕のことが好きなのかな。人から好かれるのはありがたいことだけど、彼女はまず病院に行くべきだと思う。

栗本さんは僕の頬から胸にかけてをそつと撫でた。今度は何をするつもりだろう。先ほどの恐怖がよみがえって涙がにじむ。

「世界で一番乃木坂くんを愛しているのは、絶対にキリエなんだから」

「いやぁ……食べないでえ……」

食い殺されて終わりなんて嫌だ。怖い。

「誰にも渡さない」

低い囁きが、僕には死刑宣告のように聞こえた。

その時、誰かがドアを開け放った。

「あ……」

僕からは見えないが、来訪者は僕と栗本さんの態勢を見ているのだろう。驚くのも無理はない。人が食べられる瞬間なのだから。

「あなた一体何を……！？ 乃木坂さんから離れてください！」

それは、聞き覚えのある澄んだ声だった。

栗本さんは立ち上がって、来訪者 藤巻さんを睨みつける。

「あーあ、せつかくいいところだったのにい」

体が自由になった僕は、肩で息をしながらよろよろと立ち上がった。

「ふ、藤巻さん……怖かったよう……」

思わず泣き出しそうになりながら、栗本さんから距離を取って壁沿いに後ずさる。本当は藤巻さんの方へ行きたいが、今はできるだけ栗本さんを刺激しない方がいいだろう。

藤巻さんは氣遣うように栗本さんを見ていた。

「栗本さん……どうしてこんなこと……」

「うるさい！ 雪菜ちゃんにはキリエの気持ちなんて分からないよ！」

栗本さんは隠し持っていた喫茶店用のナイフを藤巻さんに投げつけた。ナイフは標的に突き刺さらんと飛んでいったが、藤巻さんの指の間に軽く挟まれて動きを止める。

「いけませんよ、危ないじゃないですか」

藤巻さんは穏やかに言ったが、目は笑っていない。

「ふうん？ その危ないモノを簡単に止めちゃう雪菜ちゃんは、もっと危ない人なのかな？ 最初会った時から普通じゃない感じはしてたけど」

「奇遇ですね。私もです」

二人の間に異様な緊張感が流れた。お互い本能的に、ルルティナから受け継いだ『力』を感じ取っているのかも知れない。

「藤巻さん氣をつけて！ 栗本さんはディーヴァだよ！ 常人の力じゃない！」

「分かりました。乃木坂さんは、東条さんのところへ行つてあげてください」

頷いて駆け出す僕の行く手に、栗本さんが立ちはだかる。

「行かせないもん！」

しゅん、と風を切る音と共に、藤巻さんの手刀が栗本さんの頭上を通り過ぎた。栗本さんが回避していなければ、首筋にクリーンヒットしていたところだ。

「ひつどいなあ。首は急所なんだよ？」

「あなたが私と同じなら、そう簡単には死なないはずですよ」

藤巻さんはそう言うが、きつと一般人に当てても致命傷にはならない程度に加減していただろう。藤巻さんが狙っているのは、おそらく栗本さんを無力化してできるだけ穏便に事態を収束させること。力になりたいのは山々だけど、栗本さんが激情に駆られているのは

僕のせいだ。今できることはない。

「ありがとう、藤巻さんっ」

対峙する二人を残して、僕は栗本家を後にした。

\*\*\*

二人の少女が対峙していた。

一人はメイド服、もう一人は機能的な黒服を着ている。張り詰めた空気の中、木梨枝が先に口を開いた。

「始めに教えてほしいな。どうしてここに来たの？」

雪菜は落ち着いた調子で答える。

「もはや隠すこともないでしょう。私はカラープロダクションの協力者です。イノセンスの動きを警戒してパトロールを行っていた時に、開け放しのドアの向こうに見覚えのある靴が転がっていたんです。確認したら、かかとに乃木坂さんの名前が書いてありましたよ。あの人らしいです」

「でも、ただキリエの家に遊びに来ただけかも知れないじゃない。それを詮索するのはどうかと思うな」

「開け放しのドア自体が尋常ではありませんし、よほどのことがない限り、乃木坂さんが靴を乱れたまま放置するということはあり得ません」

木梨枝は興味深げに雪菜を眺めた。目の奥に暗い光を宿して。

「そっかあ、よく見てるんだね、乃木坂くんのこと。好きなの？」

「……尊敬しています」

「それだけ？ 雪菜ちゃんを見てれば分かるよ。無関心を装って、学校ではいつも乃木坂くんのこと気にかけてたよね」

木梨枝の精神状態に危うさを感じた雪菜は、努めて穏やかに振る舞う。

「落ち着いてください。私はただ、乃木坂さんの意思を尊重してい

ただきたいだけです」

「そんなこと言って、ほんとにキリエから乃木坂くんを取り上げようとしてるんでしょ？ 騙されないんだから！」

叫びざまに木梨枝は雪菜に組みついた。彼女の能力が雪菜から体力を奪う。

「……っ」

「あははっ、どう？ 苦しい？ 苦しいよねえ、キリエの体は人を殺すんだよ」

雪菜は苦悶の表情を浮かべたが、すぐに木梨枝を体から引きはがした。荒く息をつく雪菜を見据えて、木梨枝はふんと鼻を鳴らす。「口ぶりを聞いていると、藤巻さんもディーヴァなんだよね。さすがに普通の人みたいに一瞬で卒倒とまでは行かないなあ」

傷を負えば自動的にルネサンスで再生する雪菜の体だが、今のダメージは自動修復の対象外だったらしい。自らの意思でルネサンスを発動させ、体調を整える。その様子を見ていた木梨枝は黄色い声を上げた。

「すごい！ 雪菜ちゃんはキリエと逆で、治す超能力をもらったんだね。いいなあ、うらやましいよ」

普通に教室で談笑しているかのような話し方だが、ところどころに暗い感情が見え隠れしている。雪菜はいつでも反撃できるように警戒を強めた。

「雪菜ちゃん、タナトスって言葉知ってる？」

「死への欲求、ですね」

「そう。キリエは別に命を『吸い取っている』わけじゃない。それなら、みんなが死に向かうのは、キリエにさわられると肉体が持つタナトスが目覚めるからなんじゃないかって思うんだ。世界の仕組みがそういう風にできてる。キリエはきっと、世界そのものから嫌われてるんだね。雪菜ちゃんも、教室では仲良くしてくれたけど、本当はキリエが嫌いなんでしょ？ だから邪魔をするんだ」

「それは違います。友達だから、止めるんです」



それを聞いて木梨枝は高らかに笑い声を上げた。ひとしきり笑いを吐き出してしまうと、ふっと表情を破棄する。そして、蔑むような視線で雪菜を射抜き、低い声で言い捨てた。

「偽善者のくせに」

「……！」

「ふふつ、その善人面剥いたら、何が出てくるんだろうね！」

彼女は前進し、勢いを乗せて手刀を打ち込む。雪菜は予想外の素早さに一瞬たじろぎながらもバックステップで回避し、間合いを取った。木梨枝はテーブルの上に置いてあった皿を雪菜に投げつける。高速の飛び道具と化したそれを雪菜はたやすく受け止めるが、短く呻いてうずくまってしまった。皿の割れる音が響く。

「そのお皿にはタナトスの力を纏わせてあるんだよ。雪菜ちゃんの体、いつまで持つかなあ？」

再生する間もないまま、続けて飛んできたフォークが雪菜の右胸に突き刺さる。

「くっ……う」

「ああ、ごめんね？ 女の子の大事なところなのに」

雪菜は激しく肩を上下させながらフォークを抜き取った。血が流れ出す。ルネサンスの光と共に傷は塞がる。しかし、彼女には目に見えないダメージが蓄積していた。脳の状態を「再生」と記憶が飛んでしまうため、脳だけはルネサンスの守りから外れてタナトスに蝕まれているのだ。

廊下へと続くドアの向こうに駆け込む雪菜を、木梨枝の狂気じみた声が追った。

「どうしたどうした！ 逃げるしか能がないの？」

木梨枝は部屋にある限りのフォークを服に忍ばせてから部屋を出る。廊下は複数の部屋につながっているが、物音がしたのですぐに行き先は分かった。店の方だ。

愛しいあの人を手に入れる、その前に邪魔者を排除する。何かに追い立てられるように、彼女の心はそれだけを考えていた。

扉を開けると、そこには誰もいなかった。可愛らしい丸テーブルがいつも通り静かに並んでいるだけ。油断して三步進んだところで、

「かはっ」

床にひれ伏してから状況を把握する。扉の影に隠れていた雪菜に、モップで殴り倒されたのだ。

雪菜は木梨枝に直接触れないように、モップで背中を押さえつけた。

「待ち伏せなんてずるいよお……」

「すみません。でも、再び乃木坂さんを襲う可能性がある以上、あなたを放っておくわけにはいかないんです」

雪菜の顔を見上げた木梨枝は、今にも泣き出しそうな声で哀訴する。

「あの日からずっと、乃木坂くんへの想いがキリエを支えてきた。

乃木坂くんがいなかったら、キリエはきっといじめられっ子のままだったよ。ねえ、分かるでしょ？ キリエには乃木坂くんしかないの。こんなに好きなのに、何で邪魔するの？ そんなにキリエのことが嫌い？」

「そういう問題じゃありません。栗本さんは一方的すぎます。本当の愛というのは、相手のために行動するものではないのですか？ 先ほどのあなたの行為は乃木坂さんを怯えさせただけです」

「そんなの分かってるよ！」

木梨枝は声を荒げると、続けて憎々しげに呟いた。

「雪菜ちゃんにはキリエの気持ちなんて分からないよ。可愛くて優しく、何でも思い通りになりそうな雪菜ちゃんには」

雪菜は答えなかった。

重苦しい沈黙を破り、遠くでファンファーレが鳴り響く。

「東条胡桃のトークライブが始まるね。雪菜ちゃんはMP効く？」

「いいえ」

「なあんだ。キリエも効かないから、雪菜ちゃんが骨抜きになった

すきを突いてやつつけようと思ったんだけどなあ。ディーヴァにはMP効かないのかもね　残念！」

木梨枝は袖から取り出したフォークを上方に放った。

雪菜はとっさに身をおかわすが、同時に木梨枝を解放してしまう。木梨枝はにやりと笑い、五本連続でフォークを投げた。雪菜はモップでそれらを弾き飛ばし一気に間合いを詰める。木梨枝は素早く新たなフォークを構え、得物を振り上げる敵の脇腹を狙った。が、雪菜の方が早かった。

キン！　冷たい金属音を残して、彼女の手からフォークが叩き落とされる。

雪菜はそのまま大きく踏み込み、熾烈な突きを繰り出した。モップの柄が木梨枝の腹部にめり込み、体を吹き飛ばす。木梨枝は手前の丸テーブルにぶち当たってうずくまった。

「最後のチャンスです。落ち着く気はありませんか」

雪菜の問いに、ゆらゆらと立ち上がった木梨枝は迷いなく答える。その瞳は信念と言うよりは妄信に彩られていた。

「ないよ。雪菜ちゃんに勝たなきゃ、キリエは幸せになれないもん」

雪菜はその意味を測りかねたが、すぐにこの場に意識を集中させた。木梨枝が放った二本のフォークがまっすぐ雪菜に飛んでくる。しかし彼女はよけるでもなく、さらにモップを手放した。

雪菜は左右の手を交差させてフォークを掴み取り、平然とした顔で木梨枝を見やる。ワテンポ遅れて、モップが音を立てて床に倒れた。

「どうして!？」

「遅まきながら気づきました。このフォークだって、過去の状態に戻せばただのフォークになるんです」

木梨枝は狼狽していた。相手は素手では自分に触れてこない。投擲物にタナトスの力を込めても、ルネサンスで「なかったこと」にされてしまう。戦闘技能そのものは雪菜の方が一枚上手。タナトス

の力が届かないなら、自分は圧倒的に不利になる。

「わあああつ！」

彼女は倒れている丸テーブルを掴み、叫喚しながら力任せに投げつけた。雪菜は大きく跳躍して宙を舞う。美しい髪を翻しながら空中で身をひねり、フォークを構えて、ある一点に狙いを定めた。

弾丸のような勢いで、フォークはシャンデリアの基部を破壊した。

豪華なシャンデリアはダイヤモンドのように輝きながら木梨枝の上で落下する。

。

ガラスが粉々に砕け散り、再び静寂が訪れた。

動かなくなつた木梨枝に雪菜は話しかけた。

「痛いでしょうが、意識はありますね？」

かすかにすすり泣く声が聞こえる。シャンデリアの破片は木梨枝の肌を切り裂き、体中に裂傷を作っていた。

「目は醒めましたか？」

「ごめ……んなさい……」

木梨枝は今までになく弱々しい姿を見せた。心の奥底に隠れていた弱い本性が、砦を失つて外の世界に現れたのだ。

「怖かつたんだ……。初め会った時から、雪菜ちゃんが怖かつた。

キリエは全部負けてるって思った。雪菜ちゃんが放課後乃木坂くんに会つてるところもこっそり見てた。雪菜ちゃんはいいい子だから、きっと乃木坂くんはすぐに好きになつちゃう。キリエは焦つてた。一度他の女の子とつき合い始めたら、乃木坂くんは一生キリエになんか振り向いてくれないんじゃないかって。雪菜ちゃんは悪くない。悪いのはわがままなキリエの方。ごめんね、タナトス、苦しかったよね……」

雪菜は静かに彼女の懺悔を聞いている。

「あんなことしたら乃木坂くんに嫌われちゃうだろうなって、分かつてた。だけど、他にどうしたらいいのか分からなかったの。だっ

て、乃木坂くんを失ったら死んじゃう。キリエにも居場所があるって、そう信じさせてくれたのは、乃木坂くんだけだったから。でも、違うつて分かったよ。キリエの居場所なんて、ないんだ」

木梨枝は嗚咽に声を詰まらせた。

「世界はキリエが幸せになることを許さない！ キリエが欲しいものは、全部手からこぼれ落ちていく。大好きだったお父さんはキリエを気味悪がって家を出て行っちゃった。お母さんはびくびくしてキリエに近づこうともしない。クラスのみんなも結局は東条胡桃に夢中。乃木坂くんだって、いつかは……」

雪菜は彼女の上のシャンデリアをどかし、上半身を抱き起した。そして優しく抱きしめる。柔らかな感触に驚いた木梨枝は小さく声を上げた。

「えっ、な、何して……？」

「安心してください」

彼女の体はまばゆい光を帯びていた。連綿とルネサンスを身に纏って、木梨枝の体から滲むタナトスの力を相殺しているのだ。それだけではない。木梨枝は自分の傷までもが癒されていくことに気づく。我が子を慈しむような雪菜の細腕が、木梨枝に安心感を与える。

見渡せば、辺り一面が温かなルネサンスの光に包まれていた。範圍が広いため一瞬では行かないが、ゆっくりと店が元の姿を取り戻していく。壁に刺さったフォークは抜け落ち、その歪みさえ正された。二人の周囲に散らばるガラスのかけらは、煌めきながら浮き上がり、天井でシャンデリアとして結合する。幻想的な情景に、木梨枝は夢を見ているような気分になった。

「栗本さんなら大丈夫です。今からでも手に入りますよ。ぬくもりも、幸せも」

それは雪菜自身が身をもって知ったこと。

命と心があれば、未来は切り開ける。

「乃木坂さんとは、ゆっくり親交を深めてください」

「応援してくれるの？ キリエ、あんなひどいことしたんだよ？」  
雪菜はにつこり笑って見せた。曇り一つない、澄み切った笑顔だった。

「もう仲直りです。だって私たち、友達じゃないですか」

木梨枝は自分から雪菜に抱きつき、幼子のように泣きじゃくった。胸に抱えていた苦しみが、全て流れ出てしまいうくらいに。

\*\*\*

僕は栗本さんに連れられてきた道を引き返していた。

途中で華やかなファンファーレが鳴り響き、びっくりして飛び上がるが、すぐに東条さんのトークライブが始まる合図なのだと気づく。急がなくなちゃ。道順は全部覚えていたので、迷うことなくポスターの位置まで戻ってこられた。

『神聖アキバ帝国建国祝典開催！ くるたんの路上トークライブはあちら』

ついさっき見たばかりなのに、このポスターがやたら懐かしく感じられるのは何故だろう。僕は矢印の方向に小走りで進む。

あの二人、大丈夫かなあ……。栗本さんは何だかすごく思い詰めている感じだったし、藤巻さんもあの状態の栗本さんを放っておくとは思えない。非力な女子高生同士ならまだしも、二人は高い運動能力の持ち主だ。殴る蹴るの喧嘩になったらお互いただでは済まされない。藤巻さんにその気がなくても、栗本さんが暴走したら乱闘に発展する恐れがある。

栗本さんは、きっと何かショックなことがあったんだよね。明日になって、心が落ち着けば、いつも通りの元気なクラス会長に戻ってくれる。ずっとあのまま治らないなんてことはない、よね。

僕はもう一度平和な日々を取り戻したい。でも、今僕にできるのは、東条さんのライブを遠くから見守ることだけ。僕は非力だ。ト

「クラブには大勢の観客が来ているから、最前列まで行って東条さんに会うこともできない。」

それでも0と1は違う。

僕はあきらめない。できるだけ早く色川社長の信頼を取り戻して、東条さんと絆を結び直す。そしてもう一度下僕にしてもらった暁には、今日の話をするんだ。素晴らしい祝典だった、僕は見ていたよ。そのためには、いてもいなくても変わらないような人混みの中であつても、僕はそこにいるべきだ。

ようやく僕は会場らしきビル街についた。と言っても、人が多すぎて東条さんの姿はおるか、前方三メートルさえ見通しがつかない。何万人あるいは何十万人いるのか分からない人々の背中のずっと向こうから、東条さんの可愛い声だけが聞こえてくる。

「このなかで、もう国民証もらったよーってひと、どのくらいいますかー？」

「はいと声を上げ、僕の周りの人が一斉に手を上げる。すごい、もうこんなに！」

「はいっ！」

ひととき威勢がよく、その上聞き覚えのある声がした。何と、すぐ近くで池田くんが手を挙げていた。ちょうど隣にいた人の影で隠れていたようだ。

「池田くん、こんにちは」

声をかけたら、「おお」と嬉しそうに笑ってくれた。

「お前も来たか！ やっぱり、くるたんのよさを知るにはライブが一番だよな！ つつても、この位置からじゃよく見えねえけど。なあ、俺よく見える場所知ってたんだけど、乃木坂も一緒に行くか？」

あまりの幸運にびっくりして、思わず訊き返す。

「いいの！？」

「いいとも！」

「行く！ ありがとう！」

僕は池田くんの親切に甘えて、彼の後についていった。

\*\*\*

ぼくはノクターンの一員としてではなく、イノセンスの代表者として角谷さんとOp・4を出迎えた。Op・4は布でくるまれた大きな荷物を肩に担いでいる。

「おお、持ってきてくれましたか。ご苦労さま」

荷物を受け取ろうとしたら、彼は「重くて朝比奈さんには持てないよ」と笑って、部屋の中まで持っていてくれた。

「彼が持つと軽そうに見えるんですがねえ」

「当然さ、あたしが鍛えてるんだから」

角谷さんはOp・1に逃げられたというのに、何故かあれ以来ぴりぴりとした雰囲気は抜けて、何歳も若くなったようだった。

「最近機嫌がいいですね」

「そうかい？ まあ、ふっきれたって言うかね……」

やけに艶っぽい反応をされて戸惑っていたところに、Op・4がやってきて茶々を入れる。

「角谷さん、本当にやりたかったことが分かったんだって。結婚して子供生みたいんだってさ」

「ば、馬鹿！ そんなこと人に言うんじゃないよ！」

「これから合コン行つて、いい男ゲットしてくるんだって」

「やだ、やめなつて！」

ぼくは愉快的気分になった。これこそが自然な人間の姿。望みを持つ者はみんな美しい。

「はっはっは、なら早く行つてください。あなたの望みが叶うことを祈っていますよ」

「あ……ありがと……」

顔を真っ赤にした角谷さんと、ちよろつと舌を出しておどけるOp・4を見送つてから、ぼくは届いた荷物の布をはぎ取った。



現れたのは不思議な機構が仕込まれた装置だった。ノクターンの資金と技術力を借りて開発してもらった、ぼくの望みを叶える鍵。初めは東条胡桃に萌えなくなる装置が欲しいと思っていたが、偶然の発見から生まれたこの装置はそれ以上の価値を持っている。

このスイッチを押せば、東条胡桃は地獄を見ることになる。彼女の心には大きなトラウマが残るはずだ。ひよっとしたら死ぬかも知れない。少なくとも、芸能活動を続けていくことはできなくなるだろう。

秋波原跡に集結した何十万という人々は、この歴史的瞬間の当事者になるのだ。ぼくは心の中で、恍惚と彼らに語りかけていた。

東条胡桃がいなくなれば、彼女に支えられている脆弱な平和などあつという間に崩れます。そうしたら、みんなで人類の無罪と自由を謳歌しましょう。法律なんて東条胡桃の萌えに比べれば大した枷にはなりません。世界中の人間が、東条胡桃から解放された反動でそれに気づくでしょう。ぼくはその時が楽しみではありません。人類の向かう先は平和か滅亡か、命ある限り見届けようではありませんか。

さあ、東条胡桃さん。

ぼくは本当のあなたを知りませんが、普通の女の子として生きるのも一興ですよ。これを機会に引退を考えてみてはいかがでしょうか。

スイッチ・オン。

\*\*\*

僕たちはデパートの屋上に向かっていた。

「俺の兄ちゃんこのそば屋で働いてるから、このデパートにだけは詳しいんだよ。屋上からならバッチリくるたんを見られるはずだ！」

何でも池田くんの家系は代々麵類の老舗を受け継いでいて、綿一お兄さんと綿二お兄さん<sup>めんじ</sup>はすでに修行に出ているそうだと移動している時に話してくれた。

ほどなくして僕たちは、さわやかな風の吹く屋上に到着した。早速フェンスの方に寄っていつて下を見る。東条さんの衣装は天使のコスプレで、ステージの装飾も天国風だった。色とりどりの風船や、東条さんがトーク中に座るための大きな雲形クッションが見る者を和ませる。

装飾はステージ上に留まらなかった。ステージの周りのビルとビルにかけてはロープが数本張り巡らされており、旗や造花などの飾りが吊るされている。このビルの二階からもロープは伸びていた。旗は神聖アキバ帝国の国旗だろうか。白地の中心に天使の環を冠した桃色のハートが描かれており、その上部からは環をくぐるように新芽が萌えている。ハートの両脇にはデフォルメされた天使の羽根が添えられていて、とてもキュートなデザインだ。

「ありやー、高すぎてよく見えねえ」

僕は目がいいので、そんな旗の柄までばっちり見ていたのだが、池田くんには遠すぎたらしい。

「ま、何も見えないよりはいいか！ 音も聞こえるしな。おーし、くるたんの萌え萌えなトークを聞こうぜ！」

東条さんは、歌とトークを繰り返して会場のボルテージを上げていった。今日は『ひとりぼっちの僕らは』のようなしんみりした曲は封印し、ポップで可愛い曲を中心にプログラムを組んでいる。とにかくみんな盛り上がるということだ。

東条さんがトーク中にMPを使ったり、MPを帯びた歌声が聞こえてきたりすると、池田くんは僕の隣りで「萌えー」と喜んだ。

「ほら、乃木坂も言ってみろよ、萌えーって」

脇から小突かれて、恥ずかしながらも言ってみる。

「えっと……もえー」

「そうそう、その調子だ！ 『萌え』って口に出すと、世界が楽し

く見えてくるから不思議だよな。生きてることが嬉しくなるっていうかさ。ってうをおおお！　今くるたんが手エパタパタ振ったあ！　萌ええエえうおおおおああ」

ものすごく萌えているのだと思っていたら、様子がおかしい。よく見たら、池田くんは人とは思えないほど滑稽な表情を浮かべて「うばあー」と奇声を発していた。

「えっ、どうしたの？　大丈夫！？」

滑稽と言うのはどの程度かと言うと、もはやお面であると言われる方が納得できるくらいである。具体的に示すと、顔をしかめたアルパカが大きく口をあけているような顔だ。

これは尋常じゃない。

滑稽を通り越して怖い！

彼は僕の言葉も理解していないようで、ひたすら呻きながらフェンスにガシガシぶつかっている。下に興味があるようだ。つられて見下ろすと、ビル街では凄絶な光景が繰り広げられていた。

観衆が全員池田くんと同じ状態になって、低い声を漏らしながら東条さんに向かって歩いている。まるでゾンビの波が押し寄せているようだ。東条さんは怯えて後ずさりするが、マイクを握り直して観衆に語りかけた。

「みんなあ、どーしたの？　ステージに来ちゃダメだよ！　みんな」

MPを使えば使うほど、人々はよりゾンビのように蠢く。これはどうしたことか。MPの効用が変化している？　何故？

唯一分かるのは、MPの使用は逆効果だということ。しかし、東条さんはそれに気づいていない。MPを使えば人々をなだめられると思い込んでいる。

きつとミツルさんや色川社長もアルパカゾンビ状態だろう。東条さんを助けられるのは僕しかない。

だがどうする。ここからでは無言は届かない。あの群衆を掻き分けて東条さんのもとまで辿り着くだけの体力も、僕にはない。何

とかしてステージ上に行けないだろうか……。

ステージ周辺を見渡すと、神聖アキバ帝国の国旗を吊るすロープが目に残った。

一応、このビルから出ているロープはステージの上を通っている。

理論的には、あのロープを伝っていけばステージに行ける。

……。

近くで見てみて、それから考えよう。

池田くんをこの状態でほったらかしにしておくのは忍びなかったが、フェンスもあることだし屋上から落下するということはないはずだ。

「ごめんね。何とかするから」

僕は池田くんを残して階段を下りていった。

屋上から見た位置関係の記憶を頼りに、ロープのつけ根が外側にありそうな場所を割り出す。

窓から外をのぞくと、あった！ 留め具は割としっかりしているように見える。人間がぶら下がっても耐えられるかどうかは甚だしく心配だが、これしか手は思いつかない。

……僕は体重軽いし、うん、きっと大丈夫。

僕は窓を開け放し、窓枠によじ登った。うわぁ、これだけでも怖い。少しでも足を踏み外したら、転落するか股を窓枠にぶつけるかして悲惨なことになる。僕は慎重にロープへと腕を伸ばした。試しに引っ張ってみるが、びくともしなかった。

ぶら下がりながら進む方式は、僕の腕力では無理だ。十数秒で落っこちる。となれば、ロープの上に胸も腹も乗せ、しゃくとりむしのように前進するのがいいように思える。それでもバランスを崩して落っこちそうだが、何もせずに東条さんがゾンビの波に吞まれていくところを見ているなんてできない。

僕は意を決して窓から足を離し、ロープに抱きついた。勾配の関

係上、頭が下でお尻が上という向きに体が傾く。頭に血が昇るし、ロープが体に食い込んで痛い。

「ひええ」

手と足を使つて進もうとするが、少し進んだだけで体の向きがくると反転しそうになった。何とか持ちこたえているのは、ひとえに集中力のおかげだ。

アルパカゾンビたちは僕の行動に全く気づいていない。でも、彼らは着実に東条さんに近づいており、すでに二十人くらいはステージに乗り上がつて東条さんに迫っている。その二十人の中にミツルさんと色川社長が入っているのを目にして、僕は足を滑らせそうになった。やはりあの二人もこの謎の現象には逆らえなかったか。

ステージまであと二十メートル。東条さんはゾンビに追い詰められ、悲鳴を上げながらMPを放出している。

「東条さん！」

ここからなら声も届くはずだが、東条さんには聞こえていないようだ。目の前に迫る危機で精一杯になっている。

「MP止めて！」

もう一度叫んだとき、東条さんの大きな瞳が僕を捉えた。唇が小さく動く。

「……乃木坂？」

気づいてくれた！ そう思った矢先、出発点側のロープの留め具が弾け飛んだ。

「え……ひえええええっ！？」

僕の体は振り子のように弧を描いて、一気にステージまで飛んでいく。近道できたなんて喜んでいる場合じゃない。このままでは床に大激突だ。あ、手からロープ抜けちゃった。

死ぬ

！！

息の止まるような衝撃が僕を襲った。

……あれ、生きてる？

恐る恐る目を開けると、僕は淡いピンク色のクッションに埋もれていた。雲型クッションが衝撃を受け止めてくれたのだ。驚くべきことに、骨一つ折れていない。

「だいじょーぶか！？」

東条さんが駆け寄ろうとするが、群衆に取り囲まれてしまう。倍に増えたゾンビたちは大きく口を開け、奇声を上げながら東条さんに手を伸ばした。

近くで見ると迫力が違う。彼らは虚ろな目で東条さんをじつと見つめ、嫌がる彼女の体中を撫で回した。

「ぐーおおオオオ」

「さわるなっ！ にうにうーっ」

すっかり取り乱した東条さんは、MPを乱発した。

「MP使っちゃだめ！」

僕は全力でゾンビを一人押しのけ、東条さんの前に体を割り入れる。相変わらず他の方向からは人々の手が伸びてくるが、僕が視界に入ったことで東条さんは少し落ち着いてくれた。

「どーしてだ？ MP使わなかったら、みんなますます言うこと聞かなくなるんじゃない……」

「逆だよ、MPがこの人たちを錯乱させてるんだ。目的は東条さんを撫で回すことみたいだね」

「MPのせい？ ボクの力が穢れちゃったのか？」

東条さんは目を潤ませた。僕は彼女が心を痛める前に否定する。

「ついさっきまでは普通にみんな萌えてたから、違うと思う。イノセンスがMPに対抗しようとしてるって話、藤巻さんから聞いてるよね？」

「うん。雪菜はイノセンスの動きをケーカイしてパトロールに行ってる」

「イノセンスは、MPを消すんじゃないくて、別のベクトルの力として働かせるような装置を作ったんじゃないかな。それを今どこかで

使ってる。根拠はないけど……。少なくとも東条さんの力は穢れてなんかないよ！」

東条さんは少し自信を取り戻した様子で、僕の言葉に頷いた。

「ん。ボクは乃木坂のいうことを信じる」

まさか久しぶりの会話がこんな内容になるとは。でも無事で何よりだ。僕がくるのがあと一分でも遅かったら、もっと大勢の人が東条さんに押し掛けてきて、小さな彼女の体はつぶれてしまっていたかも知れない。

「ほら、しばらくMP使わないでいたら、みんな元に戻ってきたよ」

人々はごく普通の顔になり、自分が東条さんを撫で回していることに気づくと慌てて距離を取る。お互いに顔を見合わせ、とんでもないことをしてしまったと顔面蒼白になった。

「俺たち何やってんだ？」

「ごめんね、くるたん！」

「ごめんなさい！」

次々に上がる謝罪の声。東条さんは地獄から解放されたことで呆けながらも、すぐにアイドル精神を奮い立たせてファンたちに笑いかけた。

「いいよ！ ゆるしてあげる！」

おお、と、数秒前までアルパカゾンビだった人々は涙を流して喜んだ。あれほどショックを受けていたのにもかかわらず、ファンの前では気丈に振る舞う東条さんを見て、僕も心動かされずにはいられない。

「もしかして祝典は打ち切り？」

ファンの一人が呟いたその言葉をきっかけに、ざわめきが広がっていった。

「えっ、そんなのヤダ」

「くるたん、続きやってよ」

「私たち、本当にくるたんのこと大好きなんです」

「お願いします！」

ファンの熱烈な要望に応えて、東条さんはマイクを握った。そして高らかに宣言する。

「祝典はまだまだつづくよーっ！」

人をがっかりさせるようなことはしない。それでこそ僕が慕ってやまない東条さんだ。

\*\*\*

雪菜と木梨枝が外へ出ると、ライブ会場の方から異様な叫び声が聞こえてきた。ファンが胡桃に萌えている、どころではない騒ぎだ。二人は顔を見合わせてライブ会場へ走る。

そこで目にしたものは、自我を失った人々が何かに操られているかのように、ひたすら胡桃を目指して蠢いている光景だった。

「なに、これ……」

「イノセンスが、動き出したんです」

後方にいたファンが直進してきて木梨枝にぶつかり、タナトスの力で意識を失う。どうやら障害物をよける判断力すら奪われているらしい。

「これじゃあ乃木坂くんまで巻き込まれちゃう！」

焦燥感を募らせる木梨枝に、雪菜は冷静に尋ねた。

「栗本さんは前にイノセンスと接触したことがありますよね。どこに団員がいるか、心当たりはありませんか？」

木梨枝ははっとして、あるビルの最上階を見つめる。

「キリエがイノセンスからチラシもらった場所……。もしかしたらそこかも」

「行きましょう。迷っている時間はありません」

そこに解決の糸口があると断定できたわけではないのに、雪菜はファンをかわしながら疾走し始めた。後から追ってきた木梨枝はか



らかい半分に声をかける。

「雪菜ちゃん、冷静なふりしてるけど、ほんと結構慌ててるでしょ」

「えっ……」

凶星を突かれて、雪菜はさつと顔を赤らめた。ノクターンのミッションではそのようなことはなかったのに、どうして今に限って、という思いがよぎる。

「いいよ、キリエがちゃんとフォローしてあげるから！」

雪菜は予想外の申し出に驚いたが、すぐに微笑みを返した。

「頼りにしてますよ」

木梨枝は頷くと、目指す部屋の窓を凝視した。胡桃のライブにも行かず屋内にいる人影があつたなら、そこでイノセンスの活動が行われているという確証が持てる。

「いた！ 雪菜ちゃん、人いるよ！」

雪菜は木梨枝を信頼していたため、あえて確認はしなかった。二人は常人の目には止まらぬ速さで駆け出す。彼女たちの絆は固く結ばれ、友達から親友へと変化を遂げていた。

「朝比奈さん……」

「また会えるとは思っていませんでしたよ、Op・i」

ビルの最上階で、彼らは出会う。

朝比奈は嘲笑うように雪菜の姿を眺めた。

「今度はカラープロダクションの人形になったわけですか。せつかくノクターンを抜けたというのに夢がありませんね。人形の相手には、人形がふさわしい」

そう言うとは彼は、ポケットから象牙色のリモコンを取り出した。

見覚えのあるその形に、雪菜は歯噛みして身構える。

「ウェポンロイド……っ！」

「え？ 何？」

朝比奈がボタンを押すのと同時に、壁際に並んでいた数体の等身

大人形が動き出し、少女たちに飛びかかってきた。

雪菜はOp・4から譲り受けた夜色の銃を抜き、木梨枝に襲いかかる自動戦闘人形の四肢を打ち抜く。アームに損傷を受けた人形は、ぎこちない動きながらも立ち上がり、得物を倒そうと暴れ始めた。一瞬遅れて状況を把握した木梨枝は、構えを取って高らかに叫ぶ。

「お母さん直伝のメイド拳法、見せてあげる！」

彼女は突っ込んできた人形の腕を掴み、その勢いを活かして床に叩きつけた。その衝撃で床板はあっけなく砕け散り、コンクリートにまでひびが入る。しかし、ウェポンロイドはまだ活動を続けていた。

「ブレインは硬い外殻に覆われていて攻略が困難です！ 手足を狙ってください！」

「分かった！」

木梨枝が投げたナイフは計算し尽くされた角度で関節部に刺さり、人形の回路を断ち切った。その様子を見ていた朝比奈は、興味深げに微笑んだ。

「ほう、その技……。もしかして、君のお母さんは先代Op・1ですか？」

「オーパス？」

「カラプロから大金を得たのではないですか？」

「あつ、そうだよ！ それでキリエが生まれたんだもん」

朝比奈にはその言葉の意味は理解できなかったが、先代Op・1が娘を持って自由に暮らしていると考え、にたりと笑みを浮かべた。

確実にウェポンロイドの動きを止めながら、雪菜が釘を刺す。

「それを知ったところで、あなたには栗本さんやご家族をどうにかすることはできませんよ。今ここで、私が止めます」

「いや、先代Op・1には敬意を表しますよ。望むままに生きる、まさに理想の生き方だ。それに比べて君は……。君にはこの装置に

秘められた未来の価値も分からないでしょうね」

雪菜は開け放した窓に向けて置かれた装置を一瞥し、それから静かに一言、現実を教えてやった。

「朝比奈さん、外を見てください。もうその装置の意味はありませんよ」

反射的に朝比奈は窓の外に目をやる。

装置の作用で胡桃を撫で回そうとしていた人々が、我に返ってステージから拡散していくところだった。

「なっ……東条胡桃が人を萌やすのをやめた!？」

木梨枝も事態の変化を知り、手を叩いて喜ぶ。その歓声が朝比奈の神経を逆なでした。

「乃木坂くんがやめさせたんだ! さっすが乃木坂くん!」

「くっ……」

気がつけばウェポンロイドも全滅。朝比奈は窮地に追い込まれていた。迫りくる絶望に、彼は初めて怒りを見せる。

「望みを持たない君がぼくの邪魔をするなんて、ちよつとばかり癪ですよ!」

腰から拳銃を抜き、雪菜目がけて乱射した。しかし一発たりとも彼女を傷つけることはない。雪菜は銃身で弾を弾きながら朝比奈との間合いを詰めていく。そのような芸当に耐えうる銃を、朝比奈は一つしか知らない。

オーパスだけが持つことを許される夜色の銃、夜の女神。ニクス

特別仕様の外装の前では、普通の弾丸などあられのようなものだ。

「望みなら、あります」

「へえ! 何ですか、君がやっと手に入れた望みとは!」

銃口が朝比奈の額を捉える。

「大切な人たちと、一緒にいること」

彼は薄く笑い、弾の尽きた銃を床に投げ捨てた。

「ぼくを警察に突き出しますか? そんなことをすれば、この装置

のことも明るみに出ますが。東条胡桃の萌えが機械で操作できるものだと民衆に知られては、神聖さが失われますね。ならばいつそ、ここでぼくを殺しなさい」

「……」

「どうしたんです、ほら」

朝比奈が自ら額を銃口に押し付けたとき、一体のウエポンロイドがわずかに機能を回復した。動かぬ右脚を引きずり、かろうじて動く左手でもって、主人を害そうとする少女を排除しにかかる。

雪菜が気配を感じた時、すでに人形は腕を振り上げていた。

その腕は、銀の矢と化したナイフによって跳ね飛ばされる。

「フオローするって言ったでしょ？」

背後で木梨枝が親指を立てていた。雪菜は微笑みをもって感謝の意を示し、その表情を保ったまま朝比奈に向き直る。

「あなたの身柄はカラープロダクションが管理します。命の安全は保証しますよ。『誰一人犠牲にしない、世界で一番平和な世界征服』なんですから」

「……いいでしょう。ぼくは弱者として、強者である君の望みに従いましょう」

朝比奈は手を上げて、二人のディーヴァに投降した。

夢が破れた彼の口元には、しかし満足げな笑みが湛えられていた。

\*\*\*

東条さんが僕に相談があると言うので、一度ステージから降りた。ステージ上での輝きはどこへやら、彼女はすっかり参ってしまっている。

「なあ乃木坂。イノセンスの装置が実際にあるとして、それはまだ稼働してるんだろーな、きっと」

東条さんは彼女らしくなく、頭を押さえて重苦しいため息をついた。

「きょうの祝典はぜったいに成功させなきゃいけないのに……。MPなしでどーしたらいいんだ」

「MPなしで、いいじゃない」

僕は軽い調子で言った。本音だからこそその言い方だ。

「東条さんならMPなしでもみんなを萌やせるよ」

「そんなカンタンに言うな」

むっと膨れる東条さんが可愛かったので、僕は幸せな気分で微笑んだ。

「僕のこと、信じてくれるんでしょ？」

「う……」

東条さんは、ついさっき自分で口にした手前、肯定せざるを得なかったようだ。こくりと頷いて、颯爽と舞台に駆け上がる。

「できるだけのことはやる。乃木坂はいちばん前で見守ってる」

仕切り直しのファンファーレが鳴り、トークライブは再開された。

東条さんは本物のアイドルだ。

MPに頼らず、声と身振りだけで観客を虜にしている。

「今日のくるたん、何かいつもと雰囲気違うね。夢の世界から現実界へ降臨したって感じ」

「うん。でも、これもイイ！」

不満を漏らす観客は一人もない。あんなに人を楽しませようと努力している人が、愛されないわけがないのだ。

夢のような時間はあっという間に過ぎ、トークライブは幕を閉じようとしていた。しかし儚いとは感じない。充実した数時間は、忘れることができないほど心に深く刻み込まれていた。この感動は聴衆の心に永遠の炎として宿るだろう。つらいことがあっても、今日を思い返せばまた立ち上げられる。

「さみしいけど、おわかれの時間が近づいてきました。これがさいごの演目です。神聖アキバ帝国国歌、『パックス・アキバーナ』！みんなもいっしょに歌ってねー！」

争い絶えぬ大地に

萌えいずる愛の新芽

泣いてる子も 泣かせた子も

いたいのいたい飛んでけ

みんなで平和になろうよ

願えば 望めば きっと叶うから

パックス・アキバーナ

全てが萌えに包まれたなら

パックス・アキバーナ

みんな笑顔でいられるよね

萌えは世界を救う

笑顔が絶えぬ大地に

咲き誇る愛の花

元気な子も おとなしい子も

笑い合ったらなかよし

世界は思っているより

ずっと 楽しい 遊び場なんだよ

パックス・アキバーナ

どんなにつらいことがあっても

パックス・アキバーナ

愛するところ 忘れないで

萌えはあなたを救う

パックス・アキバーナ

世界をもっと楽しくしよう

パックス・アキバーナ

みんな笑顔でいられるように

萌えは世界を救う

世界の果てまで届きそうな盛大な拍手がビル街で巻き起こった。

その迫力に誰よりも驚いていたのは、当の東条さんだった。光に満ちたステージの上で、温かな歓声を浴びる。柔らかな頬に、一筋の涙が流れた。

「乃木坂！」

東条さんは気づいたのだ。

「ボク、MPなくても愛されてる！」

神聖アキバ帝国      世歴二〇四三年四月二十七日（日）建国。

祝典終了後、僕は色川社長に呼び出された。

東条さんに僕を解雇させ、刺客を使って始末することまで考えたという彼を前にして、緊張しないわけがない。しかし社長は丁寧な物腰で僕にこう言った。

「君は胡桃の命の恩人だ。礼を言おう。そして……乃木坂くんにはすまないことをした。胡桃に君を解雇させたのは私なんだ。私情に走って君と胡桃を傷つけてしまった。大人げない私を許してくれないだろうか」

深々と頭を下げられて、僕はびっくりする。世界に名立たるカラープロダクションのトップが僕に頭を下げているなんて。

「考え直したよ。胡桃は世界平和を望んでいて、君は胡桃の力を引

き出してくれる。君たちは世界のためにも二人そろっているべきなんだ。もう一度、胡桃の友達けぼくになつてやつてくれないかね」

僕は東条さんと顔を見合わせ、同時に顔を輝かせた。

「はい、喜んで！」

ミツルさんは僕の下僕復帰を聞くと、祝福のウインクをくれた。

「吟ちゃん、これからよろしくね！　また女装させてくれると嬉しいわぁ」

そこへ東条博士が息を切らせて駆け込んできた。彼女は一直線に東条さんのもとへ行き、小さな体をぎゅっと抱きしめる。

「胡桃！　ああ、よかった……」

僕の位置からはよく見えなかったが、博士は肩を震わせて泣いているようだった。その姿は僕にとつて意外なものだった。まるで本当の親子のように、博士と東条さんは抱き合っている。

「ママ姉……」

東条さんは博士の腕の中で安心した様子を見せた。やっぱり東条さんにとつて、お母さんは博士なんだ。

東条博士のこと、まだ好きにはなれないけれど、彼女は彼女なりに東条さんのことを愛しているのだということは認めようと思った。

藤巻さんが栗本さんを連れてクラブ関係者のところにやつてきたのはその後だった。なんと二人で協力して朝比奈さんを捕まえたらしく、手続きをしてクラブプロのエージェントに引き取ってもらったそうだ。

話を聞くと大変な喧嘩があつたように思うのだが、帰ってきた二人は仲が悪いどころか親友になっていた。

「雨降つて地固まる、ですよ」

「ねー」

息までびつたりだ。それに、栗本さんはいつもの元気な彼女に戻



つてくれていた。僕にはそれがとても嬉しかった。

栗本さんは僕の方に来て、うつむきながら言葉を紡ぐ。

「……乃木坂くん。昼はあんなことして、ごめんね。今日のことは忘れて、友達からやり直させてくれないかな」

僕が頷くと、栗本さんは切なげに睫毛を揺らして笑顔を作った。

「ありがとう」

それから栗本さんは、自分もディーヴァの一人として世界平和計画に携わりたいと言い出した。僕は驚いたが、栗本さんと初対面の東条さんは特に疑問も持たず、彼女を色川社長のところに連れていく。

栗本さんの姿が見えなくなってから、僕は藤巻さんに訊いてみた。

「栗本さんは萌えを嫌ってたはずだけど……どうして気が変わったのか知ってる？」

「私がお勧めしたんです。彼女は萌えを嫌っているように見えましたが、それは実際には東条さんがMPを持っていることに対する嫉妬だったようで、世界平和計画には大変興味を示されましたよ。それに何より、乃木坂さんの近くにいられますから」

藤巻さんはくすりといたずらっぽく笑ったが、やがてその笑みは深みのある微笑に変わる。

「またみんなで家族のように笑い合える日々が戻ってきます。私にとつてこれ以上の幸せはありません。あなたが戻ってきてくれて、よかった」

僕は少し照れてしまって、ごまかしに夜空を見上げた。

冴えわたる群青の空に、星たちが仲良く並んで瞬いていた。

翌朝、教室に入った途端に僕は喝采を浴びた。

「え？ え？」

状況が飲み込めない僕の周りに、クラスメートがどんどん集まっ

てくる。

「池田くんからチャットで聞いたよ！ 乃木坂くんはくるたんを救ったヒーローだって」

「勇敢にもロープを使って混乱の中に飛び降り、くるたんを守ったんですよ？」

「かけえ！」

「今まで乃木坂って陰気なヤツだと思ってたけど、ほんとはずげーヤツだったんだな」

「くるたんの救世主は俺たちの救世主だぜ！」

ぽかんと口を開けて驚いている僕を、栗本さんと藤巻さんが笑って見ていた。栗本さんはおもむろに立ち上がると、よく通る元気な声で提案する。

「今日のお昼はみんなで輪になって、乃木坂くんとお話ししようか！」

僕はその日、文字通りクラスの輪に入ることになった。

と言っても、僕はあまりしゃべらずに、主に栗本さんが盛り上げてくれたのだけれど。僕は話すより、聞いている方が好きなのだ。

クタオと呼ばれた日からずっと続いてきた、馬鹿にされているんじゃないか、嫌われているんじゃないかという不安な気持ちは、もう感じなかった。

高野さんは、ちよくちよく僕の家遊びに来るようになった。僕と話していると楽しいそうだ。そう言ってもらえると、僕も嬉しい。

「不思議ね。初めは貴方に付随する要素が目当てで話しかけていただけなのに、今は純粹に貴方という人格と話をしたいと思っている。きっと東条胡桃も同じ気持ちだわ」

高野さんは感慨深げに語った。表情はほとんどないに等しいのだが、接しているうちにわずかな雰囲気の変化を感じ取れるようにな

ったのだ。

「初めは孤独からくる依存関係であつても、人は新たな関係を築いていける。相手の心を愛するようになった時、初めて真の絆は結ばれると私は思うの。そして、その絆は世界を織りなす」

高野さんはまっすぐ僕の目を見据えた。

「今度世界を動かすのは、貴方たちの絆かも知れないわね」

「えへへ……」

僕は照れてうつむいてしまった。

でも、きっと本当にそうなのだ。世界で一番平和な世界征服を達成するにはまだまだ時間がかかるけど、日々確実に世界は動いている。カラプロのみんなと、東条さんと、その下僕である僕が、動かしている。

「今日は貴方の家族の話が聞きたい。貴方の父親と、母親のこと」

高野さんのリクエストを受け、僕は自分自身懐かしい気持ちでお父さんとお母さんのラブラブな話をしてあげた。

考えてみれば、お父さんとお母さんに絆があつたから僕が生まれて、その僕が東条さんたちと絆を結んで、世界を動かしているんだなあ。それって何だか壮大かも。

そんなことを言うと、高野さんはほんの少しだけ笑っていた。

## 第七章 はあと（後書き）

エピソードに続きます。

執筆者のサイト『Re:I』

<http://reiyumesaki.jimdo.com/>

## エピソード

初夏のそよ風に吹かれながら、僕と東条さんは緑の丘に座り込んでいた。自然に触れて新曲のインスピレーションを得ようという目的だったのだが、風があまりにも心地いいのでしばらく休憩することになったのである。

「空、青いね」

僕はぼーっとしながらぼーっとしたことを言った。

「雲、白いな」

東条さんもぼーっとしながらぼーっとした返事をした。

さらさらと、草の葉が揺れる。

「かつこよかったぞ」

東条さんは唐突にそう口にした。

「祝典の時、ボクのために命かけてくれたよね。あれ、かつこよかった」

またさらさらと、風が流れる。

「ボクはしあわせものだ」

そう呟いたきり、彼女はしばらく何も言わなかった。何か考え事をしているようだ。そう言えば、もともと新曲を創りにきたんだっけ。

「よし、決まった」

東条さんは立ち上がった。

「曲できたの？」

「ううん。ゴールデンウィークの行き先が決まった。『森羅万象遊園地』に行こう！ 雪菜と木梨枝とお前を連れて！」

東条さんは笑い声を上げながら丘を登っていった。ぼむぼむ揺れる髪とドレスを目で追うが、あっという間に頂上を通り過ぎて、姿が見えなくなる。

「あれっ、乃木坂どこ？」

「ここにいるよ」

僕は東条さんを追って歩き出した。

この幸せな時間が、いつまでも続きますように。

E  
N  
D

## エピソード（後書き）

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました！

執筆者のサイト『Re:I』

<http://reiyumesaki.jimdo.com/>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2311u/>

---

パックス・アキバーナ ～萌えは世界を救う～

2011年7月24日17時57分発行